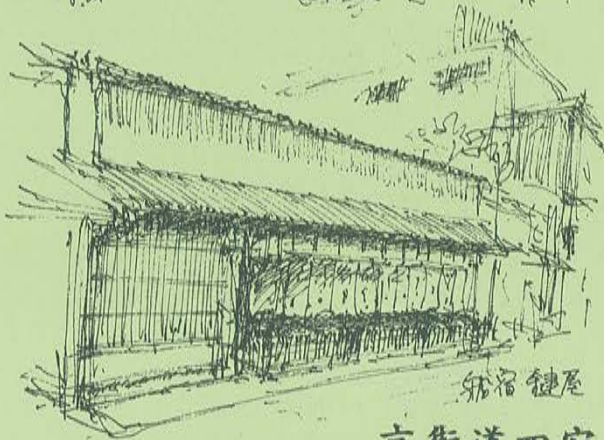
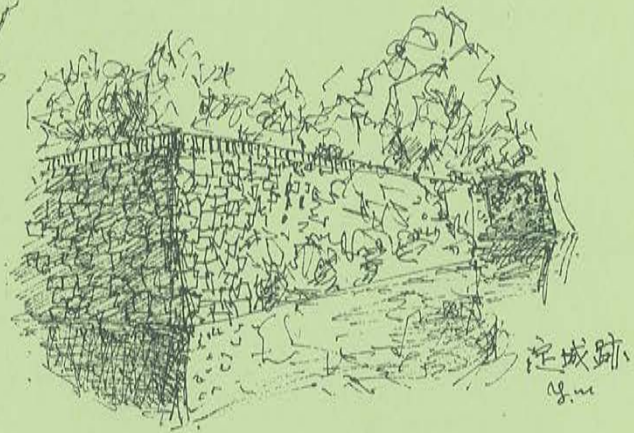
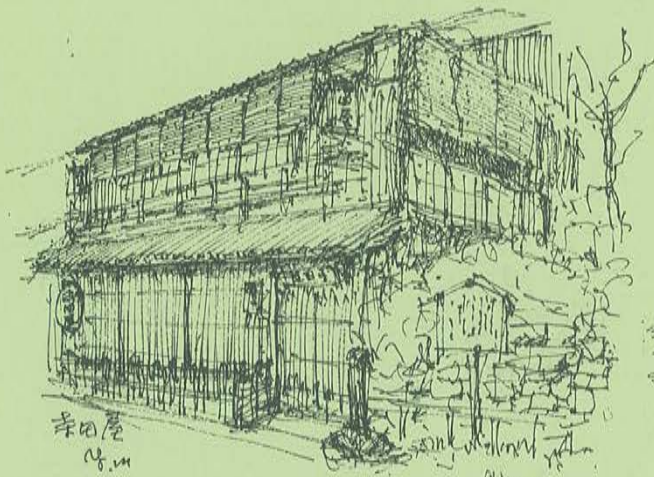


京街道

東海道57次(江戸—大坂)



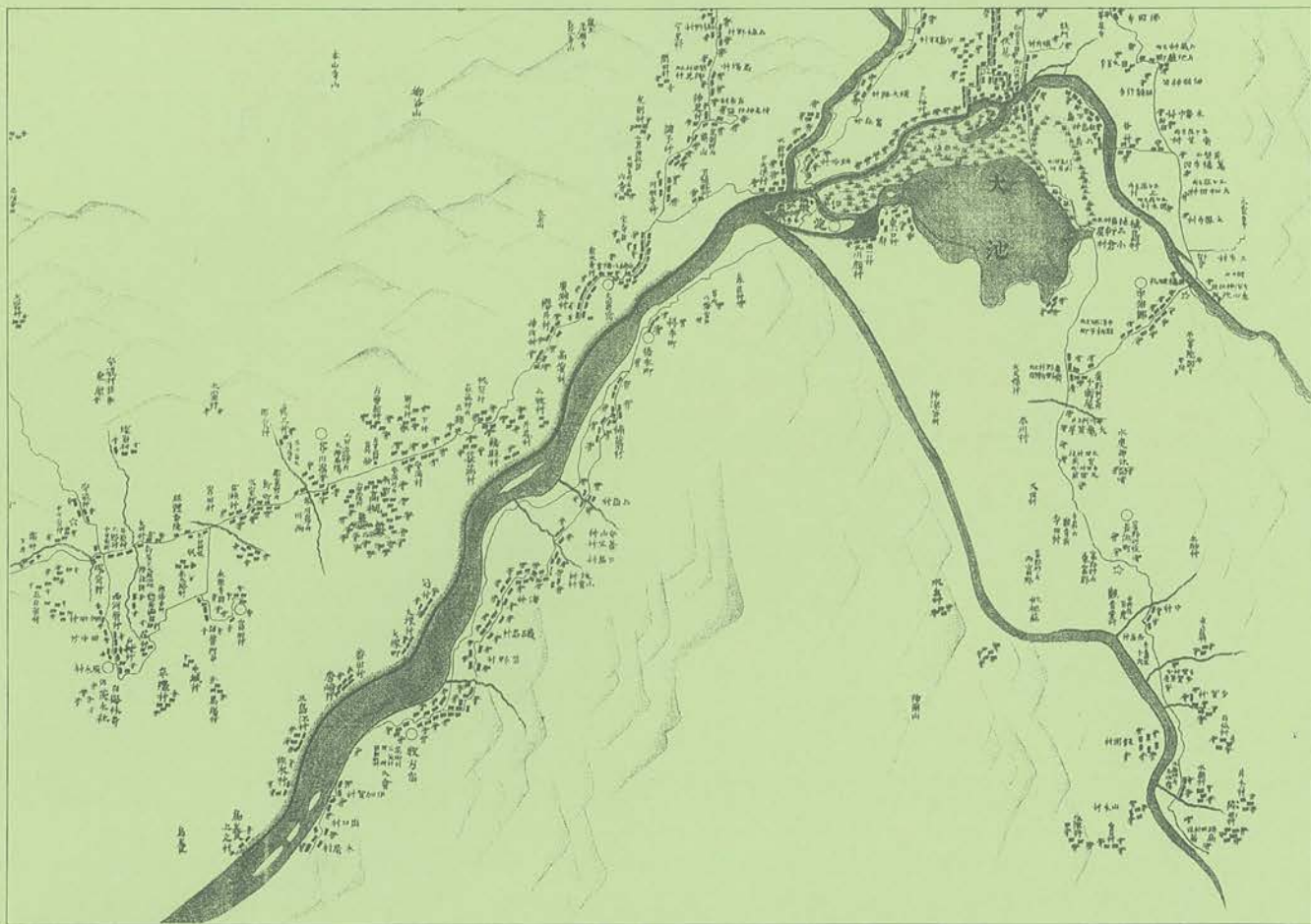
京街道四宿 名所図

伏見宿(寺田屋)・淀宿(淀城址)・杖方宿(鍵屋)・守口宿(難宗寺)
54次宿 55次宿 56次宿 57次宿

四宿

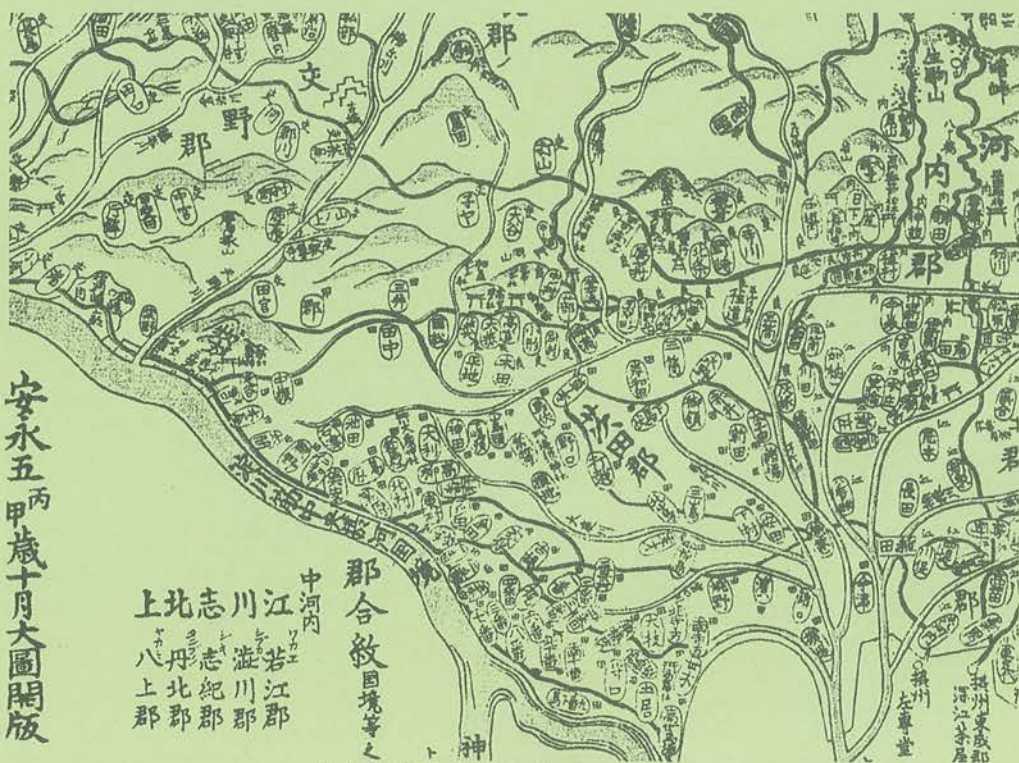
伏見宿・淀宿・杖方宿・守口宿

伊能忠敬 京街道図



日本初の大日本海輿地全図より 伊能忠敬の京街道図(1800年) 協力:国土地理院提供

歴史息づく管内4市、京街道395年—まちを結ぶ道 未来へ続く



京街道 今昔街道(みちとまち) —悠久の歴史今に

二〇二〇年、淀川を走る高速道路・第二京阪道路が完成した。今年、京街道が(京→大坂)を結ぶ文禄堤沿に誕生して三九五年を迎え、現代の京街道が蘇った。京街道図は二〇〇年前に日本全土を測量した伊能忠敬の手によって克明に描かれたもので、京都から大坂に至る淀川の流れとまちと道が記されている。そして、左図は安永五年(二七七六年)江戸期の北河内図(茨田郡)ふるさと管内四市のまちの名が記されている。

安永五丙甲歳十月大圖開版

中河内
郡合敘
江若江郡
志津川郡
北志紀郡
上丹北郡
八上郡

管内4市ふるさと絵図(茨田郡図)・安永5年(1776年)江戸時代中期作成

もくろく

第1章 街道について P 1

行基の直道 平安時代 文禄堤と京街道 文禄堤の目的 京街道とは 江戸幕府の宿駅設
近世の東海道 参勤交代とは 参勤交代について 京街道が東海道の京街道を片宿と呼んだ理由
西国街道と京の都の大名行列の通行を禁じた 宿場のなりたち 宿とは 宿場とは 問屋場
宿泊施設 本陣・脇本陣 本陣への休泊料金 公定の宿泊料金は 脇本陣 旅籠屋 木賃宿 人馬制度
助郷の起こり 囲い馬 京街道四宿の比較 間ノ宿・合い宿 松・杉並木 高札場 見付け
棒鼻 一里塚 茶屋 街道幅 通行手形 大阪地域の地図 I

第2章 大阪の地域 P 20

高麗橋 座摩神社行宮 釣鐘屋敷 もう一つの表玄関八軒家 三十石船の運賃 大坂城の石垣
大坂城 徳川の城 京橋といえば 京橋口の川魚市 片町 藤田美術館 大長寺 のだばし址碑
京街道の道標 野江刑場跡 榎並城跡 野江神社・水神社 榎並猿楽発祥の地 関目の一里塚
関目神社 関目発祥地碑 明治天皇聖燭 大坂Ⅱ～守口地域の地図 天照山宝龍寺 今市 太子橋
平田の渡し碑 守口宿略地図 守口宿場略図

第3章 守口市地域 P 34

土居 守口宿の起こり 守口宿の成り立ち 守口宿形態 守口宿の状況 守口宿の人々の状況
宿場内のように 義天寺 旅籠茶屋丁字屋 守居橋と本町橋 文禄堤の断面図 本町(堤の町)
西田家 みよし写真館 徳永家 卯(宇)建 守口大根と守口漬け 道標 魚万楼 五ヶ荘用水路跡
川東提灯屋 札場(高札場) 白井家と大塩平八郎 問屋場 本陣 榊形(曲尺手) 難宗寺
東西本願寺の分立 守口でも慶長 11 年難宗寺と盛泉寺 難宗寺角にある道標 明治天皇の大坂行幸
盛泉寺 瓶橋 一里塚 光明寺 正迎寺 正覚寺 守口・枚方地域の地図 佐太間ノ宿 来迎寺
菅原道真と佐太天神 菅相寺 佐太陣屋と永井家 朝鮮通信使 琉球使節

第4章 門真市の地域 P 61

茨田堤の位置 蓮(蓮根)と・くわいの産地門真 門真と助郷 願得寺 大塩平八郎と門真
古川と寝屋川の水運

第5章 寝屋川市の地域 P 67

仁和寺村 文禄堤を切断 仁和寺の由来 点野 鍋の茶屋 太間 京街道の様子 木屋
産土神は靱呂神社 枚方宿の飯盛女 戊辰戦争と寝屋川の農民 枚方地域の地図

第6章 枚方市の地域 P 75

蹠蛇神社(天満宮) 蓮如上人御腰掛石 光善寺 さいかち伝説 蓮如 郵便の渡し碑 郵便馬車
鉄道便 枚方宿 枚方宿の内容 問屋場 助郷 枚方宿内 西の見付 鍵屋 淀川舟運・枚方浜跡
木南喜衛門家屋号田葉粉屋 くらわんか舟 浄念寺 台鏡寺 本陣跡 宗左の辻の道標
枚方と朝鮮通信使 紀州七里飛脚 岡新町村 小野邸 枚方と大塩平八郎 東見付から樟葉へ
磯島茶屋町 御殿山神社 涸院跡 片埜神社～石清水八幡宮の地図 片埜神社 船橋川 久親恩寺
樟葉砲台跡 久修園寺

第7章 橋本から淀へ P 91

橋本 橋本には三つの顔があります 石清水八幡宮 旅人たちが楽しみにしていたもの 淀地域の地図
淀川河川公園背割地区 淀について 淀の略図 淀宿について 淀宿での宿泊者が少なかったか理由と
して 美豆邑 与杼神社 淀城 淀城主 淀城二代目の城主 淀藩最後の城主 城内跡のある稲葉
神社 唐人雁木と朝鮮通信使 豊臣秀吉の築いた淀城(妙教寺) 淀小橋 太閤堤と千両松
鳥羽伏見の戦いの戦死者の慰霊碑 鳥羽伏見の戦い(戊辰戦争) 伏見地域の地図 伏見宿へ

第8章 伏見地域 P 106

伏見宿の略図 伏見宿 四辻の四つ当たり 駿河屋の羊羹 伏見城 長建寺 中書島 寺田屋と坂本
龍馬 寺田屋の養女おりゅう 寺田屋6代目の女将お登勢とお龍とは 伏見宿を出発する大名や旅人
駿河屋 電気鉄道発祥地の碑 西岸寺 大黒寺 松林寺 欣浄寺と深草少尉 墨染寺

一般庶民が旅するには 道中用心心得の事 京阪地方の発展に大きな影響を与えた京阪電車の開通

第1章街道について

道は、目的地へ通じるものですが、古代は、人間が特定の^{ちいき}地域で生活をしていたころは、他の集団との関わりがなく、自分たちの範囲のみの道でよかったが、政治、経済、文化の発展にともない道もますます必要なものになってきました。

大化の改新^{かいしん}(645年)後、中国の唐^{とう}の制度を取り入れ、^{えきばでんま}駅馬伝馬制度ができ、都と地方をむすぶ道路に、4里(16km)ごとに駅^{もう}が設けられ、駅には、馬10~20頭^{じょうち}が常置され宿もありました。

そんななか最も早く道が整備^{せいび}されたのは、^{ごきしちどう}五近七道で、^{りつりょうせい}律令制時代の行政区画は、都に近い大和・山城・河内・^{せつつ}摂津・^{いずみ}和泉の5国を畿内といい、他の諸国を東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の7道が都から各地方への道として整備されました。

当時の東海道は、^{すずか}鈴鹿の関より東の太平洋沿いの地域、伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・^{とおとうみ}遠江・^{かい}駿河・^{さがみ}甲斐・伊豆・相模・^{あわ}武蔵・^{かずさ}安房・^{ひたち}上総常陸の14カ国でした。また、これらの国と結ぶ街道のことです。

^{てんびょう}天平2年(730)ころには、^{ぎょうき}行基が、^{ながらふなせ}長柄船瀬の高瀬から奈良に通じる直道を設置しています。平安、室町、戦国時代と、次々に道路も整備されていきました。

行基の直道

守口や門真地方は、陸上交通よりもむしろ水上交通の方が盛んでした。飛鳥文化の中心のころは、大坂から飛鳥への道は、日本最古の街道と言われる「長尾街道」や「竹ノ内街道」などが利用されました。

奈良時代に入り行基は、橋・池・寺院などをセットに造っていましたが、高瀬(守口市)には、高瀬大橋と高瀬寺、尼寺、運河などを建設したと言われていました。

行基は高瀬に「直道」を造ったとされています。この道は守口から門真、寝屋川、四条畷から清滝峠を越え奈良へ通じた^{のち}後の「奈良街道」です。都も平城京に移り遣唐使たちも通行したのではと思われています。

平安時代

都が平安京に移ると、京都を中心に諸国に通じる街道が整備され、畿内・東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の国府に至る主要幹線が設けられました。

また、太宰府(筑前国に置かれた、九州地方統治機関)と結ぶ山陽道を大路。東国・陸奥・出羽と結ぶ東海道・東山道を中路。北陸路・山陰道・南海道・西海道を小路として、駅馬も置かれました。

これらの道は、国衙(地方を治める国の役所)と郡衙(郡の役所)を結ぶ伝馬の通る道もつくり、駅伝制が次第に全国的に整備されていきました。政治の中心地がかわれば道路の中心地もかわってきます。

文禄堤と京街道

鎌倉時代は、政治の中心地は鎌倉に移りましたが、畿内の交通路は余り変化はなかったようです。

豊臣秀吉の天下になると、大坂を拠点とする城を石山本願寺跡に構えました。晩年は京の都に聚楽第を建築し、その後、文禄2年(1593)頃には伏見城の工事にとりかかり、翌年には本格的に築城工事をはじめ、慶長元年(1596)には完成しました。

当時は、京都と大坂を結ぶ淀川沿いは、特に枚方からの下流が泥湿地であったので、淀川に沿った最短距離の道路がなく、伏見から大坂へ行くには、一つは、淀川の水運を利用しました。

もう一つは陸路です。伏見から八幡に出て、洞が峠を越え東高野街道を通るか、橋本から楠葉に出て枚方から、生駒山系の西麓を通り磐船街道や、四条畷から行基道を利用するか、大東の中垣内からは古堤街道を迂回して大坂や伏見へと行き来していました。

そのため、秀吉は、伏見城と大坂城を結ぶ街道として、淀川左岸に文禄3年(1594)から慶長元年(1596)にかけて、西国大名の毛利三家(毛利・小早川・吉川)に命じて長さ15,281間(約27.8km)築堤させました。これが文禄堤(慶長堤)です。この文禄堤は守口市本町に現存しています。

文禄堤の目的は

- ①淀川による河内(大阪)平野の氾濫はんらんを防ぐこと。
- ②築堤により、他の水路を安定させること。
- ③軍事のとき、堤防を切って平野を水で満たし大坂城を守ること。
- ④淀川左岸に築堤し、堤防上に伏見と大坂城を最短距離で結ぶ道路。

京街道とは

「豊臣秀吉が築(改修)いた淀川左岸の文禄堤を道として利用し、伏見と大坂城京橋口を結ぶ街道です。」物資の集散地大坂と都を行き来する重要な道路となりました。

大坂から京都に向かう道を京街道。京都から大坂へ向かう道を大坂街道と呼んでいました。

江戸幕府の宿駅設置

慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いで勝利を得て実権を握った徳川家康は翌年、慶長6年から、江戸を中心とした各地方への重要道路として整備したのが五街道です。

五街道の制度が確立したのは慶長8年頃とされています。しかし、一般には勿論もちろん、役人ですら五街道と尋ねられてもなかなか明確には答えられませんでした。

宝暦8年(1758)、大見付依田和泉守が、江戸伝馬役の馬込勘解由使まごめかげゆしに「五街道とはどの街道か」と尋ねると、道中方御勘定の谷金十郎どうちゆうかた おかんじょう たにきんじゅうろうに尋ね、その結果を依田和泉守番所より下記のように報告がありました。

- 東海道・品川1次～大津53次(品川1次～守口57次)
- 中山道・板橋～守山67次 草津・大津を含む場合
- 日光道中・内藤千住～鉢石21次(23次説も)
- 甲州道中・内藤新宿～下諏訪43宿(上高井田～甲州34宿)
- 奥州道中・宇都宮の隣駅白沢～白河10宿(青森69次)

※どの街道も時代より多少の相違があります。

近世の東海道

五街道のうち江戸と京都と結ぶ東海道を重要幹線として、慶長6年(1601)正月に、江戸日本橋を起点に京都三条大橋を終点とする街道を設け、その中間に品川を第1宿駅として、第53宿駅を大津に置きました。

しかし、最初から完備したのではなく、袋井宿・石薬師宿は、元和2年(1616)に、箱根宿は、西国大名が、「箱根に宿場がなくては、通行するのが大変であるので、箱根にも宿場を設置してほしい」と要望があり、元和4年に小田原宿と三島宿からそれぞれ50軒が呼び寄せられて設置された宿場です。45番の庄野宿などは、53宿でかなり遅く、寛永元年(1624)に宿駅に加えられ、14番の吉原宿は寛永10年(1633)に設置されています。

また、舞坂宿と新居宿の間の「今切の渡し」は縁起が悪いとあって、見付宿から御油宿間に本坂道(姫街道)という迂回路が整備されました。

宮宿(熱田)と桑名宿間には、「七里の渡し」があり、船で3～4時間もかかるため、女性たちは、宮宿から桑名宿間の佐屋路を迂回しました。

あとで少し詳しく述べますが、道中奉行の公式の取り扱いでは、参勤交代などは、大津宿から京へ入らず、逢坂山峠を越したところの追分より、左折して伏見に出て、淀宿・枚方宿・守口宿を加えた57宿駅を経て大坂に行きました。

東海道も最初は、各宿に1日伝馬36疋を提供することを義務づけました。そのかわりに、馬1疋につき、30坪～40坪ぐらいの地子(土地に課した雑種税)が免除されたり、宿場によって相違はありますが、宿場でも5,000坪ほどの地子が免除されました。

この伝馬の使用者は幕府などの発行する「伝馬朱印」すなわち朱印状を持っている者が無償で使用することができたのです。

その後、人馬の制が整い、東海道では各宿に人足100人と100疋の馬を置くことが義務づけられました。

上記のように街道や道中には、幕府の役人や公家などの通行や、庶民でも商業などが発達して行き来する者や参詣者も増えました。

特に三代将軍家光が、家康や秀忠がつくった「武家諸法度」を寛永12年(1635)に拡大・整備し、「参勤交代」が制度化されました。

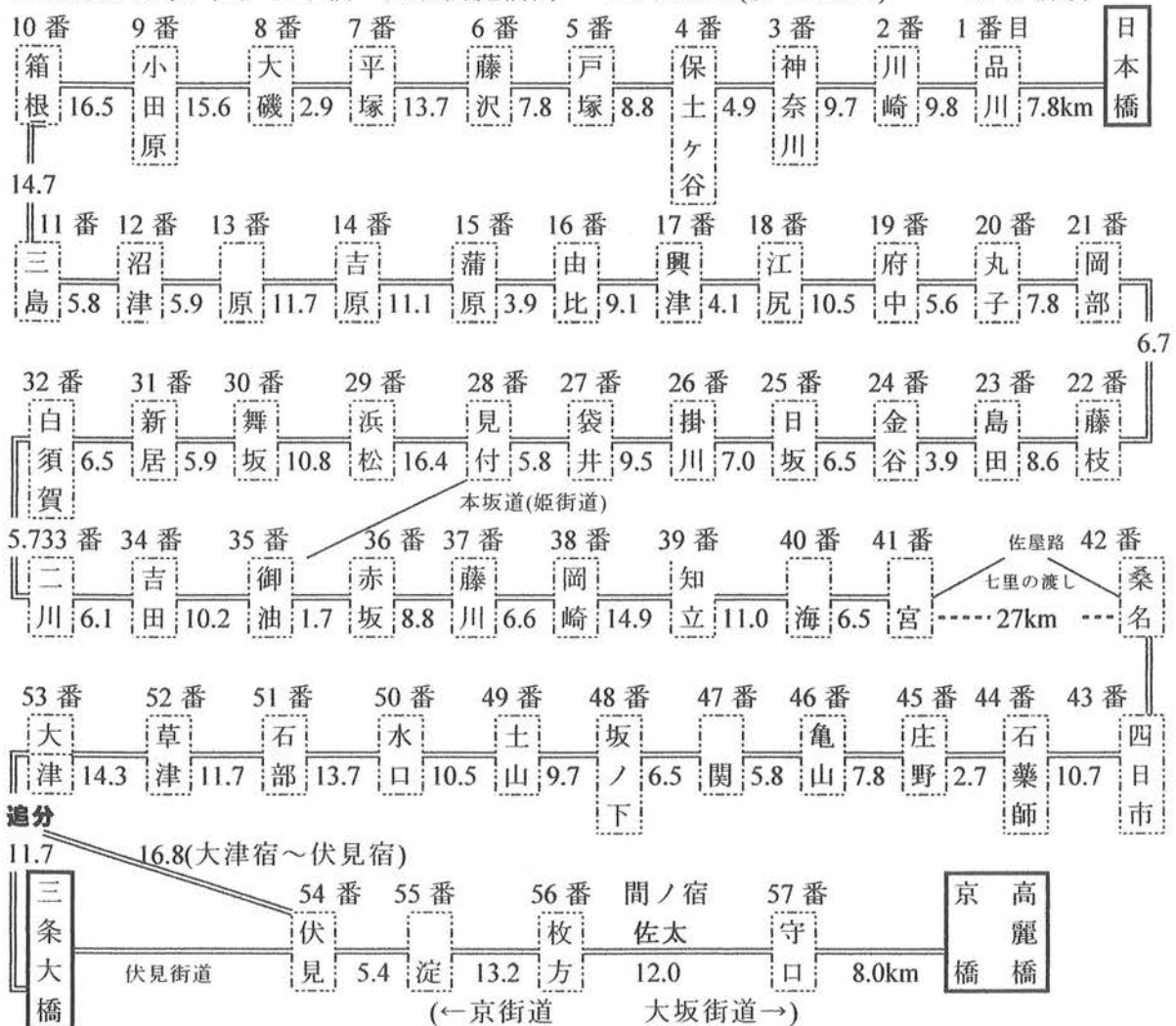
参勤交代とは

大名は妻子を人質として江戸邸におき、毎年4月を交代期に自国と江戸を1年交代に原則として行き来しました。時代によって多少の相違はありますが、大名(藩)の少ない時で213人、多い時には272人あり、10万石以下の大名が8割でした。

大名の約160家のうち、10万石以上または同格のものが30家も含む6割以上の大名が参勤交代で東海道を行き来しました。その上、幕府の役人など御用道中や朝鮮通信使、琉球使節なども通行します。このように多くの旅人が通行するには、旅籠や荷物を運ぶ馬や人足などの調整する事務や^{おきて}掟や道しるべなどいろいろな設備が必要になってきます。

○東海道 53次 江戸日本橋～京都三条大橋間 126里6町1間(約492.1km) 53の宿駅

○東海道 57次 江戸日本橋～大坂高麗橋間 140里5里(約547.5km) 57の宿駅



江戸京都間の距離は資料により、多少相違があります。東海道は何の障害もなければ、成人男子 1日 10里 (40km) は歩きます。江戸京都間は約 492～496km であるので、13日～15日くらいで歩きます。女連れでも 1日平均 6里 (23.6km) から 8里 (32km) 歩きます。これに大坂からは一日プラスです。

参勤交代について

参勤交代の始まりは、慶長7年(1602)加賀の前田利長が、証人として江戸にいる母をたずねて行ったのが、他の大名たちにも広がり、徳川家康公への御機嫌伺い、「徳川様には二心ありません。何でも御用を仰せ下され」と、大名たちがはじめた忠義合戦で、家来が多ければ多いほど忠義心があると、大名たちの意地と面子のぶつかりあいが大名列となったのです。

その後、二代将軍秀忠が、武家諸法度をつくり、さらに三代将軍家光が寛永12年(1635)6月22日に改訂して、参勤交代が制度化されました。

参勤は江戸への勤め、交代は国へ帰ることです。

一般は、大名は江戸に1年、知行地(領地国)に1年です。

主人(大名)は、往復し、妻子は江戸屋敷に人質として置くことになっていました。

寛永12年(1635)の武家諸法度

- 一、武士は学問と武道を常に心がけて励まねばならない。
- 一、大名小名は、知行地と江戸交替で住むこと。毎年夏四月中に参勤いたすこと。従者の員数は近来ははなはだ多い。これは国郡の費用がかさみ、人民の苦勞となっている。これ以後石高と家格に応じて減少する。
- 一、新たに城を築いてはならない。また、修理の時は、幕府に届け指示を受けよ。
- 一、大名たちは、幕府の許可なくして、婚姻関係を結んではいけない。
- 一、法度に叛く者は国内においてははいけない

※道中一番気を使ったのが、トラブルで我慢と堪忍で、道中法度が決められていました。

○薩摩藩の享保2年(1720)には、人数588人、馬21頭で江戸まで73日かかり、江戸滞在費を含めて今の金額にして、21億円。

○加賀藩は、約480km12泊13日で、旅費約6億円、老中や他への献上が2億7,000万円と、藩の財政を苦しめました。

国 藩	石高	距離	片道の費用	1里当たり
肥前国(佐賀藩)	35万石	260里 約1,040km	2,600両	10両
上野国(高崎藩)	7万石	72里 約288km	900両	13両
備中国(松山藩)	5万石	186里 約744km	2,000両	11両

※『歴史資料』

東京法令出版天保2年(1831)1両約8万円

※1両で米が約1石4斗(約196kg)が買えました。

全収入の1割は参勤交代の費用に使われ、遠方ほど費用はかかります。

江戸時代に薩摩藩や、特に毛利氏は120万石から萩や防長の2国の30万石になり日本海の端に押し込められ、倒幕の時を長いあいだ待っていたのでしょ。

※江戸府内で、下に下には下には将軍、下に下には御三家・三卿、下には老中・若年寄。寄れば国持大名。

参勤交代の結果

○参勤交代によって藩主が江戸居住を義務づけられ、多くの者は何もする事がなく、江戸の華やかな風潮にそまり現金も使い支出が増えるばかりでした。

○各大名は、貨幣経済が発達し、領国からの年貢や物資を売りさばくために蔵屋敷などを置き、その維持費もかなりかかり大変でした。

○どの藩も赤字財政のため、江戸・大坂・堺・京都・長崎・地元の大商人から多額の借金をして、利子の返済でも大変でした。

○参勤交代で、莫大な出費をしたので、財政窮乏(きゅうぼう)しました。

○街道を往復するので、街道筋が栄え、産業も発達していきました。

○江戸在住時に、うちわの技術を覚えた丸亀藩は、現在も全国80%の生産。

※普通は、在府在国各1年であるが、関東大名は半年交代、水戸家や役付の大名は常に江戸在住。対馬の宗氏は朝鮮通信使の役割があるため3年に1度の参勤交代でした。

京街道を片宿と呼んだ理由

京街道四宿は、東海道と言っても伏見宿はさておき、通行人が非常に少なく、特に大坂へ向かう客が少なく、宿場は経済的に苦しみました。

その理由として、淀川の三十石船です。

船便は、伏見から大坂八軒家間・大坂八軒家から伏見間。

※乗船場、伏見(京橋・蓬莱橋・阿波橋・平戸橋)、大坂(八軒家・道頓堀・東横堀・淀屋橋)
上りは1日、下りは半日または半夜かかります。

料金は、天保8年(1837) 米1石銀216匁。天保10年 1文約13円 ※草履1足16円

上り船 八軒家～伏見間 1人当たり180文

※上り船は、人が引っ張る綱場と呼ばれる所が9ヶ所あり、大変な重労働でした

下り船 伏見～八軒家間 1人当たり84文(上りの約半額)

特に下り船は安く、楽で早く、旅人の多くが利用しました。

大坂へは、下り船を利用するので旅人は勿論、荷物の運搬もほとんどなく、陸路での通行は上りに偏^{らく}っていたので、片宿と言われるようになりました。※三十石船は江戸末期には、1日約1500人、荷物800トンを運んだと言われています。

西国街道と京の都の大名行列の通行を禁じた はっきりした理由は分かりません。

一、京街道は通行人が少なく、宿益も少ないため宿駅維持が困難になり、通行人を増やすようにしばしば嘆願^{たんがん}をしていました。

そのため、京街道の通行人を増やそうとしたのか、参勤交代が西国街道を通行する事を禁じたようです。

一、西国街道は、人足30人、馬30疋。その上宿泊設備も不十分であるから、設備の整った東海道(京街道)の通行を命じたとも思われます。

一、幕府は大名が京都に入り、朝廷に接近するのを一番恐れ、特に九州地方には有力な外様大名が多く薩摩や長州にはかなり警戒していたようです。しかし、幕末頃には、幕府を無視して、薩摩藩や長州藩は西国街道を通行しました。

かなりの大名は山崎街道を通り、京都を避けるために、山崎から淀川を渡り、淀宿から伏見宿へ直接向かった大名もいました。山崎街道は、距離的には郡山宿へは伏見から24*、西宮まで20*とかなり近道です。

宿場のなりたち

宿とは

宿は宿泊をさすのではなく、宿駅で、「次」と数えたのは、各駅に伝馬や飛脚の継立をおこなうという意味です。宿は宿るの意味もあり、鎌倉期には宿泊施設も整ってきました。東海道でも発着地にあたる「江戸」「京都」「大阪」には宿場というところがありません。

大坂には、元禄年間(1688～1704)には、伝馬会所(伝馬番所)は備前島町にあり、年寄のほかに3人の惣代のうち1名が毎日執務していました。

当時駄賃馬は、448疋おり、馬持ちは伝馬町の他に源左衛門町・博労町、南への出口などの長町、京橋付近の八軒家、京街道方面の片町あたりに居住していました。平野郷は、大坂へ2里、堺へ3里の所にあり、昔から交通の要所であり、寛永11年(1634)には「馬継場」とされ、人足50人、馬50疋が常備され、次の宿場へと荷物などを継ぎました。

宿場とは

宿場は、街道沿いの交通の要地に幕府が認めた集落で、道中奉行または領主の支配下に宿役人などが業務を運営しているところで、街道に2～3里(8～12km)ごとにおかれた。なかには、城下町の一部が宿場になっているところもあります。宿場には本陣・旅籠などの宿泊施設や人馬の継立てをする問屋場が設けられている。

問屋場役人や人足の姿、その他の人物の服装が描かれています

問屋場

各宿にあり、公用の事務をするところで、すべての道中の事務をあつかっています。

問屋場には問屋役人の年寄、帳付、馬指など土地の有力者が常備しており、宿泊の世話から飛脚の業務までしました。



問屋場の継立て風景(藤枝宿)歌川広重の版画

宿泊施設

本陣・脇本陣

天皇の勅使^{ちよくし}、公家、大名、公用の役人が宿泊する施設です。宿場によって本陣や脇本陣の数は違います。

天保14年(1843)の調べでは、東海道で本陣の最も多い宿場は、箱根と浜松が6軒で、両宿とも脇本陣はありません。逆に本陣も脇本陣もない宿場は55番目の淀宿です。

本陣と脇本陣は、一般の旅籠などには認められなかった、門・玄関・書院を設けることができました。

参勤交代の大名たちは、前もって予約をしておきます。大名の中には宿泊したその日に、来年の予約をしていく藩もありました。



関宿の大名を迎える本陣

参勤交代は、大名をはじめ数百人の家臣たちを引き連れての往来です。大名は家老、用人、料理方、風呂方など直接大名の世話をする数十人が本陣に宿泊し、他の家臣は脇本陣や一般の旅籠屋に宿泊します。

休泊が決まると普通の大名の場合、前もって3枚の関札を持ってきます。2枚は、休泊当日、宿場の出入り口に太い竹に取り付けて立てます。

あと1枚は、本陣の入口に立て、本陣の主人は羽織袴^{はおりばかま}で宿場の入口まで迎えに行きます。

本陣への休泊料金は、本陣が請求するのではなく、あくまでも祝儀で、西国街道の郡山本陣に残っているものでは、嘉永3年(1850)頃は、一泊につき200疋(1疋は、10~25文)くらいが多かったようです。大名も苦しかったと思われます。

公家によっては、ご祝儀に扇子などを置いて行くだけのため、これでは本陣も経営が苦しく、本陣業の廃業を申し出るところもありました。

参勤交代や公用の旗本、幕府の役人、二條城や大坂城の在番などの宿賃^{やどちん}は、幕府のきめた公定相場に、一割ほどの茶代をおく程度でした。

公定の宿泊料金は

一人につき100文で、昼食も半分の48文くらいが公定で、その上横柄おうへいな態度をとります。庶民たちの宿泊料は200文以上はしました。

脇本陣

本陣は一般者(庶民)は宿泊することができませんが、脇本陣は、通常は普通の旅籠として営業しており庶民も泊まれます。

脇本陣は、本陣が詰まっているときに大名や公用旗本、幕府の役人らも宿泊することもあります。しかし、公用の役人たちが一般の旅籠に泊まって、何か事故に遭遇そうぐうすると処刑されることもありました。

はたごや 旅籠屋

旅籠屋には大・中・小と分けられていますが、その基準ははっきりしません。参勤交代の時、家臣たちの上位の者が、いい旅籠に泊まるというように上下の格付けをしたと



(客引きしている女たち(風呂敷で首を絞められている))

思われます。一般の旅人や公用でない武士も宿泊します。旅籠屋は一泊二食付きです。また飯盛女を置く飯盛旅籠と普通の平旅籠がありました。

※天保10年(1839)頃の旅籠代は最低200文、最高500文 平均260文(約3,600円)

きちんやど 木賃宿

木賃宿は、宿泊者が米や木(宿で木を買うことを木賃・木銭)等を持参して自炊じすいをしたり、宿で炊飯すいはんしてもらうこともありました。

寛永3年(1626)の令の大坂では、部屋代は4文、馬は1疋8文、木銭は4文で、自分が薪まきを持ち込むと木銭は2文でした。しかし、享保年間(1716~35)の頃より旅籠屋がよく利用されるようになりましたが、木賃宿の利用者もいました。大坂の長町にはたくさんの木賃宿があり、文政10年(1827)1部屋3畳ほどで宿泊料は鍋、釜、布団なべ かま ふとん一組で、1夜28文から40文で、薪4文、鯉節かつおぶし2文でした。弥次郎兵衛と喜多八は分銅屋の合部屋に3人で宿泊しています。この木賃宿には常宿する町民もおりました。

人馬制度

宿場で、人馬の継立てには、将軍が発行する御朱印状、老中、京都所司代、江戸町・大坂町奉行が発行する御証文は無償で利用できます。

幕府が認めた旅行者に限り御定賃銭で参勤交代の大名たちが利用できます。利用するときは、宿方にあらかじめ連絡しておかねばなりません。

一般の旅行者は、相対賃銭で使用者と人馬稼ぎの者とが相対交渉で賃銭を決めます。この場合は問屋場とは関係ありませんが、賃銭はかなり高く、御定賃銭の2倍ほどで、一般には問屋場を通して雇いあげます。

東海道『京街道四宿』間の御定駄賃・人足賃銭 「宿駅」 駐紮参考

『京街道四宿』の宿間までの 駄賃・人足賃銭(文)	大坂~守口 2里	守口~榎方 3里	大坂~榎方 5里	榎方~淀 3里	淀~伏見 1里14丁	伏見~大津 4里8丁
正徳元年(1711) 乗掛荷物人足	—	—	252文	151文	53文	179文
天保15年(1844)	—	—	341文	202文	72文	265文 <small>弘化元年</small>
正徳元年 軽尻馬1疋	—	—	165文	95文	35文	113文
天保15年	—	—	225文	132文	47文	168文 <small>弘化元年</small>
正徳元年 人足1人	44文	68文	125文	73文	26文	84文
天保15年	59文	108文	167文 <small>天保14年</small>	103文	35文	130文 <small>弘化元年</small>

※正徳元年(1711)、米1石は銀58匁(1匁は銭165文)・米価は大きく変動します。
天保14年(1843)、米1石は銀81匁…(天保15年=弘化元年)

人馬の継立てには荷物の貫目制限があり、時代によって相違があります。

馬は、東海道は、100疋が常備。 ※守口宿は、馬の常備はありません。

- 本馬は、積み荷のみ、40貫目(約150kg)。 ※1里150文ぐらい。
- 軽尻は、人だけ乗るが、5貫目(約19kg)までつけることが許された。
- 乗掛は、人と積み荷18貫(約67kg)まで、越えれば追加料金。

人足は、東海道は、100人が常備。 ※守口宿は77人が常備していました。

- 人足は、荷物5貫目(19kg)まで担ぐ。これを越えれば目方に応じて支払うことになっていました。

宿では、年に一度百姓が寄り合いをして、その年の馬役や歩行役、問屋場の諸役を決めていました。

元禄の頃までみんな馬を好んで持ち、馬役にも進んで願い出ていましたが、その後だんだん負担が重くなり、馬を持ちたがらなくなりました。

助郷のおこり

時代とともに文化も進み、一般に生活も向上し経済的にも恵まれるようになると、参勤交代の大名や役人の他にも一般庶民の旅行者や商人の行き来も増え、同時に荷物の運搬も増えてきました。

参勤交代の大名といえど、宿場の常備人夫や馬を1藩で独占することはできません。

参勤交代の道中はいつも戦時体制で、軍隊の行軍であるので野宿も覚悟しなければならず醤油・味噌・鰯節・梅干し・蒲鉾・干魚など食料や着る物、身の回りの物一切を持って行くのがたてまえです。

また、藩主のために将棋盤や火鉢・風呂桶に水を入れたままで運んだり、沢庵桶に石をのせたままや、布団の下に敷く畳1枚分の鉄板や、携帯の便器まで運ばなければならぬ大変な荷物です。

大名の中から、「荷物を運ぶのに、より多くの人馬を必要とするようになり、人馬を増やして欲しい」という声ので、そこで助郷制度が設けられたのです。

助郷とは宿の人馬の不足の分を負担する役で、はじめは一定の村が定められていたのではなく、必要な時に雇い上げていました。

寛永2年(1625)の定めより、駄賃馬が多く必要な時には、他の村々から雇いました。

出す馬を助馬といい、出す村を助馬の村と呼ばれました。

元禄7年(1689)に、東海道と中山道の各駅に助人馬を出す村々が割り当てられ、それを助郷というようになったのです。助郷には常時課せられる定助郷。臨時に課せられる加助郷、大助郷が設けられました。

※助郷・助馬は、村は石高、町屋では間口で数が決められました。

困り馬

宿場に常備している人馬が、すべて使われると緊急の時に困るので、人足5人、馬5疋を常備するようにしました。

その後、安永年間(1773~80)頃には、25人、15疋となり、これを先の5人5疋に合わせると、30人25疋となり、70人80疋の人馬を使えば、その不足分は、助郷村へ割当てることができるわけです。これを七八遣いといい、文政6年(1825)には、京街道の伏見から守口宿にも及びました。

伏見宿30人、20疋。守口宿30人。枚方宿30人、20疋。淀宿30人、20疋。

京街道四宿の比較

天保 14 年(1843)

『宿駅』児玉幸多氏参考

宿名	伏見宿	淀宿	枚方宿	守口宿
国名	山城国	山城国	河内国	河内国
宿高	0	1,369石558合	642石039合	430石688合
家数	6,245軒	836軒	378軒	177軒
人口	総人数	24,227人	2,847人	1,549人
	男	11,996人	1,451人	630人
	女	12,231人	1,396人	919人
旅籠	総数	39軒	16軒	69軒
	大中小	6 21 12	0 0 16	31 21 17
本陣	本陣	4	0	1
	脇本陣	2	0	0
人馬	人足	100人	100人	100人(形式上)
	馬	100疋	100疋	0疋

※守口宿は、人足宿で馬継ぎはありません。宿人足は100人であるが実際は76人でした。

守口宿における御状箱・御用物継立状況

嘉永 3 年(1850)

	刻付御状箱 1荷ニ付人足6人		御常例御状箱 1荷ニ付人足4人		御用箱 1荷ニ付人足6人		合計人足
	数量(荷)	人足	数量(荷)	人足	数量(荷)	人足	
江戸へ	10	60	183	732	331	1,986	3,658人
大坂へ	8	48	157	784	8	48	

「嘉永三年 御状箱・御用物去西年分御継立員数上帳東海道守口宿」(守口文庫所蔵)より作成

上記の表だけで、判断は無理があるかもしれませんが、例えば、御用物は、江戸への便は331個、人足1,986人に対し、大坂への便は8個で、人足は48人と極端に少ないです。「これは言うまでもなく、」荷物も人も淀川を伏見から八軒家まで下ります。下りの料金は上りの半分も手伝って利用者が多く、守口宿や枚方宿は、片宿と言って上りと下りの交通量の不均衡な街道であったことがわかります。

朝鮮通信使

正徳元年(1711)、新井白石による朝鮮通信使待遇改正の1年目でしたが、守口関係の水尾掘り人足総入用によると、上りと下りによって負担が違うことがよくわかります。

品名	来朝の時	帰国の時
総人口	2,644人	1,570人
右賃銀	銀51貫99,615分	銀3,532匁5分
ちよれら	2,350挺	100挺
船	1,750艘	272艘
わら	3,020束	
提灯	1,500張	50張
竹	1,500本	
ろうそく	3,000丁	150丁
松明	4,500本	
篝火	200ヶ所	140ヶ所

朝鮮通信使は国王の代理として、500人(この内200人近くの船員は大坂止まり)規模で朝鮮から江戸まで8ヶ月から1年近くかけて往復します。

費用は日本持ちで100万両、現在の金で600億円になります。

多くの人たちは、淀川を上る朝鮮通信使の船団を見物にきました。その裏で、川底掘りや船の綱引き、陸路では荷物運びの人足と大変でした。3~4時間かけ枚方浜まで運びました。

宿場人足

は楽な大坂へ勤め、遠い枚方へは助郷に勤めさせた守口宿

嘉永 2 年(1849)

守口宿出勤 人足 合計 28,577人	内宿勤め					
	小計	御証文人足		賃人足		無賃人足
		江戸の方へ	大坂の方へ	江戸の方へ	大坂の方へ	
	5,642.0人	1,115.7	553.7	1,490.8	426.5	2,055.5人
	助郷勤め					
	小計	御証文人足		賃人足		無賃人足
		江戸の方へ	大坂の方へ	江戸の方へ	大坂の方へ	
	6,215.7人	1,617.0	109.5	2,433.7		2,055.5人

※守口宿は、比較的助郷からの出勤が少なく、助郷の騒動は発生しなかつたようです。

あい 間ノ宿・合い宿

間ノ宿は、間村ともいい、幕府が認めた正規の旅人の休憩所です。立たて場ば茶屋と同じように、茶屋で餅や団子を食べたり、昼食などをとり休憩するところで、宿場と宿場のあいだにあります。

箱根の畑宿はよく知られていますが、守口と枚方宿の間に「佐太さたノ間ノ宿」がありました。間ノ宿は、茶屋以外にも旅に関係した品物や日用品なども売っていました。

宿場は、人足をはじめいろいろと御用を務めているので、宿場を保護する意味もあり、間ノ宿は旅人を宿泊させることは禁止されていました。

本陣は、本来諸大名が休泊する所ですが、参勤交代の大名や役人たちが経費を節約するために、茶屋や間ノ宿などで小休や昼休に利用するようになると、本陣はますます困窮こんきゅうに陥り経営が苦しくなります。そのため、本陣を守るために道中奉行が老中水野出羽守に申し出て、1万石以上でわのかみの大名たちに、文政7年(1824)12月に茶屋での小休することを禁止しています。

松・杉並木

街道沿いには、松やひのき檜かし、杉、榿じょうりよくじゆの木など年中緑の常緑樹が植えられました。目的は、道筋もはっきりし、並木で日差や風雨から旅人を守ってくれました。



舞坂の松並木(2009年4月5日の撮影)

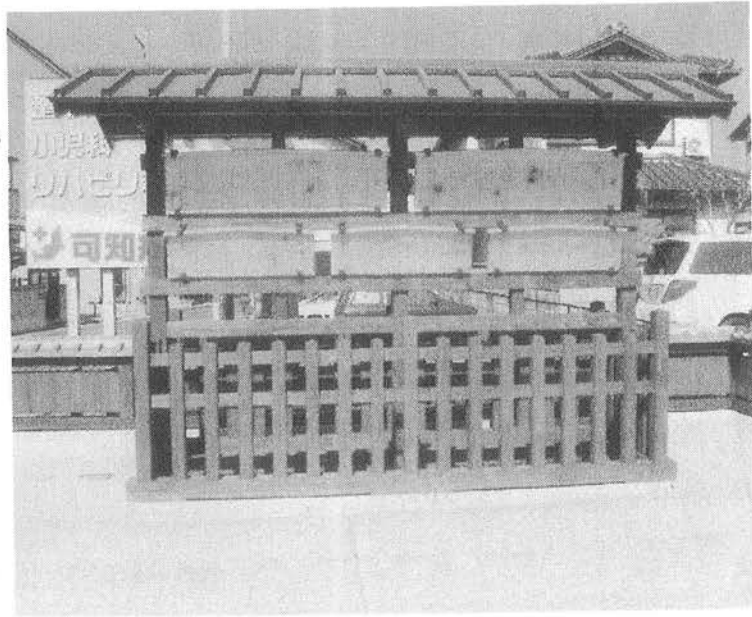
しかし、現在は、どの宿場でも開発が進み、その上自動車などの排気ガスで、木が枯れ、伐採かされてしまいほとんどの並木は消えています。

しかし、少しですが現在では、箱根の杉並木や御油宿と赤坂宿の間に、くろ松の600mほどの並木道があり、また、舞坂宿の松並木、藤川宿と岡崎宿間にも松並木が残っています。京街道にも松並木はありましたが、残念ながら今は残っていません。

高札場

幕府から出された法令などを掲示されている場所で、札の辻ともいいます。

木の札には、御法度（禁制）や掟（きまり）などが墨書きされ、この木札は宿場内や追分、渡船場、関所など人目につく所に立てられてきました。



赤坂宿に復原された高札です(2009年4月5日撮影)

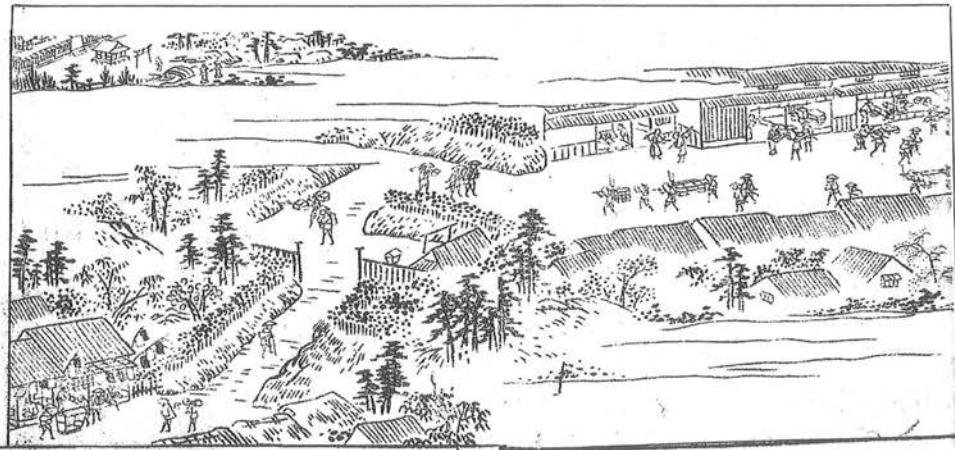
立て札の内容は、

御条目御礼 毒薬御礼 人馬貨御礼 上下人足御礼 つけび付火など5枚の木札に書かれています。

見付け

宿場の出入口にある旅人の見張りをしていた所です。

もとは、城門のことで、
通行人を監視



『伊勢参宮名所図会』水口宿の東見付け付近の風景

・検察するところで、江戸城には内部、^{がいかく}外郭に36の見付けがあったといわれています。

宿場の見付けには、木戸があり明け六つ(日の出の30分前、現在の午前6時)に木戸が開けられ、暮れ六つには閉められ、特別の理由がない限り夜歩きは許されなかった。

枚方宿には、東見付けと西見付けの跡が表示されています。

棒鼻

宿場の出入口を現した棒です。広重の東海道の藤川宿に棒鼻の版画があります。

藤川宿には平成6年、京都遷都^{せんと}1200年のイベントとして「茶壺道中」に合わせて東西の棒鼻が復原されています。



藤川小学校前に復原された棒鼻(2009年4月5日撮影)

一里塚

慶長9年(1604)2月4日に、「諸海道に一里塚を築く事」と「將軍仰せ出され、諸街道に一里塚つき申すべ由」と命じられ、江戸日本橋を起点に、おもな街道に一里塚^{じゅんじ}を順次築かせました。

『徳川実記』に「三十六町を一里と定める」とあります。これは現在の3.9kmにあたります。一里塚は旅人によく目立つように五間四方(9m)に盛土で一段と高くしていますが、実際はこれより小さいのが多かったのです。一里塚には年中茂っている木が植えられており、その多くは榎^{えのき}です。本当の理由はわかりませんが、当時の役人が家康に「何の木を植えましょうか」と尋ねると「え〜木を植えよ」といったのを「エノ木」を植えよと聞き違えたと言われています。

一里塚は、旅人の距離^{きょり}の目安にもなり、また、人馬や駕籠^{かご}料金なども一里でいくらと定められていました。もちろん宿場間の料金の場合もあります。暑いときにはこの木陰^{こかげ}で休憩もしました。

大名が、宿場に休泊したり通行する時は、見付けや一里塚まで本陣の主は袴^{かみしも}や羽織り袴姿^{はおり はかま}で、その他の問屋や庄屋など宿役人らも身分によって違いますが、送迎しました。



一里塚と街道の風景

茶屋

茶屋は、宿と宿の間にありますが、宿内にもありました。

大名から庶民まで、旅人の休憩所で、旅の途中で体を休め、団子や餅、昼食など土地の名物を食したり、土産物もあり、ここは、旅人の楽しみの一つでした。東海道でも桑名宿と四日市



大津走井茶店(広重の東海道五十三次)

宿の間は、3里9町と長く、立場茶屋が5ヶ所もありました。

街道幅

徳川家康が慶長9年(1604)、大久保長安に命じて、街道の幅員は5間(9m)で両側に松や杉の木を植えました。人が通る道幅はかなり狭くなります。

宿場は道幅2間～2間半(3.6m～4.5m)で、問屋場のあった市場町は荷物の積み下ろしや旅人などで混雑するので、かなり広がっていました。

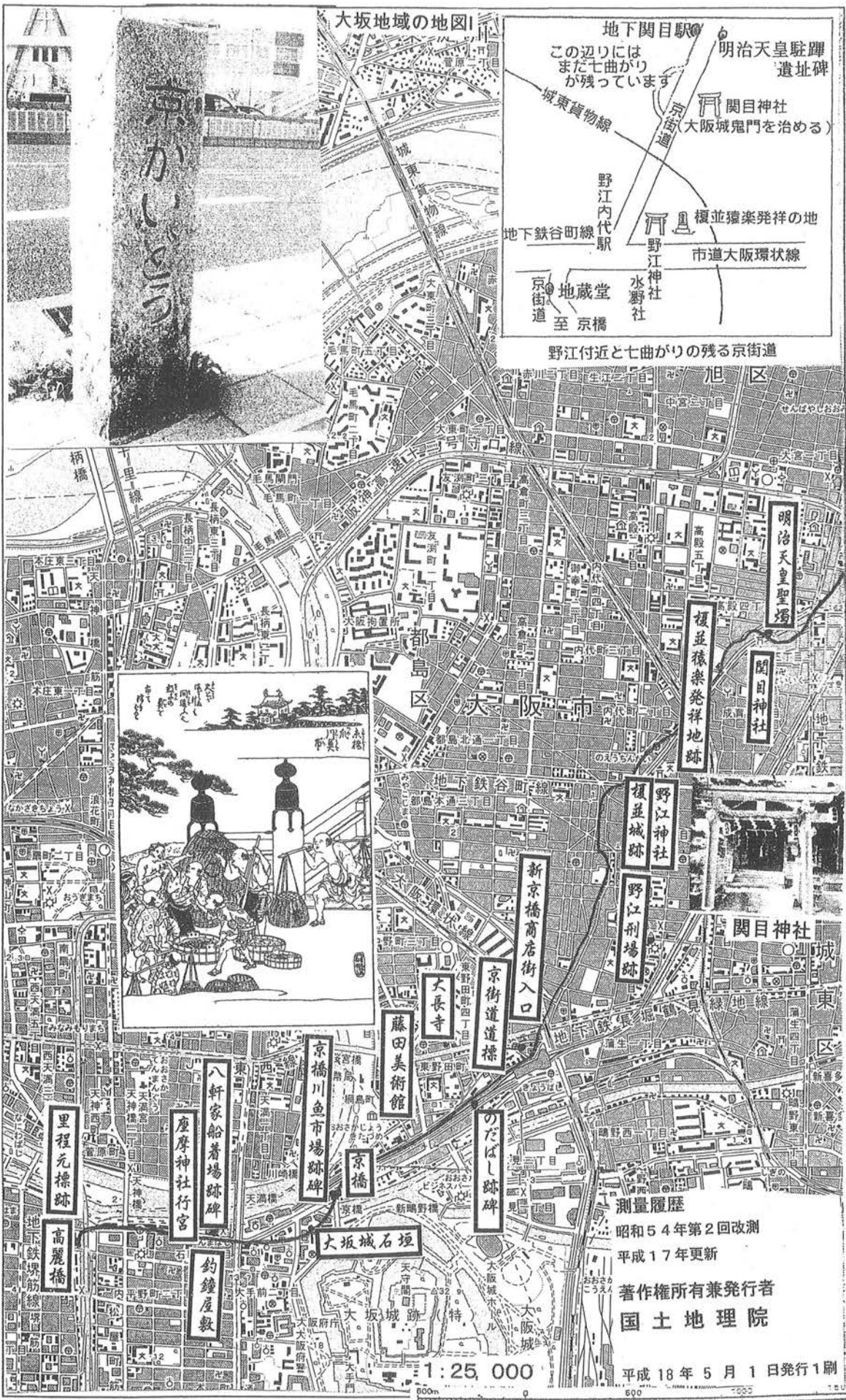
通行手形

道中で1番大切なものは往来切手で、2種類あり一つは往来切手、もう一つは関所手形です。往来切手は、自分の旦那寺と、村役人が。町人は、名主・大家などが住所や行き先を書いた書状を発行します。だから店賃たなちんの未払いの者は発行してもらえず旅に出られません。

関所手形の発行は、通行手形より手数がかかります。美濃紙の大きさに道中奉行の裏書うらがきがいらいます。

関所手形は、1枚で関係者は何人でも通行できますが、しかし、1関1枚が必要です。

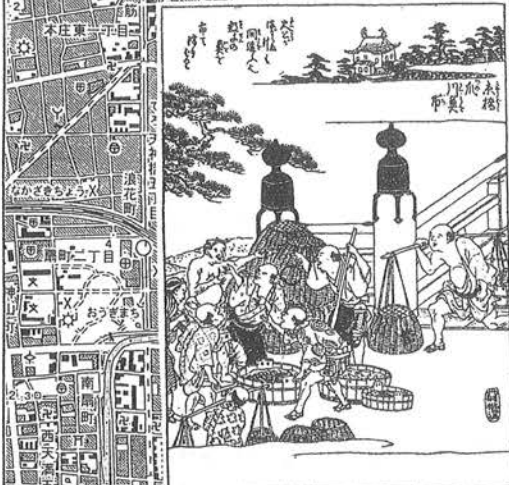
この手形は、江戸から上り(江戸から出る時)が必要で、江戸へ入る時は不要です、これは「入り鉄砲に出女」を厳しく取り締まりました。往来切手は1人1枚が必要です。しかし、寺社などへの参詣は案外簡単に行き来できたようです。



大坂地域の地図



野江付近と七曲がりの残る京街道



測量履歴
昭和54年第2回改測
平成17年更新

著作権所有兼発行者
国土地理院

平成18年5月1日発行1刷

1:25,000

大坂^{こうらい}高麗橋から江戸へ下るには 高麗橋から京橋

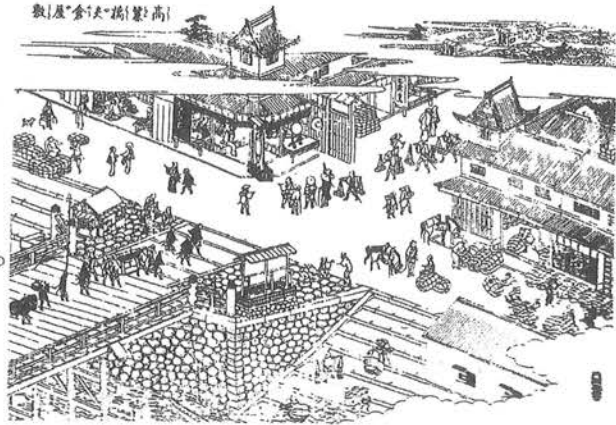
第2章 大阪の地域

こうらいばし

高麗橋 大阪市中央区高麗橋東詰

豊臣秀吉が京街道を設け、大坂城から京都へ通じる道であるところから、京橋口が発着地点でした。

徳川家康に政権が移ると、幕府は東海道や中国街道、紀州街道の発着点を高麗橋としました。



高麗橋の矢倉屋敷、これが珍しく見物人がたえなつた。

大坂には12の公儀橋があり、その第1号です。

ここは、紀伊和歌山城主の参勤交代や軍事上の要地であり、また堺や和泉などの木綿^{しゅうさんち}などの集散地で、熊野街道でもありました。現在の高麗橋は昭和4年に15万円で鉄筋コンクリートの橋が完成した。



高麗橋の里程元標跡碑

高麗橋の慶長の「擬宝珠」には、「慶長九年八月吉日 御大工奉行吉久」の銘があります。これは夏の陣の時、徳川方の安藤右京進重長が持ち帰り、それが転々して、吉田茂の手に入り。昭和40年に遺族によって大阪市に寄贈され、今は大坂城に保存されています。

高麗橋は大坂の道路の終起点でしたが、昭和28年(1953)に、国道1号線、2号線、奈良・和歌山・福知山方面への終起点である「梅田新道路路元標」が立てられました。

高麗の名は、6世紀末に高句麗の使者が難波に上陸し、飛鳥の都へ行く時、ここにあった迎賓館で休養したところからついたとか、他説もあります。

『摂津名所図会』に「高麗橋1丁目より西に呉服買ふ市店多し」とあり、豪商三井(三越百貨店の前身)家だけでも嘉永4年(1851)には奉公人が180人もいました。

同時に両替商も営みました。この高麗橋辺りには三井の他にも、呉服商や縫物屋^{ぬいものや}がたくさん並ぶ通りでした。

また、高麗橋には「進物には虎屋のお菓子」といわれた虎屋の饅頭^{まんじゅう}は大坂の最高級品でした。



高麗橋の宝珠

いかすり あんぐう
坐摩神社行宮 大阪市中央区石町

平安時代になると、熊野
は、山岳修験道に仏教の浄
土信仰と密教が重なり、
神仏が習合して「極楽浄土」
への入口が渡辺の津で、皇
族をはじめ庶民も参詣する
ようになりました。



坐摩神社(旅行安全や安産の神さんです)

皇族たちも、淀川を下り
渡辺の津(後の八軒家)から、
九十九の王子をへて熊野大社へ出発します。その第一王子を室津王子と
か渡辺の王子と言われ、これが今の坐摩(ごま)神社です。当社には、神
功皇后が休憩された石があります。石町の地名はこれが由来です。

四天王寺の鳥居が極楽浄土への門とされるので、熊野詣での人たちが
ここに参詣し熊野へと詣でました。

なお、坐摩神社の辺りは源頼光の四天王の一人渡辺綱の出身地で
はないかと言われています。

つりがねやしき
釣鐘屋敷 中央区釣鐘町2丁目2

徳川三代将軍家光が、寛永11年(1634)7
月に大坂城へ来た折に、高麗橋筋の櫓
に上り金の磨(采配)を合図に堺・大坂・
奈良の地子銀免除を告げました。

大坂市中も地子が(固定資産税)永久免除
になり、それに感謝して釣り鐘をつくり、
町中に時を知らせる鐘楼に屋敷をつくりま



釣鐘屋敷の釣鐘

した。大坂三郷の商人たちは大変喜び市中も栄えました。また火の見櫓
にもなり火災や災害なども知らせました。明治3年(1870)に取り外され、
大阪府庁の屋上に「大阪町中時報鐘」として保存されていたが、昭和60
年にこの屋敷に戻されました。※今は、8時・12時・日暮れに自動的に鳴ります。

もう一つの表玄関八軒家

八軒家の船着場は、天満橋と天神橋の南側にあたり、古い昔から伏見より淀川を下り四天王寺や住吉大社、高野山に参詣していました。

平安中期には、熊野詣^{もう}でが盛んになり、ここ八軒家が、熊野街道の出発点となっていた所です。八軒家の地名は、江戸時代に八軒の船宿があったところからと言われています。



八軒家の船着き場跡碑(長田昆布本店前)

この辺りは米蔵や俵物が往来し、大坂人の胃袋を満たす天満の青物市場や雑喉場^{ざこぼ}市場・堂島米市場が大坂三大市場といわれ、近郊の農民が特産の野菜や、漁師などが魚を運ぶ小舟^{かわも}で川面はひしめいていました。

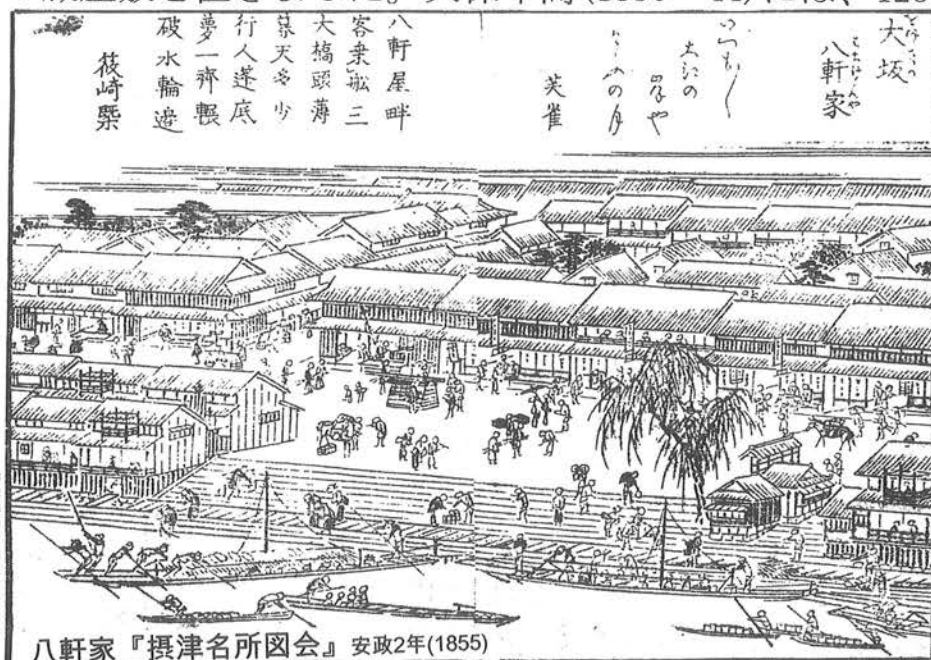
特に江戸時代は、人々の行き来も盛んになり、伏見からは、旅行者、商人、参詣者といろいろな目的を持つ人たちが「三十石船」で約50kmを、船賃「そば」5～6杯分ほどで、半日かけてこの八軒家にやってきます。

おのずと多くの人が集まり、川辺にはこれらを受け入れる飲食屋、旅籠屋や木賃宿などが立ち並び、大商人たちも両替商やいろいろな店を構えるようになり、川岸には蔵が立ち並び、日本各地の藩が、年貢米などを換金^{かんきん}するための蔵屋敷を置きました。天保年間(1830～44)には、125

もの蔵屋敷がありました。

船が交通手段で出船^{せんそう}千艘入船千艘で大坂は正に天下の台所でした。

大坂には菱垣廻船^{かいはん}や北前船なども出入りしていました。



三十石船の運賃

淀川の船は、奈良に都がある時は、瀬戸内海～淀川～木津を結ぶのが重要な水路でしたが、都が京都に移ると瀬戸内海～淀川～淀が最も重要な水路となりました。淀川には30石船や淀船を中心に300石から10石ほどの多種多様の船が行き来して人や物資等を運んでいました。

豊臣秀吉が大坂に築城すると益々淀川の水路が盛んになってきました。

このころより、淀川の代名詞ともなった過書船の三十石船は、名の通り米が30石積載できる船で、長さ56尺(約17m)、幅8.3尺(2.5m)の旅客船で多くの乗客を運びました。もちろん船によっては多少の大小はありました。

三十石船の運賃は

『淀川－自然と歴史－』大坂文庫1参考

○上り船は、1日または、1晩

○下り船は、半日または、半夜

貸切り船もあり、船頭(水夫)は4人、乗客28人。

寛永3年(1626)の下知(いいつけ)状

1石 銀約24匁

貸切	上り船	八軒家～伏見間	銀13匁
		八軒家～枚方間	銀7匁8分
	下り船	伏見～八軒家間	銀4匁4分
		伏見～枚方間	銀1匁7分

1両 銀60匁
銀1匁 銭165文

乗合客	上り船	八軒家～伏見間	1人当たり 15文(19文とも)
	下り船	伏見～八軒家間	1人当たり 4文

享保9年(1724)

米1石 銀約23匁

乗合客	上り船	八軒家～伏見間	1人当たり 52文
	下り船	伏見～八軒家間	1人当たり 24文

安永年間
(1772～1780)
そば1杯16文

享和元年(1801)頃

	上り船	八軒家～伏見間	1人当たり 144文
	下り線	伏見～八軒家間	1人当たり 72文

天保8年(1837)

米1石 銀約216匁

乗合船	上り船	八軒家～伏見間	1人当たり 180文
	下り船	伏見～八軒家間	1人当たり 84文

天保10年頃
1文13円
草履1足16円

※「増補登船独案内」には、「三十石船貸切船ちんの義ハ、上り下りとも時節により高下あるべし。但シ登リハ中途より乗り候ても舟賃同じ事なり。下リハ中途よりのり候へバ、壱人まゑ百文」と断りをつけている。

慶応元年(1865)

1石 銀約513匁

乗合船	上り船	八軒家～伏見間	一人当たり 156文
	下り船	伏見～八軒家間	一人当たり 26文

下りは、流れにしたがって運航するので、船頭たちは下りは大名。

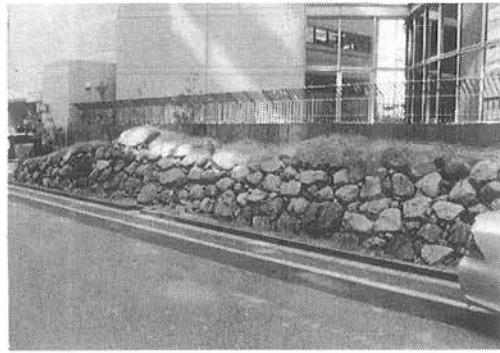
上りは、船を曳き上げる綱場が9ヵ所もあり、これは重労働で、上りは乞食といました。運賃も上りは、下りの倍のになります。

発着港は、伏見は、京橋・蓬莱橋・平戸橋・阿波橋。大坂は、八軒家・東横堀・淀屋橋・道頓堀。中継港は、鳥羽・淀・橋本・枚方・三島。前もって連絡が必要です。

大坂城の石垣

谷町筋を越え、大阪歯科大の所より上町筋を越えると、ドーンセンターの北側に少し石垣があります。

これは、豊臣秀吉が築城の三の丸跡ではないかと考えられています。^{はっくつ}発掘後ここに石垣が移築復元されたものです。



大坂城の石垣

道を隔てて日本経済新聞社がありますが、この敷地には、徳川氏によって築城された濠を兼ねていた旧大和川の石垣が残っています。

大坂城

大坂城の初めは、明応5年(1496)、本願寺第八世蓮如が「石山本願寺(城)」を築きました。その後、豊臣秀吉が天正11年(1583)9月大坂城を築いたのが始まりです。しかし^{げんな}元和元年(1615)の夏の陣で落城しました。

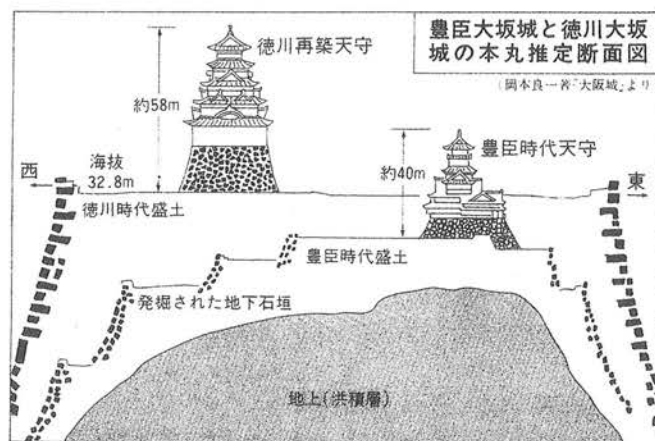
徳川の城

○元和6年(1620)1月第一期修築します。

○寛永元年(1624)第二期工事。

○寛永5年(1628)2月に第三期工事をおこし、翌年完成しました。

○明治元年(1868)長州兵によって焼失しました。



『大阪府の歴史散歩』上(大阪府の歴史散歩編集委員会)

●昭和6年(1931)11月7日に市民の力で竣工しました。

京橋といえば、

京阪やJR京橋駅が浮かびますが、実は豊臣秀吉の頃、大坂城北側の寝屋川に架かる小さな橋が「京橋」で、これが京都へ通じる橋であったことに由来します。また、徳川時代を通じて「野崎まいり」の人々で賑わっていました。高麗橋と同じように擬宝珠がついた立派な橋でした。

京橋口の川魚市

天満青物市場・堂島米市場・雑喉場市^{ざこばいち}を大坂の三大市場といいます。

青物市は最初は、石山本願寺の寺内町から発生し、豊臣時代に京橋南詰の土手下の淀屋2代目^{こあん}全庵の邸地にあったが慶安4年(1651)に淀屋の地が幕府に没収され、京橋片原町に移りました。しかし、家賃が高く、その上、京街道に面しており、農民らが野菜を運ぶのに不便であるので、青物商・乾物商・生魚商^{なまうお}の一部が天満の地に移りましが、川魚市はこの京橋^{たもと}の袂で商っていました。



京橋の川魚市『摂津名所図会』

雑喉場は、一般には、魚市場のことであり生魚や塩干魚も同時に扱っていたが、その後、生魚商と塩干魚商が分かれ、青物市場も魚市場と分離され、魚市場は^{さぎしま}鷺島や上魚屋町などへ移ったが、雑喉屋治郎兵衛らも鷺島へ移り一定の区域に限り許可されました。承^{しょうおう}応^{うつぽ}2年(1653)に^{みょうがきん}靱町に決められ、幕府に冥加金を納め大坂の魚市場となり特権が与えられました。

片町

豊臣秀吉の頃には京街道に通じる京橋は架けられていたと思われ、その京街道の南側^{あし}は^は葎などが生える原っぱで、反対(北側)の片方に家が立ち並んでいたのが片町の名が付けました。

藤田美術館 大阪市都島区網島町

京街道の片町のところを左折し、東野田に向かうと直ぐ左手に「藤田美術館」があります。ここは、浄土宗の「大長寺」があった所です。

明治45年に鉱山開発で財を得た、明治の実業家の藤田三郎父子が採集した古美術品が昭和29年(1954)に展示されました。約5,000点が所蔵されており、なかには、紫式部日記^{えことば}絵詞など9点の国宝をはじめ、重要文化財が46点あります。

慶長10年(1605)に網島、現在の藤田美術館のところに創建された浄土宗の古刹こさつです。

享保5年(1720)10月14日、曾根崎新地の遊女小春と天満の紙屋主人治兵衛ちへえの二人が新地から人目を忍んで抜けだし、大長寺で心中をしました。

これを近松門左衛門が取材して、浄瑠璃『心中天の網島』を書き義理人情もので、近松世話物中の傑作です。

「遊女小春をあきらめきれない治兵衛の涙を見て、妻おさんは愛する夫を思い、身を引く覚悟をします。」そんな矢先の心中でした。

人々があわれに思い葬ったのが比翼塚ひよくです。明治42年に当地に寺が移ると比翼塚も一緒に移りました。

※比翼さつきとって、二つの花が、だきあって一つの花としてさく。比翼塚とは、情死した男女を合葬した墓。

当寺には、鯉塚があります。

これは、寛文8年(1668)大長寺の住職が、大坂夏の陣で戦死した武士の夢をみて、淀川でとれた巴ともえもんの紋のついた大きな鯉に「滝豊鯉山居士」と法名をつけ葬ったという伝説があります。

のだばし址碑 大阪市都島区片町2丁目9

野田橋は寝屋川と平行して流れるなまずえ鯉江川に架かっていた橋です。京橋や備前島橋とともに京街道にある重要な橋で公儀橋です。

この川も今では埋め立てられ道路になっております。公園や小学校に地名のみが残っています。

鯉江川とは、この川で網を張って鯉がとれたとか、また、大坂夏の陣の今福合戦で、この川が死者の血で真っ赤に染まったところから生血川が鯉江川となつという説があります。『摂陽群談』



のだばし址碑

公儀橋は、江戸時代に幕府が管理した橋、幕府が修理保存をまかな賄う橋のこと、大坂の町の公儀橋は、高麗・京・天満・天神・本町・濃人・長堀・日本・野田・備前・鳴野・難波の各橋 計12

京街道の道標 大阪市都島区東野田町2丁目

京阪電鉄京橋駅北側の道路端の植え込みの中に京街道の道標で、右大和左京みちとあります。ここは野崎や奈良に向かう道で古堤道の分岐点でもありました。

京都に向かって国道1号線に「京街道」と書いてあるJR環状線陸橋をくぐり、すぐ左手の新京橋商店街が京街道です。

商店街を700mほど進んだ所の東側に家が建ち並び少し離れているので目には見えませんが、野江変電所の辺りが「野江刑場」であったとされています。



京阪電車京橋駅前にある道標

野江刑場跡 大阪市城東区野江2丁目

ここは、獄門ごくもんから百叩たきまで、すべてが当所で行われました。最後の刑は、慶応3年(1867)、主人殺しのおとめです。おとめは河内から大坂に奉公に来ていましたが、若い男そそのかに唆そそのかされて、主人を殺して大金を盗み捕とらえられ、磔はりつけい刑で死刑になりました。多くの方が処刑を見に行つたそうです。刑場にあつた南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょうと書いた大きな題目碑には、元禄八年(1695)二月と刻まれています。現在は、守口宿内にある本門仏立宗の義天寺に移っています。勿論もちろん今は刑場はありませんが、少し離れた水香橋の近くに東向きの小さな地藏堂があります。処刑された人たちのために今も花や線香が供えられています。 ※千日前などにも刑場がありました。

この辺りから北へ500mほど進むと、大阪環状線道に出て東へ150mほどで野江4丁目交差点です。その東側に野江神社・水神社があります。

この神社がある辺りは、榎並えなみとって平安時代からの荘園名で、河内の入江と大川の間であり、茨田堤の築堤によって陸地化が進み農地になりました。

この地域は貴族や寺社の領地争いが何度もあつた所です。神社の北西の榎並の地名は、大川の江南からついたのでないかと言われています。

えなみ
榎並城跡 大阪市城東区野江4丁目28

現在は、榎並城跡に野江神社があり、城郭じょうかくの跡は見られませんが、小城であったが、淀川・旧大和川や池に三方に囲まれた天然の濠を持つ城でした。

『花宮三大記』に、安応(北朝)2年(1369)3月23日条に楠木正儀まさのり まさしげ(正成の3男)が、天王寺から退却たいきやくして榎並に陣を置いたようで、古くから軍陣を置くのに適した場所だったのです。

また、十七箇所城とって、同書同年4月22日条に正儀が、「河内十七箇所」に退いたようで、明応3年(1493)の河内御陣図(福智院家文書)に守口の南方、八箇所(現門真市)に「十七箇所」と書き込まれているのは榎並城の説もあります。

天文17年(1548)10月28日の条では、三好長政・政勝父子が、榎並城よに拠って三好長慶の軍勢と抗戦したとあります。

長政・正勝父子と長慶の抗争はその後ますます激しくなり、翌年6月17日長政は榎並城を正勝にまかせ、兵3千騎を率いて淀川北岸の江口に渡り城郭を構えて迎え討つ態勢をとった。しかし6月24日長慶軍は江口城を総攻撃し、長政は討ち死にしたとあります。



野江神社・水神社

すいじん
野江神社・水神社 大阪市城東区野江4丁目28

祭神は、弥都波能売神ひどはのめのかみです。

この地域は、たびたび洪水に襲われていました。そのため水難除去のため榎並城築城時に三好長政が祀ったのがはじまりと伝えられています。

元禄16年(1703)の大洪水には霊験れいげんがあり、神社にその時の祈願札が残っています。神社横には、洪水の時に流れ着いたというかなり損失しているお地蔵さんをお祀りした地蔵堂があります。

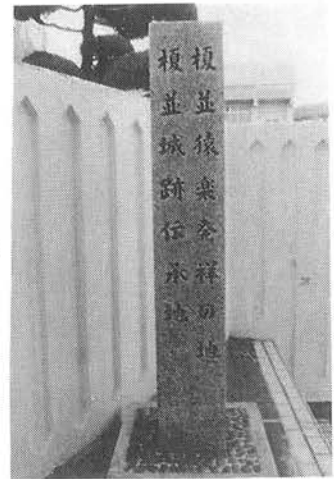


野江神社の地蔵堂

榎並猿楽発祥の地 大阪市城東区野江4丁目1-28

榎並城跡伝承地のところが、鎌倉から室町にかけての中世芸能の猿楽を神社の祭事に奉仕していました。丹波猿楽・大和猿楽・近江猿楽・伊勢猿楽の4座があり、そのうち丹波矢田郷(現在亀岡市)を本座、榎並を新座と言いました。

榎並猿楽はこの辺りに座を構え、住吉大社のお田植神事に奉仕していましたが、丹波猿楽の楽頭が大和猿楽に移り、室町の中頃には衰退していきま



榎並小学校グラウンド側に建つ

野江神社より都島通りを地下鉄の関目駅に向かって600mほど歩き、左折し都島通りに沿うようにある道は、約10余町ほどくねり曲がった道が森小路までつづきます。

これが俗に言う「七曲がり」「七曲がり街道」です。七曲がりは、道幅は1間半(約2.7m)で、豊臣秀吉が大坂城を築く時に、敵軍の様子や兵数を察知するために蛇行させた^{だこう}と伝えられています。

子どもたちの早口言葉に

「関目のらっらの七曲がり

七つ曲って七曲りにくい七曲り」と言うのがあります。

関目の一里塚

この辺りは茶町で茶屋が立ち並んでいたところでした。また、ここには一里塚があり、「関目の一里松」とか「一里山」とも言われていました。

子守唄に「うちのこの子は泣いても可愛い、紙に包んだ^{せんべい}巻煎餅、ここはどこかと^{ひきやく}飛脚に問えば、ここは関目の一里塚」と唄われていました。

この一里塚も明治のはじめに丘も崩され松も枯れ何も残っていません。道幅は広がっていますが、曲りくねった所は現存しています。現在は京橋口からの距離の入った新しい京街道の碑が建立されています。



新しく建てられている京街道の碑

関目神社 大阪市城東区成育5丁目

豊臣秀吉が天正8年(1580)大坂築城にあたり、武神の素戔鳴尊すさのおのみことが祀られている。

関目神社が、大坂城東北で鬼門きもんに当たるところから、方位の守護神毘沙門天びしゃもんてんをお祀りした神社です。



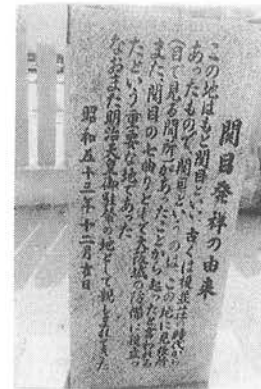
関目神社

関目発祥之地碑

関目神社に入った左側に関目発祥の地の碑があります。

「題字は城東区長辻本博、昭和五十三年十一月関目町会が建てる」とあります。

関目の名は「古く榎並庄時代から、この地に目で見はる関所があった」ことからです。



関目発祥の由来

明治天皇聖蹟せいちよく 大阪市城東区関目4丁目

この碑は、地下鉄関目高殿駅前の民家とガレージの間に建てられており、正面の明治天皇聖蹟は見えますが、他の面は建物で読めませんが、西井茶屋跡大正十四年五月十日建之とあります。

明治天皇の大坂行ぎょうこう 幸もいろいろありましたが、結局慶応4年(1868)3月21日に京都を出発され、八幡で一泊、22日雨模様の中、夜8時頃に守口の難宗寺に着き、宿泊。翌23日も朝から雨であったが、朝7時に出発され榎並村西井茶屋で小休されました。

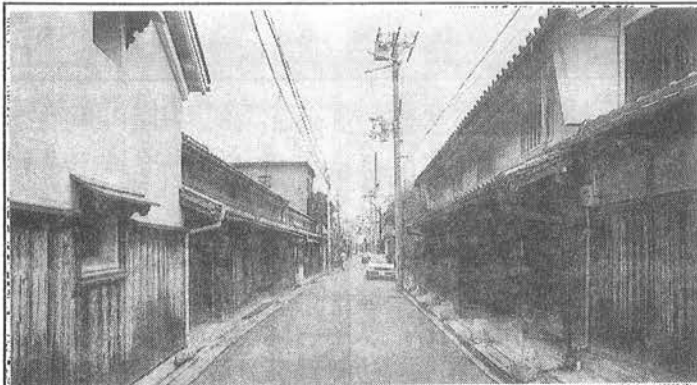
行列は、11時頃に八軒家。午後1時頃には、西本願寺の掛所に入られました。

関目5丁目の交差点の国道1号線と163号線との間の161号線を北東に約1,200m程で千林商店街(千林公園)の入口に着きます。

この所には、朝日観音・北向地藏尊・延命地藏尊・子安地藏尊などたくさんの地藏さんがあり、地藏信仰が厚かった地と思われます。その中の朝日地藏は水路のあったところで、船頭が舟からさお竿で顔をささえたのか、鼻が欠けています。



明治天皇が休憩された茶屋跡



測量履歴

昭和53年第2回改測

平成20年更新

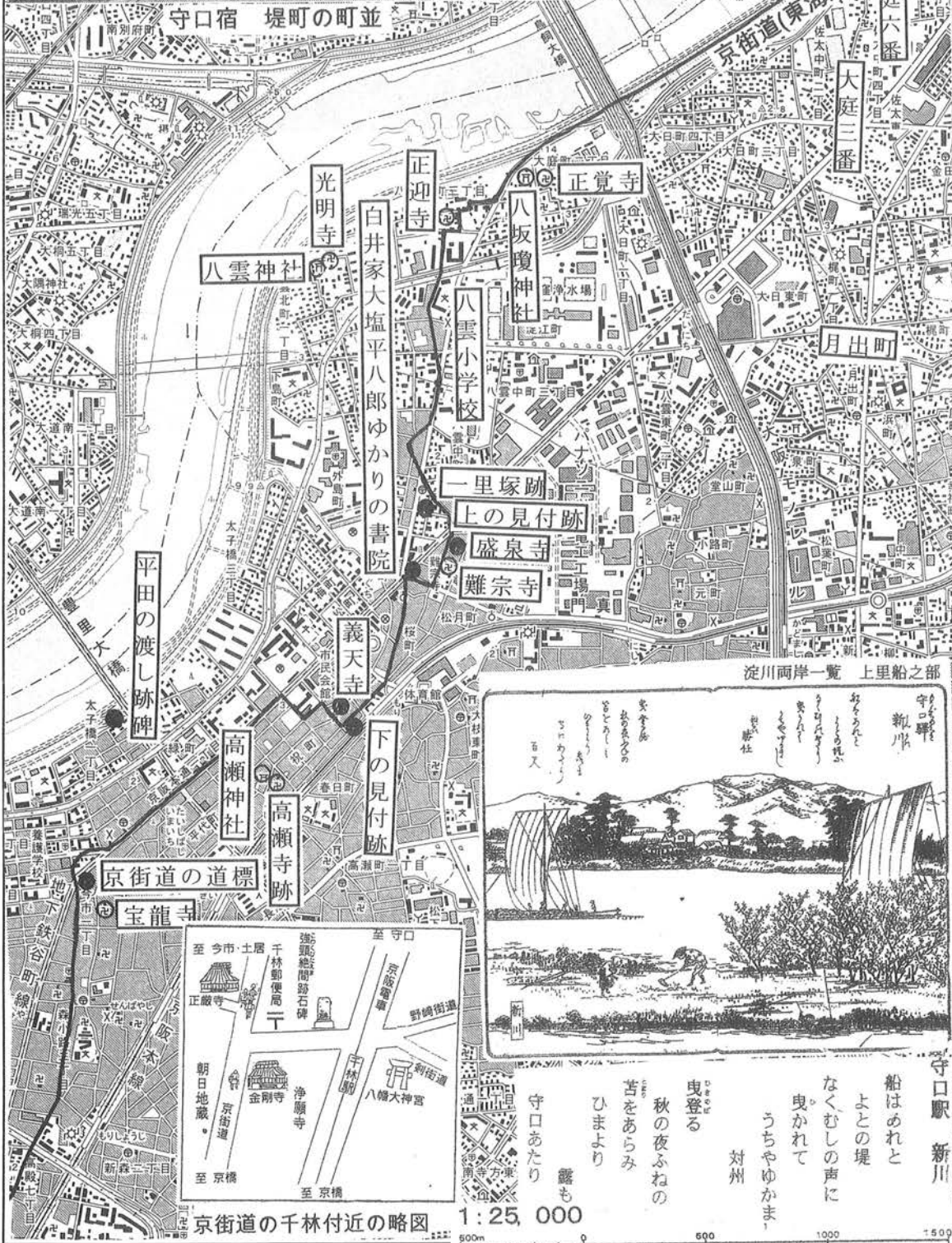
著作権所有兼発行者

国土地理院

平成20年10月19日発行1刷

大阪市旭区

守口地域の地図



守口駅 新川
 船はめれと
 よとの堤
 なくむしの声に
 曳かれて
 うちやゆかま
 対州
 曳登る
 秋の夜ふねの
 苦をあらみ
 ひまより
 守口あたり 露も



1:25,000

千林は樹木^{じゅもく}が生え茂っていた所から、この地名がついたと言われてい
ます。千林から約450mほど北に進み、右折して100mほど進むと大きな
楠のある宝龍寺に着きます。

天照山宝龍寺 大阪市旭区今市1丁目

法華宗日蓮宗総本山宝龍寺とって比較的新しい寺です。この境内に
直径50cm~1.2m。高さ15mほどある大楠が4本あり、天然記念物に指
定されています。ここには、小さな祠^{ほこら}がありますが、これは大坂築城
の時、天守閣^{むね}の棟がどうしても上がらず困っていると、秀吉の夢枕に白
蛇が現れ、「われは城北の大楠の主なり」といって消えました。秀吉は
早速^{さつそく}、家来にその場所を探させた。すると白蛇がこの楠^すに棲んでいる
ことがわかり、この地が大坂城の北東に当たり鬼門除^{きもんよ}けとして祈祷所^{きとうしょ}と
決め、小さな祠を建て楠玉大王を祀りました。

この地は旧弥栄神社の社地です。そこに昭
和23年に宝龍寺が再興され、聖徳太子が楠で
作ったという観音像が安置されています。

もとの京街道に出て150mほどで国道1号
線の今市交差点に出ます。ここの歩道に「京
街道(東海道)」の略地図と道標があります。



京街道(東海道)の道標の略地図

今市

慶長10年(1605)の『摂津国絵図』には、村名と一緒に
「今市ノ茶屋」と記されており、また、同じ絵図には、
「和泉堺大小路ヨリ今市茶屋まで四里二七町一反」とあり
今市は京街道の茶屋が立ち並んでいた事がわかります。



今市の京街道の道標

太子橋

今市交差点より1号線を進むと太子橋です。聖徳太子が四天王寺を建
立するための適地を探しにこの地に来ました。この時この辺りの大庄屋
田嶋家で休憩され、お茶とよもぎ団子をだしてもらい、太子はお礼に自
画像を贈ったとあります。ここから太子の地名が付いたと思われま

へいた 平田(平太)の渡し跡

平田の渡しは、天満の^{ところ}所にあった「源八渡し」と共に重要な渡しで、この渡しは、現在の豊里大橋の所^{かきょう}にありました。古くは軍事目的で架橋しかなかったと言われていますが、川幅が広く、その上^{ひんぱん}頻りに洪水がおこり橋を架けるのが困難だったのでしょう。この渡しは、延宝^{えんぼう}4年(1676)頃から始まり元禄14年(1701)刊の『摂陽群談』^{せつようぐんだん}によると、淀川では15ヶ所ほど渡しがあったと記されています。



平太の渡し跡碑(豊里大橋手前)

平田には淀川を上下する川船を改める平田番所が置かれていたところです。

淀川兩岸を結ぶ重要な渡しであったので、明治40年(1907)、大阪府営となり、大人2銭、子ども1銭で有料でした。

大正8年(1919)には、道路の一部として、無料になっています。昭和23年(1948)以降は大阪市営となりました。

その後、昭和45年(1970)に豊里大橋ができ、平田の渡しは廃止されました。



明治末期に改修工事された淀川と中の島

第3章 守口市の地域

土居

土居には、素戔鳴尊すさのおのみことを祀る神社と、狼島には上賀茂うがもの大神を祀る社と守口の桃町ももまちにあった大隅神社ごうしが合祀され、守口と土居の産土神社うぶすなとなる「守居神社もりい」があります。京阪電車土居駅の北側すぐの所に本願寺第八世法主蓮如上人ほうしゅれんによの10男で第23番目の子、実吾上人だびによって改修された、「清沢寺せいたくじ」や近くの日吉町よしじまには実吾上人「茶毘所跡だび」の碑があります。

土居の北側の淀川には葭島よしじまがあり、砂地であったので守口大根の産地でしたが、明治の末に淀川の改修により、守口大根は、現在は岐阜県や愛知県に生産地は移っています。土居地区では、豊臣秀吉が築堤した文禄堤跡や京街道の位置を確定するのは今は困難です。

守口宿の起こり

守口は、文禄堤を中心とした、京街道があり、元和元年大坂夏の陣げんなで豊臣氏がほろぶと、徳川氏が大坂や西国大名を支配するために大坂に拠点を置きました。そのため東海道は大坂まで延長されたのです。

守口は東海道57番目の宿場となりましたが、しかし、その成立時期は明確ではありませんが、右の資料は守口宿に関係した書です。

御證文写を以重々奉願上候。	寶曆三年	西十一月廿八日	問屋剛郎兵衛	以上。
萩原藤七郎様	御役所	御證文写	繼人馬役昼夜無油断之義、可相勤者也	元和武辰年十二月十八日
取締役	御用向無油断之義相勤候、付帶刀可申付者也。	元和武辰年	正月五日	川清 助御印
齋 甲賀守御印	白 又兵衛御印	齋 伊賀守御印	白 又兵衛御印	川清 助御印

守口宿の成立期は明確ではないが、上の資料は守口宿が初めて出ている『御証文』の□中に元和武辰年十二月十八日とあり、この頃に東海道57番目の宿場となったと思われる【守口市史】より

ここには元和二年(1616)十二月十八日とあり、この頃に「東海道57番目」の宿場になったと思われます。

『民間省要』に「道中は諸所に至るといえど、まず東海道56次を第一とす」とあり、また、『五駅便覧』には、「江戸より大坂まで、馬継五十六宿、外人足一ヶ宿道方合百三十七里四町一間、船共。」とあります。この外人足一ヶ宿とあるのは守口宿のことです。「江戸より京都まで馬継五十三ヶ宿、道方合百二十六里六町一間」とあり、東海道は江戸より京都と大坂までの2コースの距離が示されています。

守口宿の成り立ち

一般的に宿場は、いくつかの町や村が寄り合^よって成り立っています。数は少ないですが、城下町の一部が宿場になっている所もあります。

隣りの枚方宿は、新岡町村・岡村・三矢村・泥村町の4ヶ所から組織されているように、単一の町村でなく2～3の複数の町村から成り立っている場合が多いです。しかし守口宿は守口町だけで組織されています。

町や村は行政上では、それぞれの領主の支配をうけますが、道中奉行管轄^{かんかつ}の宿では、宿に関する事は道中奉行の支配下です。

道中奉行の管轄外の宿では、宿のことも、その領主の支配をうけていました。

そこで道中奉行管轄^{かんかつか}下の宿、すなわち五街道の宿では、宿民は二重の支配を受けていたのです。

守口宿の形態

『東海道宿村大街帳』によると、明和5年(1768)守口町明細帳では、当宿管轄^{おうかん}の往還(街道)は、南十番村より森小路まで。

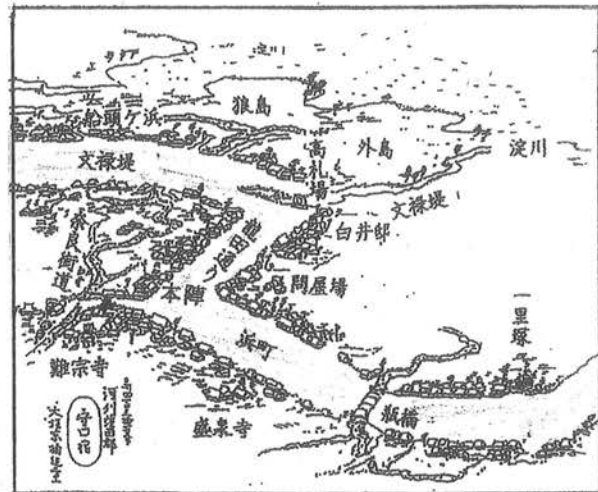
道幅は2間～2間半(約3.6m～4.5m)。

宿内街道の長さ、21町31間(約2.3km)

宿内町並み南北11町51間(約1.3km)、そのうち文禄堤上391間(約720m)町並の幅約1町(109m)。

宿勝示^{しゅくぼうし}は、南十番村の境^{さかい}に1ヶ所と、土居村境に1ヶ所ありました。

守口宿は、宿場の安全を考え枝郷^{えだごう}です。裏町や横町はできるだけ少なく、本町の右なら・のぎきの道標のある来迎寺坂を下ったところが、旧奈良街道が通る字来迎町の所と、淀川筋^{せんだう}の船頭ヶ浜に3～4軒の家があったぐらいです。街道筋の両側には、間口6間(約10m)を基準とした家が建ち並び、その後ろ側には同じ幅の畑^{まぐち}がありました。守口の宿場町は周囲には用水路があり、「環濠集落」をなしていました。



文化年間(1801～1817)の守口縮図(国立博物館所蔵)わかりやすくするために地名を記入しました。

守口宿の状況

守口宿は前記のように、守口町だけで成り立っている宿であったので馬継・馬役はなく人足(歩行役)のみの宿、「人足宿」でした。

このような歩行役の町は比較的通行者が少なく、負担の割合も軽かったので、無役町とか脇町と言って地子免許(年貢)の免除はしてもらえなかったもので、「御年貢町」と呼ばれました。

しかし、守口宿も本陣や問屋場など公共施設を設け、人足100人常備していたので、宿民の負担を軽くするために、元禄元年(1688)になって地子免許(年貢)5,000坪や問屋給米、御継飛脚給米などが毎年免除されるようになりました。

延宝年間(1676～80)の終り頃の「守口町」の推測される記録では。

惣家数 (179)軒
 破損家 (25)軒
 恙無家 (75)軒
 (変わらない)
 無役 (76)軒

○ 守口宿には、旅籠(木賃宿も含む)27軒
 ● 旅籠屋は、夕食・朝食の2食付きの宿泊。
 ● 木賃宿は何軒あったかは分かりませんが米や干飯、漬物などを持参し、薪代を支払って自炊できる宿。旅籠の10分の1～10分の3位いで安価でした。

人数 838人 水呑 150人

元禄2年(1689)には、守口宿の人足も77人に減り、享保10年(1725)には76戸で、以後は人足役株が76株と固定しました。

宿と助郷は毎日立会い半々ずつ勤めあっていました。これ以来宿方では毎日100人が勤めて、その他の人足が入用の折は、助郷より勤めるように言われていました。

守口町には、継立人足や日雇いに従事する者がかなりいました。

東海道『京街道四宿』間の御定駄賃・人足賃銭

『宿駅』児玉幸多著参考

『京街道四宿』宿間までの駄賃・人足賃銭(文)	大坂～守口 2里	守口～枚方 3里	大坂～枚方 5里	枚方～淀 3里	淀～伏見 1里14丁	伏見～大津 4里8丁
正徳元年(1711) 乗掛荷物人足 天保15年	—	—	263文	151文	53文	179文 弘化元年 265文
正徳元年 軽尻馬1疋 天保15年	—	—	165文	95文	35文	113文 弘化元年 168文
正徳元年 人足1人 天保15年	44文	68文	125文 天保14年 167文	73文	26文	84文 弘化元年 130文
	59文	108文	167文	103文	35文	

正徳元年(1711)。米1石は銀58匁(1匁は銭165文)・米価は大きく変動します。

天保14年(1843)。米1石は銀81匁…(天保15年=弘化元年)

守口宿では、その後、人足が76人しか勤める者がなく、不足する24人分の^{ふじょきん}扶助金が出ました。

このように人足株は固定しましたが、宿は^{ひへい}疲弊(疲れ切り)し、元禄の地子免許、扶助金があっても守口町の本百姓も減少し、天保13年(1842)には戸数はかわりませんが本百姓が61軒になり、無高百姓が116軒にもなりました。

守口宿の人々の状況

継立てのため人馬提供^{ふうう}…風雨・寒暑^{かんしよ}の節といえどもいふへからず…と高札文言にあり、義務であると同時に、^{きゆうまい}給米や公定賃銭が支給されました。こういった一種の特権もありました。

義務としては、旅人を休泊させるための本陣・旅籠屋を営むこと。また、食事の給仕をさせるために、旅籠屋1戸につき2人の^{めしもりおんな}飯盛女を置くことが認められ飯盛旅籠屋などは^{うるお}潤い栄えました。

人足宿ではあったが、宿駅なので色々な義務もあり、宿駅の農民たちは、普通の農村とは違って大通行の時などには、農家なども旅行者を宿泊させなければならなかったのです。

守口宿は、この地方の商工業の中心で、ここに住む住民たちは、今の言葉で言えば、開かれた社会で、身分^{しゅつしん}や出身での生活^{せいやく}の制約は少なかったようです。例え、来住者であれ、養子であっても、資産や能力があれば町の仕事につくことが出来ました。その町役人になるには^{いえがら}家柄や資産もあり、同時に能力・教養・人望などが必要でした。

文禄堤上の各家では、朝起きるとまず淀川や水路から生活用水の組み上げることから始まり大変でした。

守口地方は、底湿地で水害には悩まされていました。当地で文禄堤が唯一の高所で、農民たちも田舟^{ひなん}などで避難してきました。

また、目の前の淀川にいくつもの島々があり、多くの舟が行き来するのどかな美しい景色を見ながら暮らしており、今では想像もつかないほど^{ほうふ}豊富で多種の魚がおり、淀川と生活が密着し、当地の各家庭では雑魚豆煮などもよく作って食べていました。

宿場内のように

土居から守口宿の下見付しものみつけに着きます。ここには見附松があった所で、明治43年に京阪電車が開通するまでは、東野田へ行く馬車の停車場があった所です。その前には義天寺があります。

ぎてんじ
義天寺 守口市本町1丁目8-8

本門かくりんざん仏立宗 鶴林山義天寺仏立宗の開祖、
日扇上にっせんしょうにん人が明治23年(1890)7月17日大阪の
秦氏ふやの招きで、京都麩屋町(現長松寺)の館やかた
を早朝に出て、伏見から新造の屋形船で大阪
へ下る途中、体調が悪くなり、堤上の埴生の
茶店(森田伊六の新座敷)はにゆうで休憩されました
が、ここで息を引き取りました。



野江の仕置き場より移された題目碑

後に、日聞上にちもん人が茶店を買い取り、この地
に明治29年、七回忌ななかいきの講の時、信者の人々と共に法要を営み「御遷化
地道場ごせんか」を建てたのが義天寺の始まりで、当寺には大阪の野江刑場より
移された「南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきょう」のお題目だいもくの石碑があります。また当寺には
義天閣や当時の羽織はおりや扇子ほうえ、袈裟けさなどの遺物が保存されています。

旅籠茶店丁字屋しゆくがん 宿雁(らくがん)などを売る茶店でした。

浜町の朝暘堂(石橋家)の出店で、「宿雁しゆくがん」などを売っていました。そ
の宿雁の由来は、享保(1716~35)の頃、西行法師じせきたんきゆうの事蹟探 究のため諸
国をめぐるにいた、僧似雲じうんがこの茶屋に立寄ったとき、床の下より雁の
鳴く声を聞き、主人に聞くと「羽根をいためて、弱っていたので、かわ
いそうなので飼っている」と聞き。

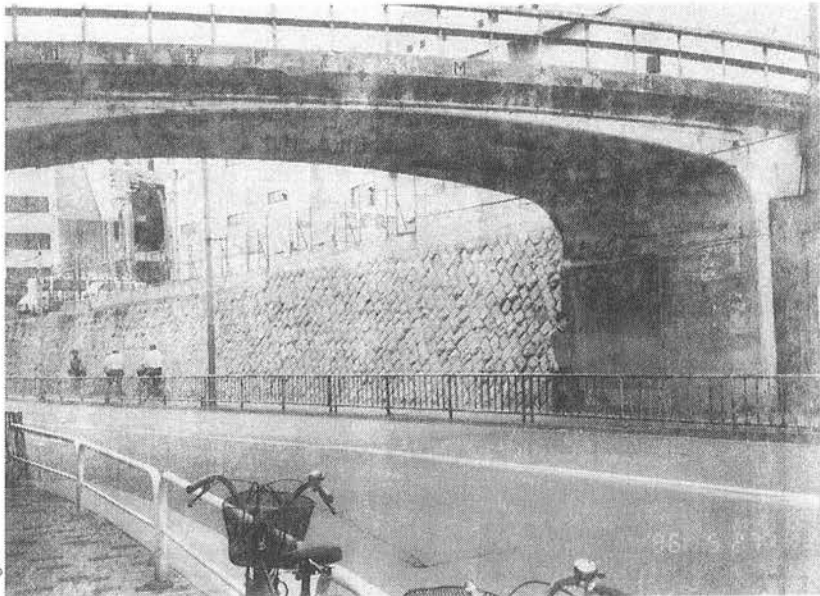
似雲は、帰るべきとこよの国ととこの下に、
おもひ出でてや 雁の啼くらむ
と詠み、ここから宿雁が銘々されたと言われています。

守口の名菓で、明治天皇や大正天皇が皇太子の時にも献上されました。
朝暘堂は、浜町で、店前に大きなのれんをたらし商っておられましたが、
戦時中に砂糖が手に入らなくなり、閉店されたそうです。

守居橋と本町橋

義天寺より少し進むと守居橋があります。これは守口から土居へ行く橋です。さらに進むと料亭柿右衛門があり、その先が本町橋です。

この両橋は川に架けられたものではなく、明治の末に淀川改修工事で、文禄堤は堤防としては不要になりました。そこで淀川の一部が陸地化した所へ行き来するために堤防を切断し架けられた橋です。

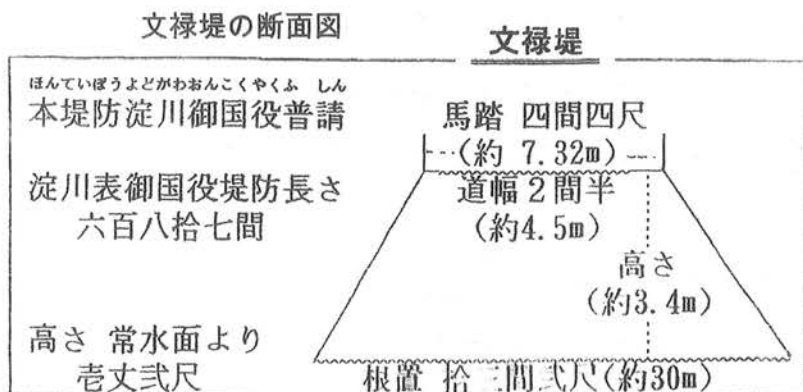


本町橋の下から文禄堤の幅の石垣を写したものです。しかし、現在はマンションの建設で石垣の一部が取り除かれ残念です。

文禄堤の断面図

守口や門真をはじめ河内地方は底湿地であったので、多くの環濠集落かんごうしゅうらく (垣内式集落かいとしき)がありました。

文禄堤は別ですが、お互いの生命や財産、農作物などを守るために堤防の根置・幅・高さなどが決められていました。



守口や門真地方は、文禄堤や環濠集落の堤防などいろいろありますが、堤防の根置・幅・高さなどが定められていました。

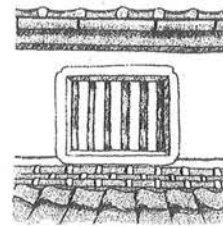
本町(堤の町) 文禄堤の上にある町

本町橋を渡ると、宿場当時の建物を改築され、中華料理の追立おいたてがあります。二階の低い「厨子二階ずし」造りです。

さらに進み市役所の駐車場に通じる左(北)角に郷藏ごうくらがありました。江戸時代、年貢米を領主に納めるまで、保存しておく蔵で、この蔵は年貢米3升3合が免除されていました。蔵は30年ほど前まで残っていました。

西田家 守口市本町2丁目

京に向かって右側で郷蔵跡の前に、守口宿の中でも宿場時代の面影を残す建物があります。当家は「あかね」と言う屋号で、呉服商を営んでおられました。



虫籠窓は外から見て虫籠に似ているところからこのように呼ばれています。たて格子の窓に、漆喰で漆籠(ぬりごめ)たものです。火災や泥棒などの防犯のためでもあります。

虫籠窓

みよし写真館 守口市本町2丁目

古い建物は二階の低い「厨子」造りですが、みよし写真館は、少し新しい建物ですが、「本二階」と言って、二階も一階同様に使用できる構造です。

徳永家 守口市本町2丁目

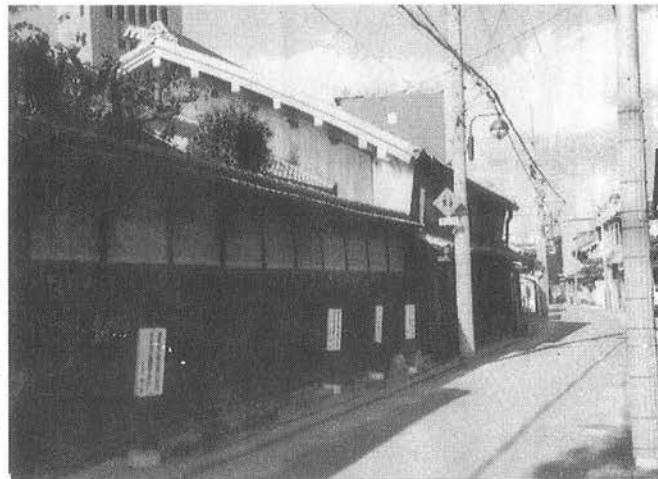
すぐ隣りの両側に、徳永家があり、右側が本家だそうです。この建物も二階の低い「厨子二階」で、両側には、^{うだち}卯建が上がっています。

守口漬けは徳永家や、菊田太郎氏の^{しゆき}手記に「余が家熱田社詞官に発祥し弓矢を捨てて守口に土着四百年、旧本陣吉田家などと並んで守口漬けの調整頒布を行

い」とあり。菊田家や本陣などで守口漬を製造して販売されていました。この辺りは菜屋、綿治、綿喜、あかねや、船長などの屋号がみ

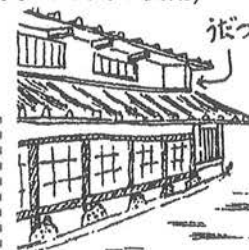


厨子・つし二階とは低い二階の建物で武士などが、刀を振り回さないようにとか言われています。商家などは、屋根裏や天井裏といって倉庫がわりの物置にした。



厨子二階本町(堤の町)にある徳永家(二階は商家では蔵の役割)

られ米や菜類、綿花等の集散地で商業の中心地でした。



この辺りより、古い「厨子=つし二階」建てで、「虫籠窓」と格子戸のある建物が建ち並んでいます。

卯(宇)建とは、うだつ、うだちとも呼びますが、防火や隣家との目かくしや雨よけの袖壁です。一般には借家は、卯建はあげることはできず、卯建のあがった家に住めば一人前の成功者とされました。

もう一説には、家のはりの上^{むなぎ}にあり、棟木をささえる短い柱(椀)で上から押さえつけられ、思うように動けなく、なかなか出世できないことに例えられています。

守口大根と守口漬け

守口漬けについて、約150年程前の文久元年(1861)に『澱(淀)川兩岸一覽』に下記のように記されています。

「^{さてまた} 偕亦、^{ながだいこん} 長菜菔の^{かすづけ} 糟漬は、当所の名物として、世に守口漬と号す。風味^{ことさら} 殊更に美なり、^び 因^{ちなみにいふ} 云、此^{この} 長菜菔は、^{なま} 生なる時は宮前菜菔と号す。

^{いにしへ} 往昔は、^{せつしゅう} 摂州天満天神の宮前^{たんぼ} いまだ田圃なりし^{ときつく} 時作り出せしを^{もつ} 以て宮前の号あり、^{しか} 然るに、浪速繁榮に^{したが} 随ひ、^{しだい} 漸に土地ひらけて、今は宮前は^{さら} ふも更なり、宮後も^{この} 数十町人家となり、^{ながえ} 此大根も当時は長柄の^{なま} 辺りにて作るよし。^{しか} 然れども、^{なほ} 尚、旧名を用いて^{みやのまえだいこん} 宮前菜菔と^{しょう} 称す。余有を、^{さる} 此守口に求めて、^{かすづけ} 糟蔵に製し守口漬といふ。」とあります。守口では代々徳永信太郎氏などの家では、この大根を漬物にして販売されていました。

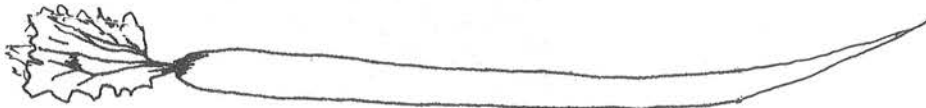
『守口市史』には、同家の伝えるところでは、「天正13年(1585)3月豊臣秀吉が当駅の本陣吉田八郎兵衛方に宿泊したとき、これを食前に出した。秀吉大いにこれを^{ちんみ} 珍味して喜び守口漬けの名を与えた」とあります。

守口大根の起源

守口大根の起源は、中近東で、西ヨーロッパ、東は中国へさらに日本には、中国福建省から伝わったといわれています。

守口大根は、大坂の天満宮の前でかなり広範囲に作られていたので宮前菜菔(大根)と言われていました。しかし、開発が進み、^ぞ 淀川沿いの^{ながら} 長柄の辺りから守口にかけて栽培されていたと思われま

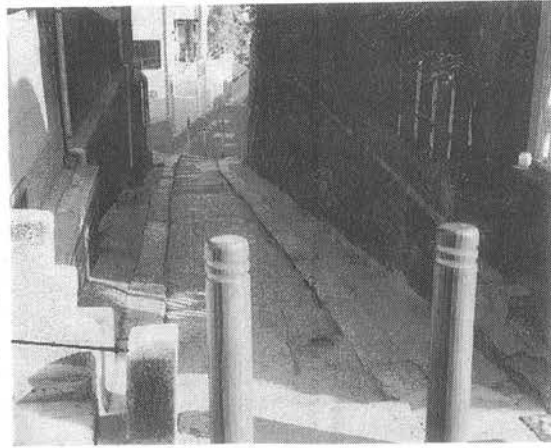
す。その後、守口でも、淀川の掛け替えで砂州が少なくなり、現在では、守口大根の栽培地は、愛知県や岐阜県の長良川流域に移っています。



守口大根は白色のものが多く、江戸の中頃は66cm、130年ほど前は1mと長くなり、大正末期頃には、1m30cmほどになりました。その後、研究が進み1m60cmまで栽培されるようになりました。

『^{せつようきかん} 摂陽奇観』に、「^{とうだいもとくら} 守口漬けは灯台下暗しにて、浪華にては賞せず、関より東に賞す」とあり、大坂の方で余り評判とならず、東の方でかなり評判になったようです。守口漬けは大根の他に、^{なす} 茄子、^{うり} 瓜、^{なたまめ} 刀豆などもありました。今では、守口や門真でも試験的に栽培されている人がおられます。

徳永家より堤の町(本町)をさらに進むと右側に小さな道標があります。



道標 奈良街道へ

ここには、昔を^{しの}偲ばせる階段の道があります。道標には、右なら のぎきとあります。

その階段道を降りた所が「旧奈良街道」で、室町のはじめ頃、現在佐太中町にある来迎寺が^{らいこう}あった所と考えられ、この辺りの町を来迎町と呼び、そこへ通じる道であるところからから来迎坂と呼ばれています。

上の写真の左端にある石碑は、右なら のぎきみちと刻まれた道標です。

この坂は、来迎町や難宗寺へも通じており、大名行列が鉢合わせなどのときは、この道から難宗寺へ避難したと思われます。



魚万楼跡

道標の反対(北)側に宿場ができた頃から、この地で旅籠屋を営み守口宿の旅籠屋や茶屋の元締^{もとじめ}の役割を果たしていました。

7代目の魚屋万右衛門が、寛政5年(1793)頃に「女売女業発端書」^{しよくばいにぎょうほったんしょ}を提出し、一時差し止めになっていた、飯盛女業^{めしもり}が再び許されました。

慶応4年(1868)明治天皇大阪行幸のときには華頂・仁和寺・両殿下 中山・正親町^{おおぎまち}両大納言、廣畑内大臣、三条実美^{さんじょうさねとみきょう}卿、岩倉侍従長、東坊侍従などが宿泊しています。また、明治43年(1910)皇太子(後の大正天皇)が難宗寺で宿泊時に、東宮職御用命により、さつま汁、鮎^{あゆ}の塩焼きを献上しました。この頃は淀川も鮎がとれたのですね。

魚万楼は、戦後も営業しており、年配の方でここで宴会^{えんかい}をしたり、川舟で来たという人の話も聞きました。

五ヶ荘用水路跡 淀川より水を取り入れていた水路は今は、桃町緑道公園になっています。

○守口荘・・・守口・高瀬・土居 ○小高瀬荘・・・大枝・世木・馬場

○寺方荘・・・南・北寺方 ○橋波荘・・・東・西橋波 ○稗島荘

この地域は金気^{かなけ}が多く、井戸の水は直接飲めません。そこで、淀川から水をひき飲料水・炊事洗濯・灌漑用水^{かんがい}にも使用していました。

ちょうちんや
川東提灯屋 守口市本町2丁目

五ヶ所用水路より20mほど進むと、今も、昔のままの建物で提灯屋さんを営んでおられます。昔は、旅や日常生活の必需品で、守口でも盛泉寺の前や、佐太の間ノ宿の所にもありました。

現在は日常生活では不要になり提灯屋さんもだんだん減り、今では北河内や淀川の向こう側にもなく、この川東さんの所だけが現存しています。現在も冠婚葬祭や地蔵盆、村祭り、選挙などによく使われます。



川東提灯屋さん

川東さんの庇屋根の壁の所には、京都の商家などの屋根にみられる鍾馗さんの二像が上がっています。これは中国の伝説上の疫病神を払う神です。なかには天邪鬼を踏みつけている大変珍しい像もあります。



旅道中の姿

ふだば
札場(高札場)

提灯屋さんを少し進むと、八島交差点の所にでます。ここが守口宿の「高札場」のあった所です。札の辻と呼んでいました。

ここには、長さ二間一尺五寸(約4m)、横幅五尺五寸(約1.5m)の札が6枚かかっていました。

内容は、御条目御札 毒薬御札 人馬賃御札 上下人足御札 付火。ここから文禄堤を離れ、ほぼ直角に右折して問屋場のある市場町にでます。このように曲がっている所を「桧形」とか「曲尺手」と言います。

白井家と大塩平八郎 守口市龍田通り

白井家は、守口宿の村役人を務める名家、門真だけでも良田を20町歩持ち、米蔵が建ち並ぶ豪邸で、古手屋や、また、いつ頃からか分かりませんが質屋も営む豊農でした。



現在の白井家

この白井家は代々彦右衛門と名乗っていました。孝右衛門は世を息子に譲り彦右衛門を名乗らせ、自分は隠居していました。

主人の白井孝右衛門は大坂町奉行の与力で、陽明学者であった大塩平八郎に早くから師弟の間柄で経済的に援助をしていました。

そんな関係から息子彦右衛門は幼くして内弟子になり住み込んでいました。白井家には、平八郎は時間があれば陽明学の講義に来ており、ここには平八郎のゆかりの「書院」が現存しています。

大塩平八郎は、自分の蔵書1,241冊を売り、668両(今の7~8千万円)をつくり、貧民に米をほどこし、同時に乱にも動員を呼びかけました。

守口や門真をはじめ近郊の農民たちに「檄文」と施行札(この札を持参すればお金を渡す)を配りました。白井孝右衛門は、大塩の乱に対して500両ともいわれる経済援助をしています。

大塩平八郎の計画が天保8年(1837)2月19日に東組同心平山助次郎が密告し、予定より早く、五ッ刻(午前8時)になったので多くの者は駆けつけることが出来なかったのです。

しかし、白井孝右衛門は乱に加担したと言うことで、厳しく取り締まられ、孝右衛門は僧姿で高野山へ向かう途中、伏見で捕らえられたとか、

また、乱中捕らえられ打ち首になったとか、病死など諸説があます。

長男彦右衛門は遠島になった説や、牢死したとも言われています。

次男の寅松は、まだ幼なかつたので後に隠岐島へ遠島となりました。

守口町では、この頃の人口が、750人でそのうち男が370人ほどで、刑罰の重軽は別として193人が罰せられており、子ども、老人を除く成人男性のほ

ぼ全員が乱に何らかの形で参加し刑罰を受けたのだと思われます。



白井家隠居所で、「大塩平八郎が陽明学を講義した」ゆかりの書院
写真グラフ守口 NO40

白井さんを「隠岐」と呼ぶ理由
次男の寅松は、まだ幼かつたので15歳になるのをまっ
て、遠島になり、着いた島が隠岐島でした。
当時この島では、流罪人はそれなりの土産物を持参す
る風習があり島民も流罪人の引き受けを歓迎しました。
船着場には草履が並び流罪人がはいた草履の家に引き取
られ、そこで職を身につけ結婚し二人の子どもをもうけ
ました。明治の終わりに突然寅松の長男が帰ってきて、
数年後次男が帰り、その後寅松本人が立派な赤牛を一頭
持って帰ったという話です。
今でも近くの年配の人は、白井さんと言わずに、「隠
岐」とさんと呼んでおられます。

問屋場 守口市龍田通り

守口の問屋場には、問屋役人の長である「問屋」、助役の「年寄」、事務担当の「帳付け」などが詰めていました。

問屋場役人は3名で、世襲で、為太郎、五郎兵衛、庄屋弥兵衛が。

年寄3名、六兵衛、長兵衛、喜兵衛らが、他にも、本陣・助郷総(惣)代・帳付・人馬差がおりました。



守口宿問屋場跡(飯玉清庵)大正
4年(1915)まで、守口小学校が
あった所。『東海道守口宿口歌 菊田太師氏』

本陣 守口市龍田通り

守口宿の本陣は問屋場前にありました。現在は自転車置き場になっています。本陣は、吉田八兵衛の1軒のみです。

この本陣は、敷地300坪、建坪150坪で平均よりもやや小さいほうです。

本陣は、宿役の重要な公的施設で、高い家格(家柄)で、本陣の跡継ぎの時は親類や問屋、その他の宿役人、宿の人足役などが話合ってきます。

その後、代官や本陣ともっとも関係のある紀州侯の大坂蔵屋敷詰の役人に申し出て許可をもらいます。

見取り図から見て、御門より駕籠で入り、玄関八畳に駕籠を付け、四畳・三畳のお廊下を通り、大名などは上段八畳の書院で休泊します。

天井は格天井ごうてんじょうといって、大きな格子形に組んだ天井で、屋根との間に隙間すきまがなく、賊ぞくが入れないようにしたり、庭には、賊が忍ばないように大きな庭石や庭木などあまり大きく伸びないものを植えていました。

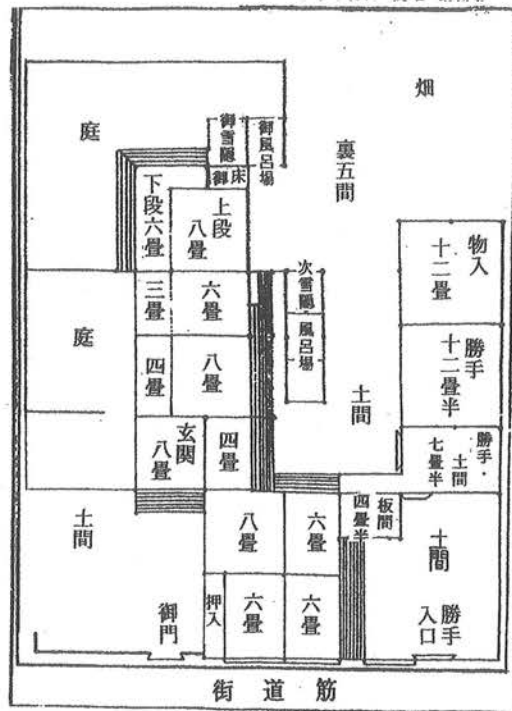
守口宿は、大坂からは2里(約8km)、枚方宿から大坂へ行く場合は守口宿まで来れば、後2里あとなので大名たちは大坂まで我慢がまんして行けば、自国の蔵屋敷に泊まればそれだけ費用が節約できる訳です。

守口宿は片宿かたよといって、旅人たちは大坂へ下るときは、三十石船を、また、西国街道は京街道にくらべ高所にある関係から、雨が降っても通行止めになる心配もなく多くの者が利用しました。

京街道は伏見や京へ向かう旅人に偏かたよった所から片宿といわれていました。

旅籠屋にしても、本陣にしても休泊が少なく経営は苦しく、よく休憩などに利用してくれる紀州侯の大坂蔵屋敷へ、便所の修理や壁の塗り替えなどの費用を願いでています。守口宿には、脇本陣はありません。

間口15間(約27m) 奥行き20間(36m)

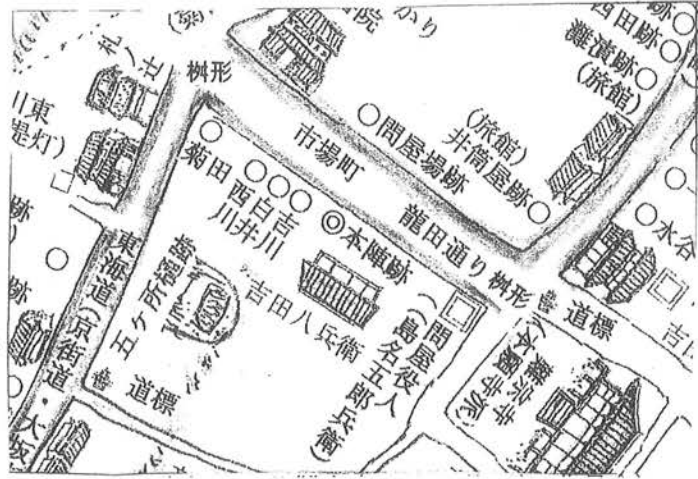


守口の本陣見取り図

問屋場と本陣のある市場町は、現在は龍田通りですが、宿場の街道幅は2間半(約4.6m)、この市場町は大名行列や荷物、人足継ぎなどをおこなった所で、道幅は街道の3倍以上の15m余りもあります。後に出来た、龍田通り2丁目から京阪電車に通じる道より広い道です。

ますがた かねんで
枅形・曲尺手

守口宿では、枅形と曲尺手
と言って大名行列などの鉢合
わせや、くせ者の侵入を防ぐ
ための、90度に曲がる枅形の
道が高札場の所と難宗寺の所
にあります。



難宗寺 守口市龍田通り1丁目5-2

高札場から難宗寺の略図(枅形・曲尺金)

難宗寺は、浄土真宗本願寺派(西本願寺)のお寺で、起源は、本願寺第
八世蓮如上人が越前吉崎御坊を出て、枚方の光善寺をつくり、ここに
3年住み河内や摂津を中心に教
えを説いてまわりました。

この守口地方へ布教する足場
として、実尊が建てたと伝えら
れる来迎寺跡に文明9年(1477)
に守口御坊としてつくられたの
が難宗寺です。



難宗寺の鼓楼と道標 本堂の屋根

また、1年後の文明10年には、
古川御坊(現門真市御堂町にあ
る願得寺)ができ、この地方にも教えを広めました。

東西本願寺の分立

石山合戦の和解からまもなく、信長が明智光秀に討たれ、その後、豊
臣秀吉が天下を統一し、信長と反対にむしろ本願寺と友好関係にあつた
ので、天正9年(1591)秀吉から京都六条堀川の地が与えられ、本願寺は
再び京都に移りました。

翌年十一世顕如が亡くなり、長男の教如が第十二世になりましたが、
その翌年、秀吉の後押しもあって弟の准如第十二世(二世が2人)に
なり、教如は隠棲(現役を退く)することになりました。

しかし、秀吉の死後、徳川家康が天下を統一すると、慶長7年(1602)京都六条烏丸からすまに土地が与えられ、もう一つの本願寺(東本願寺)が建てられました。こうして教如の東本願寺と准如の西本願寺が分立しました。

守口でも慶長11年(1606)難宗寺なんしゅうじと盛泉寺じょうせんじ

菊田家(庄屋)・西田家(呉服屋)・石橋家しゆくがん(宿雁=菓子)の大地主らが守口御坊すなわち難宗寺(西本願寺派)に残り、一方、白井家(質屋)・徳永家(守口漬)・水谷家(木材屋)を中心に資金を持ち寄り、守口坊より本尊ほんぞんを譲り受け浜町に新寺院がつけられました。それが、真宗大谷派の盛泉寺で、小作人たちも、それぞれの寺院の檀家だんかとしてわかれしました。

難宗寺角にある道標

右の道標は、難宗寺の北西にある鼓楼前ころうにあるもので、京街道に面しています。

向かって左の一番小さいものが左京、右大坂とあり、京街道(東海道)のものです。

二本目は、守口街道、奈良への道標です。



御假(仮)泊所とあるのは、大正天皇が皇太子の時に宿泊したものです。

御行在所ごあんざいしょとあるのは、明治天皇の宿泊です。

明治天皇の大坂行幸

慶応3年(1867)10月第15代将軍徳川慶喜とくがわよしのぶが大政奉還たいせいほうかんし、明治新政府が成立しましたが、しかし、慶応4年1月3日に伏見・鳥羽の戦いが起こり幕府軍は敗れ大阪城へ逃げました。

1月7日には、将軍慶喜を討つための征討将軍せいとうに仁和寺宮嘉彰親王にんなじのみやよしあきらしんのうが命令され、9日には大阪城せんりょうを占領し、翌日には薩摩藩兵をひきいて大阪の本願寺(北御堂)かけしよを掛所として駐留ちゅうりゅうしました。

薩摩藩士の大久保利通は、慶応4年1月23日、新政府の参与になり、大久保利通は大阪に都を移す遷都せん と けんぼくしよの建白書という意見書を出しました。

大久保利通や木戸孝允は三条実美、岩倉具視らとむすび新政府をにぎり人心を一新すること、明治天皇の權威を国民に見せるために、幕府を討つことを名目に大阪行幸を計画しました。

その訳は、公卿や寺社勢力のつよい京都から、水陸交通の要所であり、経済も中心地である大阪に都を移し、天皇中心の国家をつくろうとしました。

しかし、朝廷の内部の反対がつよく大阪へ都を移すのは実現しなかったが、大阪への行幸はきまりました。

最初は2月の初めでしたが、天皇の病気で3月5日に延期されました。さらにこの日も延期になり、結局3月20日に、紫宸殿で車駕(天子の乗る車)親政(行幸)の式

がおこなわれ、21日に天皇は惣華輦にのり、議定博経親王・副總裁三条実美・輔弼中山忠能ら以下29人が、馬に乗ったり、地下(身分の低い者)の者は軍装して従いました。



明治天皇が慶応4年2月22日宿泊「御行在所」の記念碑

また、広島藩以下の7藩の兵が先駆けし、長州藩以下8藩の兵が殿をつとめました。

当日一行は、建礼門を出て東本願寺の枳穀邸で小休止し、出発の頃に雨模様になり、鳥羽の城南宮で昼食をとり、淀で小休止をして、この日は八幡で宿泊。

22日、八幡を立ち、楠葉で小休止をして、枚方で昼食(食餐)。つづいて佐太神社で小休止しました。

佐太神社を出発のころから雨模様になり、夜8時頃に今夜の宿泊地の難宗寺に到着すると、西本願寺の明如上人らがお迎えしました。

内侍所(賢所)＝神鏡(八咫の鏡)は100mほど離れた東の盛泉寺です。

難宗寺の所を直角(枅形)に左折して、龍田通りから、浜町に入ります。浜町とは明治の末期に淀川の改修が行われるまでは、淀川の中州(中の島)へ農耕に行くための船着き場の浜があったからだと思われま

す。この辺りは、旅籠屋や商店が建ち並んでいた町です。その浜町に入る右角が、問屋役人を務めておられた吉田為五郎氏のお家です。

少し進んだ右側には、戦中まで、宿雁を売る菓子屋を商っておられた大和屋(朝陽堂)で、さらに少し進むと真宗大谷派の盛泉寺があります。

慶長11年(1606)に本堂を難宗寺に残し、本尊(阿弥陀立像)を持って、浜町に教如上人が新寺院を建てたのが、盛泉寺の始まりです。



盛泉寺の塀重門

その後、兵火や水害などで破壊しました。現在の本堂は天保6年(1868)に、他の堂は天保11年に再建されたものです。

慶応4年(1868)3月22日、明治天皇が大坂行幸のとき、宿泊は難宗寺。盛泉寺は、内侍所すなわち賢所となり三種の神器の八咫の鏡が置かれたところ

です。そのために、前の庭を約3mほど掘り淀川の清めた砂で埋め立て、寢殿を建て、賢所が高くお寺の門から入ることが出来ず、塀重門と呼ばれる門が新たにつくられました。

天皇の帰京は船でした。「朕はどうあろうと、とりかえしはつくが、もし神鏡が淀川に沈んでしまえば大変である」、とすることで、帰日も盛泉寺が賢所となりました。

もう7~8年ほど前だったと思いますが、大塩平八郎が大坂町奉行西組内山彦次郎に宛てた手紙が見つかりました。

浜町は数十年前は宿場時代の面影を残していた町でしたが、今では様変わりしました。

盛泉寺を150mほど歩くと「^{かめばし}瓶橋」がありました。

現在は^{あんきよ}暗渠になっていますが、ここまでが宿場になるまでに出来ていた守口と思われます。

この先は出屋敷といって江戸になってからの町です。

この瓶橋は、小さくても東海道に架かる橋であるので公儀橋です。

工事は幕府の手で行うお国役^{ふしん}普請で費



写真の清水家は建て替えてられ、瓶橋の橋柱は残っています。

用は国単位で国銀を取り立てました。

瓶橋の由来は、当時守口を支配していた代官の竹垣三右衛門直道が^{しゅき}朱熹^{けいさいしん}敬齋箴の〔守口如瓶〕「口を守ることかめのごとし」を引用して付けたものと思います。これは、かめが水をもらさぬように、口をかたくとじて飲みます。発言を^{しんちょう}慎重にするという意味です。この名付けの色紙は、菊田家に保存されています。

上記の写真は、清水家で、宿場時代は呉服商を営んでおられ、店に明かりをとり入れるように工夫されていました。

また、一階のひさし(屋根)は非常に長く、屋根下が広くとってありますが、商売上必要だったのかも知れませんが、^{のきしたさんずん}軒下三寸、旅人たちが雨宿りができるようにしてあったのでしょう。数年前に建替えられ、現存していません。残念です。

国道1号線を越えると出屋敷です。今は、現存していませんが、出屋敷の町にへ入った直ぐ右側には「^{あたらしや}新屋」と言う旅籠屋がありました。

守口宿には、脇本陣はありませんが、何かの時に、脇本陣の役目を果たしていたようです。

一里塚 守口市浜町2-93

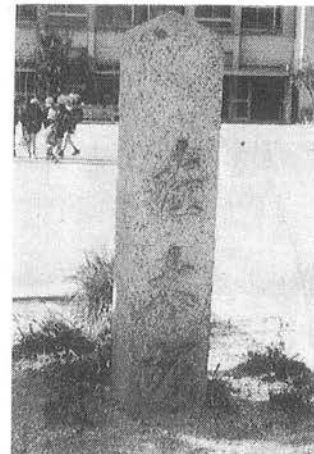
一里塚は、街道に一里(36町)ごとの距離をあらわし、旅人の目印にもなるように、五間四方に土を盛り、その上にエノ木などが植えられていました。

一里塚は、街道の両側にありましたが、現在は京に向かって左側に敷地20坪ほどの所に、昭和40年(1965)に一里塚の記念碑が建てられました。



昭和40年に建てられた記念碑

この一里塚は丁度守口宿の京都側の端にあたり、ここには、旅人を監視する上^{かみ}の見付けがありました。一里塚から、守口小学校の前を通る京阪北本通りを約1kmほど歩くと八雲小学校の裏側に出ますが、学校建設により京街道が吸収され、ここにあった京街道の道標が八雲小学校の校庭に移設保存されています。



八雲小学校にある道標

さらに京街道を300mほど進み老人憩の家の所を左折して、600mほど進んだ所が光明寺です。

光明寺 守口市八雲北町2-23-20

光明寺は、真言宗御室派正法山光明寺と言い、大同元年(806)空海(弘法大師)の創建と伝えられる寺院です。

本尊は、重要文化財の十一面観音で112cmの立像です。



明治に入り、神仏分離令ができるまでは隣の八雲神社の宮寺でした。当寺は何度も洪水や火災にも会い大坂夏の陣でも焼失しました。

現在の建物は、文政年間(1818~29)のもので、寺の入口右側に、象頭人身の双身男天と女天のかんきてん歡喜天さんがお祀りされている聖天堂があります。

お祈りすれば、病や色々な災害からのがれ、夫婦和合、子授かりがあり多くの人々の信仰を集めていました。八雲には縄文時代末期の「八雲遺跡」があります。



光明寺
十一面観音立像
(重要文化財)
グラフ守口NC55

しょうこうじ
正迎寺 守口市八雲北町3-33-19

浄土真宗本願寺派の寺院です。南朝方の武士那須又五郎が、存覚上人かくによ (本願寺第三世覚如上人の長男)にきえ 帰依し、本寺を建立しました。

当寺には、第四世存覚上人筆の十字名号「きみょうじんじつほうむげこうによらい 帰命盡十方無碍光如来」と、蓮如上人筆の六字名号「なむあみだぶつ 南無阿弥陀仏」が伝説ではありますが寺に伝わっており、また、八雲遺跡から出土した五輪塔が保存されています。

この寺より、東に向かって歩き、八雲公園を通り淀川管理事務所の所より京街道は再び文祿堤上になります。

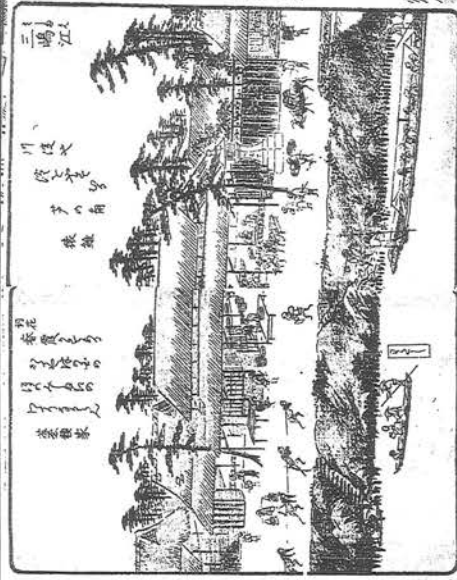
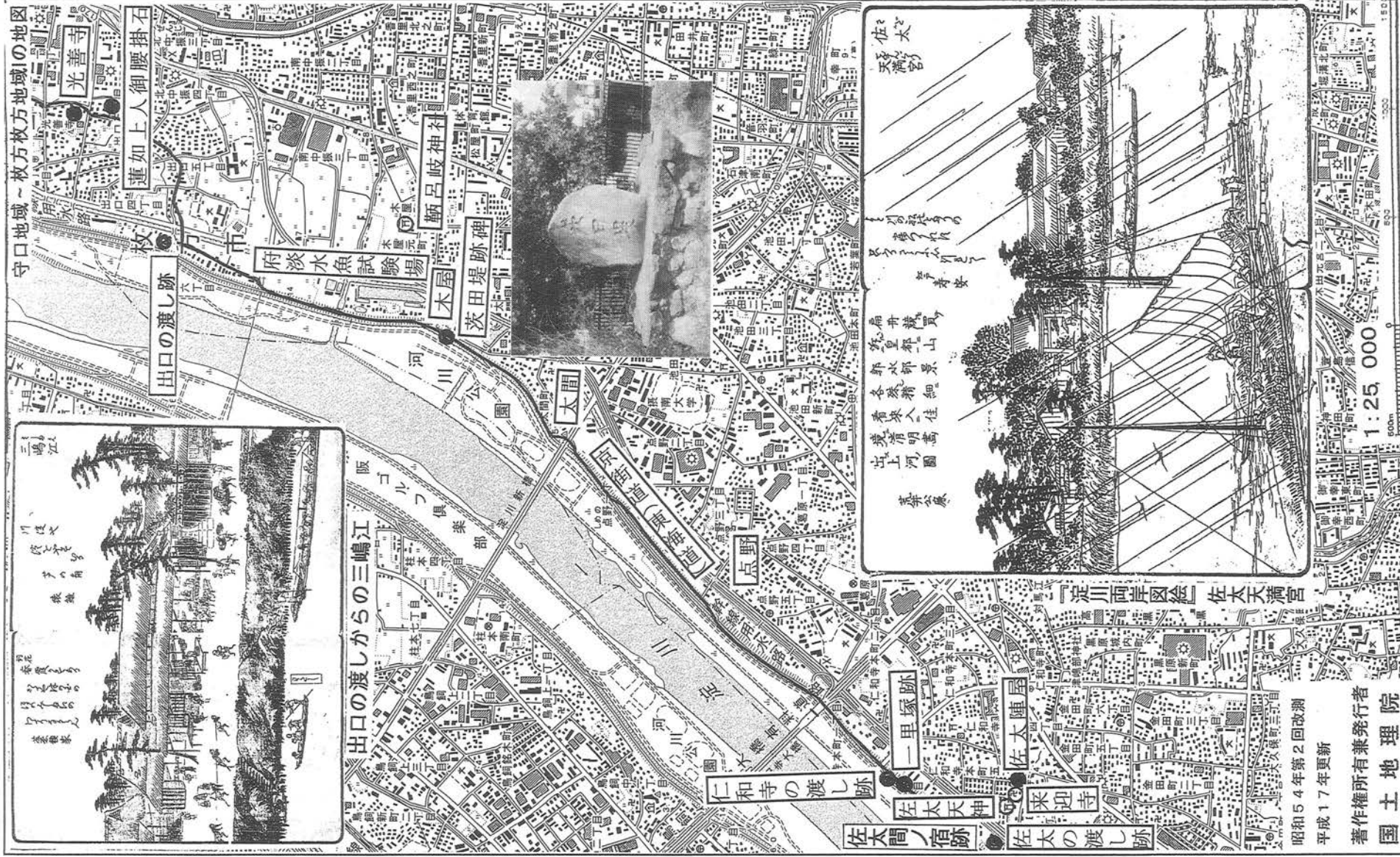
のぼる右手側(東)にやさかにじんじゃ 八坂瓊神社とすさのおのみこと 言って素戔鳴尊を祀った神社です。この神社の直ぐ南には、佐太にある浄土宗来迎寺派の末寺の、しょうかくじ 正覚寺があります。現在は知恩院の末寺となっていますが、当寺には、**板碑十三仏**があります。これには、慶長15年(1610)の銘と、31名の戒名があり、ぎやくしゅ 逆修中と書かれ、これは「逆修衆中」のことで亡くなるとしょなのか 初七日から三十三回忌の法要がありますが、戦乱の世、誰も法要供養をしてくいとも知れないので生前に自分の仏事しておくわけです。

守口市の淀川沿いの旧大庭庄には、大変珍しい数字の一番村から十一番村の地名があります。隣の門真にも、一番村から四番村がありました。

なぜこのような地名がつけられたかは不明ですが、大庭の庄は、淀川の堤防に沿うように東から大庭一番村・二番村・五番村・四番村・六番村・三番村・七番村・八番村・九番村・十一番村・十番村がありました。

これは、大坂冬の陣の配置番号だとか、淀川の堤防の護岸の順など諸説がありますが、私は開発順の村名ではないかと思っています。

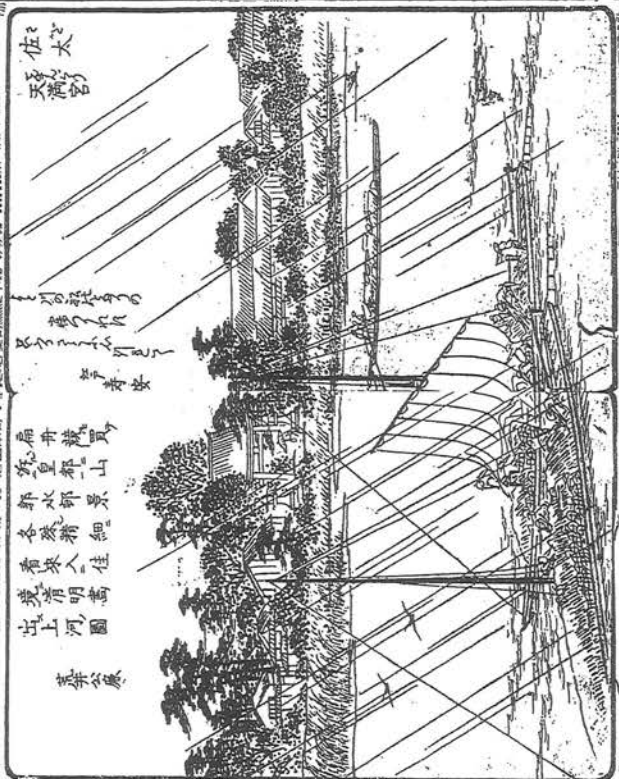
守口地域～枚方枚方地域の地図



出口の渡し跡

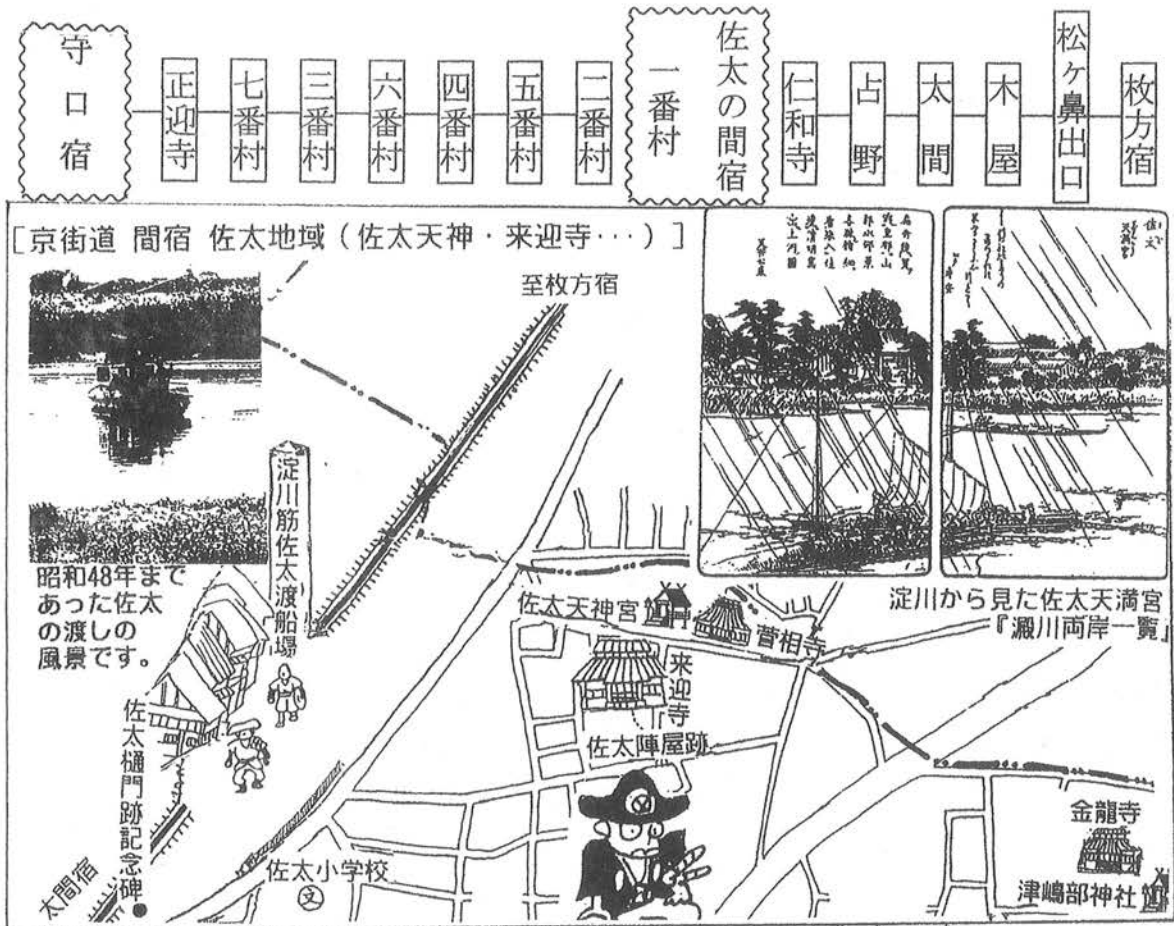


淡路水魚試験場



淀川両岸図絵

昭和54年第2回改測
平成17年更新
著作権所有兼発行者
国土地理院



正迎寺の所より、約2.8kmほど文禄堤に沿って各村を通り、佐太の間ノ宿のあった所に着きます。間ノ宿は、間ノ村ともいって幕府が認めた正規の旅人の休憩所です。

佐太の間ノ宿は、枚方宿と守口宿の間に設けられ、200年程前の享和元年に編纂された、『河内名所図会』の佐太天満宮のところに、「佐太天満宮 佐太にあり、此所京街道にして、茶店、貨食屋有り。鳥居より中門まで、馬場前壱町半許」とあります。

佐太間ノ宿の元治元年(1864)の村明細帳によると。

惣家数67軒 寺院2ヶ寺 道場1ヶ寺 神社1軒

惣人数284人 男132人 女149人 僧2人 神主1人

職業としては、医師、紺屋、桶屋、指物屋2人、左官屋2人、搗米屋豆腐屋、質屋2人、小売酒屋2人、煙草屋、水茶屋5人 菓子屋、くだ物屋7軒、湯屋1人、髪結職2軒、商売人が23人もいました。このように職業を見ても間ノ村は、他の村との相違がわかると思います。

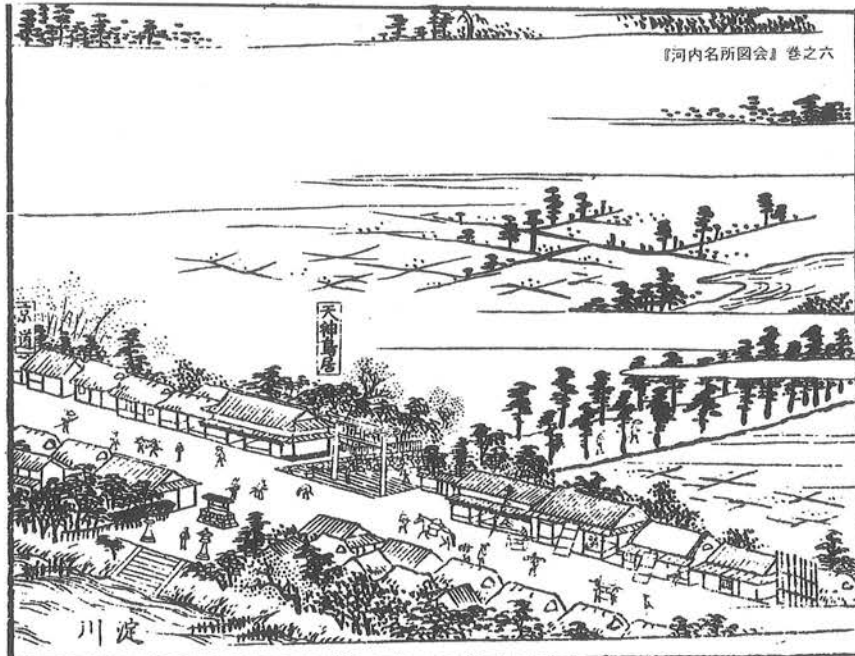
菅原道真と佐太天神 守口市佐太中町7丁目16-25

菅原道真は、学者の家に生まれ、早くから父に学問を習い、11歳ころには大人も驚くほどの漢詩をつくりました。

大学で文書を学び、26歳で朝廷の役人に、35歳で博士になりました。寛平3年(891)宇多天皇は、藤原時平、中平、忠平の3兄弟の勢力をおさえるために、道真を蔵人頭の役につけるなど、天皇の信頼をえて、とんとん拍子で右大臣まで出世しました。

時平は、嫉妬や裏切りをし、「道真が娘婿である皇弟齋世親王を天皇にしようとしている」と、醍醐天皇に時平が告げ口をして、天皇の怒りを受けて延喜元年(901)太宰権師に左遷され、その2年後亡くなりました。

佐太天神について当社の『略史』によると道真公死後、約50年後の天曆年間(947~57)里人がその徳をしたって道真公の残した「自作の木像」を御神体としてお祀りしたのが始まりです。



『河内名所図会』に描かれている神社前、淀川の位置を見て下さい。

中世の様子はあ “窓の灯の 佐太はまだ寝ぬ 時雨かな” 与謝野蕪村
まりわかりませんが、その後、河内国茨田郡大庭庄の惣社となりました。

天正8年(1580)小出播摩守秀政が社殿を再興し、2代目吉政が千花千句の連歌を奉納しています。

慶長期に永井信濃守尚政が天神絵巻を見て、天神をうやまうようになり、本殿、拝殿、神門、鳥居などを造営しました。

当社には、○天神縁起(北野天神縁起絵巻)。○菅原伝授手習鏡と白太夫(佐太の社)。○慶安三庚虎歳二月二十五日の銘の淀屋右衛門が寄進した石井筒があり、この外にも多くの宝物があります。

菅相寺 守口市佐太中町7丁目16-4

香林山王蔵院 そうとうしゅうこうしょうじ 曹洞宗興正寺の末寺

行基が建てたといわれる佐太天神宮の宮寺で江戸時代に永井尚政なおまさによって興正寺派の寺になります。観音堂には立派な十一面観音菩薩があり、永井家の菩提寺になっています。



幅75cm 直径45cmある石造露盤鎌倉期のものといわれ、観音堂の屋上についていたもので、堂の大きさや立派な堂が想像できます。

佐太陣屋と永井家 守口市佐太中町7丁目5-2

淀城主初代松平定綱(3万5千石)について、永井信濃野守尚政が入城し、同じころ弟直清が高槻城主となり、兄弟で淀川の兩岸の守りを固めました。しかし、その後、永井氏は岐阜の加納藩に移っていましたが、この地域に1万2千石を持っていました。

宝永元年(1704)に枚方の渚なぎさ ごてんやま(御殿山)より、この地に代官所を移しました。

ここは、大庭一番村、梶村、太間村、下馬伏村しもまぶし、ほぼ3千2百石で、代官所の敷地は約5,000坪ありました。

この佐太は京阪間の交通や軍事用の要地であるので、譜代大名の永井氏の代官所を移し、大坂の蔵屋敷ふだいもかねていました。

年貢米はもちろん、加納藩の経済をささえるために、特産物として、提灯ちょうちんや傘などを売ったり、タバコなども作っていたようです。

朝鮮通信使などがこの地域を通過するときは、この佐太代官所より指示が出ていました。

文化11年(1814)には牢屋敷ろうやしきもつくられました。代官所跡は今は守口市の老人福祉センターになっていますが、施設の裏庭には石垣の一部や刀を洗ったと言われる井戸も残っています。

※加納藩では、貞享年間じょうきょう(1684~87)にはすでに陣屋の一部は移されていたともあります。



朝鮮通信

朝鮮通信使は、江戸時代に12回来朝しました。修好回答兼刷還使しゅうこうかいとうけんさつかんしといって豊臣秀吉が朝鮮侵略しんりゃくで、日本に連れ帰った人を連れ戻す目的が3回で、4回目泰平之祝賀で、あとの8回は、朝鮮通信使といって、将軍が新しく襲職しゅうしよく(将軍につく)の祝いらいちやうの来朝で8ヶ月から1年近くの長滞在です。

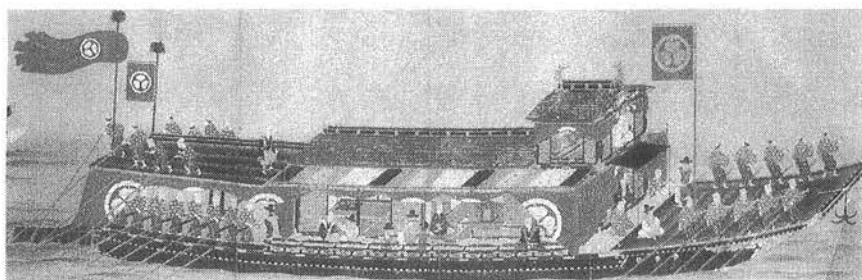
朝鮮通信使は、正使、副使、従事官、製述官せいじゅつかんを中心に300~500人が、朝鮮王の書面を持って、プサン港から対馬を経て瀬戸内海を通り、大坂に着くと多くは津村別院(北御堂)で、6~10日ほど滞在し船員(朝鮮通信使の3分の1ぐらい)は、大坂の川口で船中で滞在し、正使らは、西国大名が差し出した豪華な御座船に乗り換え淀川を上りました。淀川沿岸の人々は勿論、遠方からも、使節団が船で淀川を上下するのを見学にきました。しかし、大変なことは、三百石船を中心に100艘そうほどが通過するので、多くの人夫が通過する2~3日前に、淀川に入り川底さら浚えをしました。また、淀川には船を引っ張りあげる箇所が9箇所あり、44km中約30kmもあり人足も大変です。

荷物は陸路であり清掃は勿論、「朝鮮人通行道筋、乞食、非人びび払い候様先達而相触れ候。」びび弥々帰国の節入念、乞食、非人、無宿人の払い候様可相も心得也と通達している。守口や寝屋川を通過して、枚方宿で昼食です。

正使、福使など上官は下船せずに船上での昼食です。

朝鮮通信使の成功の裏には、雨森芳州の努力があります。

「雨森芳州ほうしゅうは互いに欺あざむかず争あわず」の精神で『交隣須知こうりんすち』の日朝会話集を發行



淀川をさかのぼる朝鮮通信使

人足の一例、延享5年(1748)5月1日、朝鮮通信使が江戸より帰りの寝屋川市の人足、神田村から綱引き59人(宰領6、荷物持6、綱引き47)それに庄屋年寄り2人が付き添い、暁の4時に村を出て下嶋村(枚方市)で綱を受け取り、五番村(守口市)まで風雨の中を下ったとあります。上りの場合は、この数倍の人足が必要でした。

琉球使節

琉球は、地理的からも中国に近く14世紀の末から明の臣属^{しんぞく}という形をとっていましたが、薩摩藩の島津氏が貿易の利益を得るため慶長14年(1609)武力で征服しましたが、琉球はその後も明から清に代わっても臣属の形を取り続けました。

それは、島津氏の中国貿易の利益のための方策で、奄美なども直轄にし、付属国として、政治を監督していました。幕府もこれを認めていました。

その後、琉球国王が代わるときに謝恩使^{しやおんし}、幕府の将軍が代わるときは慶賀使^{けいがし}を江戸におくりました。いずれも島津氏がひきいての来朝です。

宝永7年(1710)は謝恩と慶賀が重なり、島津氏とともに168人。寛延元年(1748)のときも記録が残っていますが、朝鮮通信使に比べて人足の負担は少なかったが、琉球は特に将軍への献上物が多く、帰国に対してもたくさんの土産物もあったので、この荷物などを運ぶ人夫が必要になり、寛延元年の来朝のとき、守口市史には細かく書いてありますが、このときの人夫は594人とあります。

寝屋川市での琉球 文化3年(1086)10月13日琉球の使者が淀川を上ったときは屋形船の綱引き人足として上庄(枚方市)・友呂岐庄・九ヶ庄(寝屋川市)・大庭庄(守口市)から各100人ずつ出ています。

寝屋川地域の九ヶ庄村の各村に割り当てられた人数は

池田中村	7人	池田川村	10人	池田下村	8人	大利村	10人	神田村	13人
高柳村	11人	対馬江村	8人	黒原村	6人	蔦原村	5人	黒原村	9人
仁和寺村	13人	仁和寺村庄屋の平助が九ヶ庄惣代として引率した。『寝屋川市史』							

天保3年(1832)10月の琉球人登船綱引人足割 九ヶ庄から出動

- 一、小屋形二艘(紺白段々筋川奉行)十人蔦原村
- 一、川御座一艘(松浦様舟印白ニッ引)
廿人川村、廿人大利村
- 一、雨戸船(右同断)一、賄船、一、雪隠船
十六人下村
- 一、川御座一艘(亀井様舟印四ッ目)
十八人点野村、廿二人高柳村
- 一、雨戸船(右同断)、一、賄船、一、雪隠船
十六人对馬江村
- 一、川御座一艘(小笠原様舟印三階菱)
廿六人仁和寺村、廿六人太間村
- 一、雨戸船、一、賄船、一、雪隠船
十四人中村、二人黒原村
- 一、小屋形二艘(舟印二はん三はん)十人黒原村
此外村役人 幸領(サリョウ)持、高張 『寝屋川市史』



▲ 琉球使節の行列(1832年)(沖縄県立博物館蔵)

琉球使節は朝鮮通信使より小規模で人足も少ないがそれでも農民にとっては大変です。淀川沿いの他の村々は同じような人足の負担があり、淀川があるため人足により多く駆り出されました。

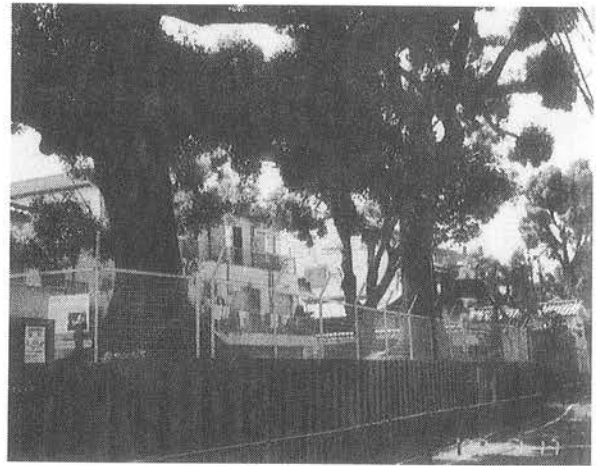
第4章 門真市の地域

門真は、縄文時代の遺跡や弥生中期の銅鐸^{どうたく}が出土しており、古くから栄えていたところですが、門真は京街道には面していませんが、守口同様底湿地であったので、当時の農具から考え、どちらかと言えば土地の柔らかい所が農耕に適していたので、大和朝廷の経済基盤が河内平野であったのでしょう。しかし、長雨になると水害が繰り返され、稲作はもちろん他の作物も採れません。

そこで仁徳天皇の時代に「茨田堤^{まんだのつつみ}」が築かれたといわれています。この工事は日本最初の大土木工事で、地元の茨田連^{むらじ}や特に土木工事の技術は渡来人の秦氏らの力があつたからこそ出来たのでしょう。現在でも、渡来人が住み着いた証^{あかし}が寝屋川市には秦や太秦^{うずまさ}の地名があります。

茨田堤の位置 門真市宮前町18番

茨田堤は、淀川や大和川の洪水を防ぐためのものと『日本書紀』にあります。茨田堤が今の古川に沿ってあると言うことは淀川は、今の流れるところと、南流する古川自身が淀川の本流であったのではないかと考えられます。



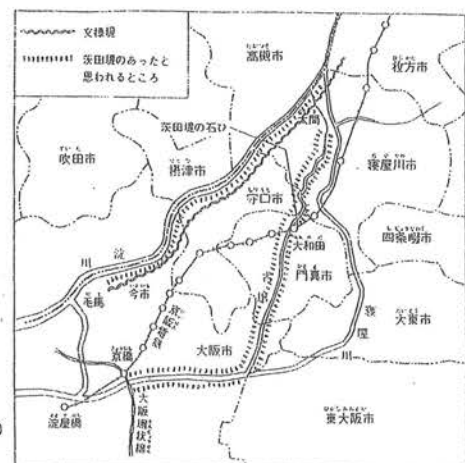
茨田堤の跡

また同時に、今の淀川と古川沿いに茨田堤があつたのではとも考えられています。

大和田とは、「わだ」とは、入り曲がった部分で、大和田とは港で、古淀川に津島江があり、現在も対馬江の地名があります。

昔は、大坂湾から淀川を上り、津島江から大和田港に着き、奈良時代には、行基が守口

の高瀬のところより「直道^{ちよくどう}」(守口街道・奈良街道)を建設し奈良の都へと通じていました。



茨田堤と文禄堤(四年生社会大坂書籍)

蓮(蓮根)・くわいの産地門真

この地域は昔から、「蓮」の産地で『河内名所風土記』には、蓮の質が良く、中將姫ちゅうじょうひめが「当麻曼陀羅たいままだら」を織った時にこの蓮糸を使ったとあります。

また、平安時代初期の歌人ありわらのなりひら在原業平が下記のように詠んでいます。

河内なる板戸の橋の遠ければ

行く末近き高安の里 ※板戸は月出町(門真市)の辺りでは?

門真の月出町辺りが蓮の名所で、都からも淀川を船で下り、貴族たちも蓮見学にきたようです。

室町時代には、浄土真宗れんによしょうにんの蓮如上人が家族とよくこの地へ蓮見学に訪れたとあります。

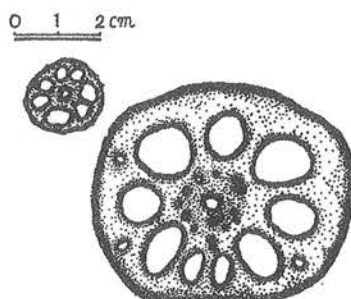
湿地帯で蓮の産地であるので、江戸時代にはこの地域独特の葎蓮年貢がありました。蓮田や沼地や池、水路や川などの蓮も年貢の対称であるので盗掘とうくつは村で厳しく罰せられました。

レンコンを大坂の青物市場へ出荷しましたが、大坂商人は、穴があくと言ってあまり歓迎されませんでした。

また、当時は蓮根は細長くて貧弱で馬鹿にされていましたが、奈良方面ではよく売れたそうです。

大正期に入り石川県から「加賀蓮」や岡山県からは「備中蓮」を取り寄せ栽培され蓮根は根茎こんけいの節間が太く短くずんぐり形で歓迎されるようになりました。

慈姑くわいは、昭和30年代にレンコンの腐敗病の発生で、代替え作物として栽培されたもので、縁起が良いことから正月料理に用いられていましたが、最盛期は、20ヘクタルの作付け面積が、現在では1ヘクタルほどです。



左図 原始ハスの蓮根の横断面
右図 加賀蓮の蓮根の横断面
『河内平野の生い立ち』
大阪市立自然史博物館

蓮根餅(はすねもち) 生のレンコンの穴に餅米をつめて、蒸したものです。これを輪切りにして食べます。さくさくしてレンコンの香りがして美味しいとのこと。戦前までは各農家では冠婚葬祭には必ず出され、客をもてなしました。また、花托と言ってじょうろの先のような形をしています。この中にたくさんの実があり、子どものおやつになりました。

門真と助郷

第3 将軍家光の時に参勤交代が制度化され、その上、朝鮮通信使や琉球使節など1度に多くの通行者がある時は、多くの人足が必要になり、宿場の常駐人足だけでは不足するので、守口宿でも助郷が制度化されました。

元禄元年(1688)が最初で、守口の八番・北十番・十番・下島の4ヵ村が課役(税法)として命じられました。しかし、助郷の苦しみを訴え2年で免除されました。

その後、元禄7年(1694)2月には、守口の世木・馬場・大枝・西橋波・土居が、門真では、門真四番(勤め852石)、門真三番(勤め758石余は)の7ヶ村が定助郷村になり明治維新まで勤めました。

宝暦13年(1763)には門真二番村の1村が加助郷村(勤高853石)になり、また、同村は、明和2年(1765)から明和8年まで、和歌山藩主通行の時は、守口宿での当村差出人足は計1,225人、うち898人分は賃銀をもって村方無高百姓および他村から雇用、賃銀は1人につき銀2匁(銀1匁は、165文)とあります。

天保6年(1835)から10年間岸和田村が勤高390石で代助郷村に指定されています。

嘉永元年(1848)から20年間、一番下村(勤高162石)・三ッ島村(勤高285石)・横地村(勤高168石)・打越村(勤高145石)・北島村(勤高175石)・上島頭村(勤高205石)・下馬伏村(勤高210石)の村が増助郷村になっています。通行が多いときには、常備や助郷村の人足だけでは当然不足します。そこで、人足がたくさん必要な時には、近隣の村々を「大助郷」として、100石につき2人、馬2疋ぐらゐの割りで駆り出されました。

例えば、紀州候の通行の当日は1,700人ほどが必要になり、こんな場合は、100石に2~6人ではなく、一つの村から数十人駆り出されました。

わずかな人夫賃は出ましたが、特に参勤交代時期は、農繁期で百姓にとっては大変な重荷になりました。

助郷自身が大変な仕事であるのに、遠く離れた村の者は、自宅から宿場までの行き帰りするだけでも大変でした。

右の資料は、慶応4年に、門真四番村の庄屋九兵衛が、守口宿の伝馬所取締役になり、また、在職中苗字も許され、馬場九兵衛と名乗っている。御請書

恐れ乍ら御請書

東海道 守口宿
庄屋
太兵衛

門真四番村
庄屋
九兵衛

一、この度守口宿お伝馬所取締役を仰せつかり
在職中苗字御免御扶持(禄米)方二人分づつくだしおかれ
候の段有り難き仕合わせ奉り存じさうろう
右に付きお書き下き二通たしかにたまわりこれ請け候
御請書を差し上げ奉り候 以上

慶応四辰年八月四日

右
馬場九兵衛
菊田太兵衛

御役所
駅通

願得寺 門真市御堂町8番23号

願得寺は、真宗大谷派の寺の別格寺院で古川御堂と呼ばれています。永禄年間(1558~70)浄土真宗の中興の僧蓮如上人の23子の実悟が石川県の清沢願得寺の名を移し、願得寺を創建しました。

江戸の初期に東西分派のとき、東本願寺に属し、五ヶ寺衆という大谷家一族の別格末寺となり、代々住職の室(妻)は多くは西園寺家から迎え、明治初期は有栖川から嫁入りしています。また当寺は、同宗内の声明の家柄で河内流念仏として知られています。

願得寺の本堂は、寛永5年(1665)に再建されたものですが、近世真宗寺院の形を伝えるもので、守口市の難宗寺や盛泉寺、護念寺などでも見ることができます。

願得寺の山門は四脚門で、元禄6年(1693)に再建され、江戸の中期以降も改修されていますが、貴重な機構の山門です。



願得寺の山門 四脚門(府指定有形文化財)

その他、元禄年間の梵鐘や手水鉢、石灯籠などがあり、多くの物が大阪府の有形文化財や国の登録有形文化財に指定されています。

当寺には樹齢500年と思われる雄雌の二株の「そてつ」があります。

大塩平八郎と門真

隣の守口に大塩と師弟関係にあった白井孝右衛門が、門真三番村の茨田軍士(60石の豊農)や高橋九右衛門(23石6斗)を紹介し、孝右衛門の隠居所いんきょしょに門真や守口など近郊の農民たちに大塩は講義をしていました。

この頃の天保4年(1833)には、天保の大飢饉だいききんがおこり、門真でも大飢饉きょうしゅつで、茨田軍士が2石5斗、高橋九右衛門が1石5斗の救米を村に供出しています。その後も飢饉が続き天保7年になると大坂でも、餓死者がししゃが多い日には170人も出たり、大坂城の堀に身を投げる者が続出しました。

大坂町奉行の与力大塩平八郎は、町奉行に貧民救済ひんみんきゆうさいを願ったが拒否され、非常の時であるので、大坂城の蔵米を貧民に配るように申し出たがこれも拒否され、特権商人たちは米を買い占め知らぬ顔。それどころか、江戸への廻米かいまいを増やしていきました。大塩平八郎は、そこで民衆を動員して豊豪ほうごうをおそい、大坂城を占領する計画をたてました。

平八郎は、天保8年(1837)2月19日の挙兵直前きよへいに自分の持っている蔵書ぞうしょ1,241冊を3日間で売り、668両のお金をつくり、そのお金で金1朱ずつの施行札と檄文を近郊の農民約1万人の家に配りました。門真では、門真三番村や北島村に投げ込まれました。

いよいよ天保8年(1837)2月19日の挙兵計画には、茨田郡士も高橋九右衛門も計画に加盟し血判しています。

挙兵は、計画がもれて、予定より早く、五ツ刻(午前8時)になったので多くのものは駆けつけることはできなかつたのです。

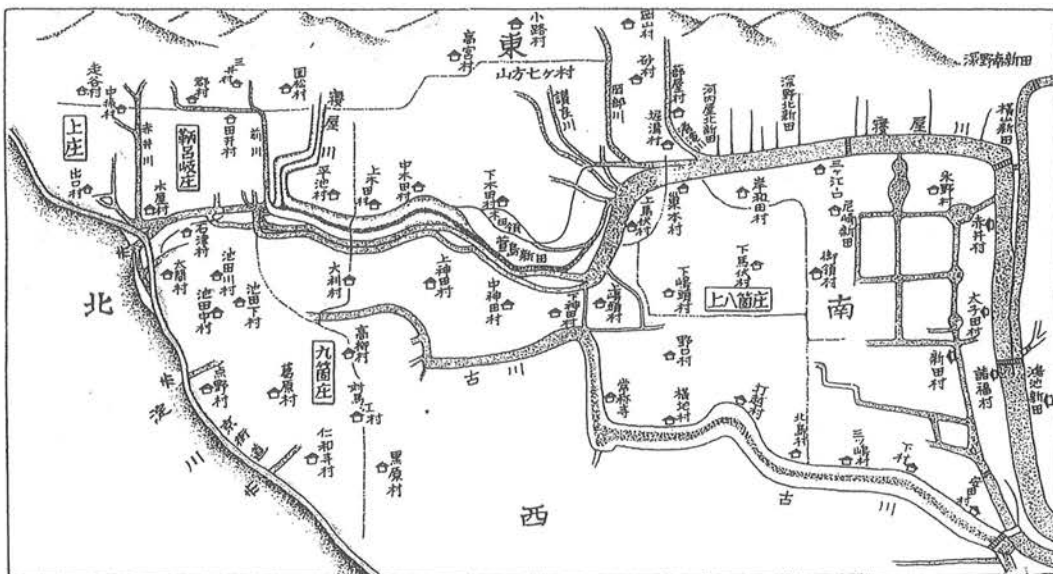
乱後は、瀬田齋之助一家が、茨田郡士いんせきと姻戚関係であったので茨田家に逃げ込んできました。郡士は、枚方にあずけたり、和州に逃がしてやりました。郡士自身は、平野郷にあった大坂城代土井利位の陣屋としつらに自首し牢死ろうし。茨田家は欠所けつしょとなり、その後、再興されましたが、最後の当主茨田ひろさんが亡くなられたあと、堂山町黄梅寺どうやま おうばいの隣りにあった屋敷は、今は茨田公園になっています。

高橋九右衛門も自首しています。この三番村の2人の外にも7人が押込手鎖おしごめてぐさりに、北島村では、20人が過料かりょう(軽い刑)の叱りしかとなりました。

古川と寝屋川の水運

門真地方は水には苦しめられたが、その反面、古川や寝屋川の水運には、電車が開通するまでは大変大切な交通路として使用されていました。

大坂に用事のあるときは、古川橋近くから出ていた、早船の通船があり、今でも三ッ島大橋から古川の下流を見ると、数百メートル先に大きな楠木が見えますが、これを「稗島ひえじまのくす」といって府指定天然記念物になっている楠木です。ここが古川の乗船場のあった所で、待合所や船宿などがありました。その他にも、肥取りこえとり船や年貢米など運ぶ多くの船が行き来していました。夜遅く門真を出て夜明けに大坂に着き、それぞれの用事をすませ、満ち潮を利用し昼頃には帰ってきました。



寝屋川及び古川古図(文政七年九月)上堀二三六蔵氏 寝屋川市誌

また、寝屋川も、寝屋川沿いの村人たちは、堀溝(寝屋川市)と八軒家せきを行き来する船があり、堀溝では毎日夕方から2隻の早船が出て、約10時間をかけ夜明けに八軒家に着き。帰りは夕方に八軒家を出て早朝に寝屋川沿いの村に着きました。この頃は、川沿いの人たちにとっては生活には欠かす事のできない水運だったのです。

この古川や寝屋川の水運も百年ほど前の明治43年には、京阪電車が開通し、人を運ぶ通船は次第にさびれていきましたが、肥取りこえとり船や荷物を運ぶ船は戦後もかなり長く利用されていました。

※大阪でただ一人、第二次世界大戦後すぐ内閣総理大臣を務めたのが門真一番村してはらきじゅうろうの幣原喜重郎です。男爵岩崎久弥の妹雅子と明治36年1月20日に結婚。

第5章 寝屋川市の地域 佐太間ノ宿を出ると、寝屋川市の仁和寺です。

仁和寺村

淀川左岸沿いの平坦な地で、京街道沿いに上の町・下の町の集落があり、上の町には、仁和寺浜があり、下の町には一里塚がありました。

また、寝屋川市には、古くから対岸への摂津国への渡しが仁和寺・点野・太間・木屋の4ヶ村にありましたが、枚方大橋や鳥飼大橋の架橋により、徐々に廃止されました。

仁和寺の渡しは、『淀川兩岸一覽』に

「仁和寺の渡口 一番村の上にあり河州仁和寺村より攝州島下郡鳥飼の下村にわたる船わたしなり、水上およそ凡三百三十間(約600m)と云」とあります。この渡しの南方の道は、鳥飼道とも、小坂ともいい仁和寺の渡しに通じていました。

慶長19年(1614)大坂冬の陣の前に、方広寺の釣り鐘の「国家安康」
「君臣豊楽」に因縁をつけ、家康は方広寺大仏開眼供養の停止を命じたので、驚いた大坂方は、豊臣秀頼の後見人で奉行であった片桐且元は急かたぎりかつもとぎ駿府すんぶへ向かわせ釈明しました。

しかし、逆に条件を出され、裏切り者となり居城きよじょうの摂津茨木城へ帰城する時にこの仁和寺の渡しを渡っています。

文禄堤を切断

文禄堤の築堤にあたり、その目的の一つに、軍事のとき、堤防を切つて平野を水で満たし湖のようにして大坂城を守ることでした。

大坂冬の陣について、『難波戦記』は

慶長19年(1614)10月23日京都二条城に着いた家康は、藤党高虎と片桐且元を引見し、25日兩人に大坂城攻撃の先駆さきがけを命じた。大坂方では、淀川左岸の堤防を切つて、大坂城の周辺を水浸みずひたしにして攻撃の手をゆるめさせようとした。徳川方は神崎川に水を落として、河内平野を水害から守り、天満川・船場川を干して大坂城に攻めいる策戦であった。大坂方は根来の正徳寺を武将として、仁和寺や佐太の堤防を切ろうとしたが、枚方に進駐した徳川方の本多忠政・松平忠明の濃州勢は淀川堤を下ってきて、ここで城兵と出会い戦い幕が切っておとされた。

上の町の仁和寺浜からは、年貢米などを積み出し大坂難波^{なんば}へ。江戸へ納めるときは、この浜から大坂へ、また、京都二條城へ納めるときは、淀川を上り伏見鳥羽で荷下ろしをしました。

助郷は、天保6年(1835)から弘化2年(1845)守口宿代助郷で、勤高300石であったが、だんだん勤高も減り、慶応4年(1868)正月には、勤高251石で枚方宿の助郷となっています。

仁和寺の辺りは延宝2年(1674)6月27日の朝6時ごろに、洪水のため堤防が決壊し氏神の八幡宮が流され、この時できたのが、上の淵です。

享和2年(1802)6月27日から雨が降りつづき、ついに7月1日午前10時に仁和寺の下堤^{けっかい}が決壊、午後6時には、点野の堤防も決壊してしまっただ。周囲の村々は水一面になりました。京街道も切断されてしまい、旅人たちも遠回りをしいたげられて不便であったと思います。

仁和寺の由来 光孝天皇^{ちよくがん}の勅願により、仁和2年(886)に京都^{おむろ}の御室に仁和寺を起工し、宇多天皇の仁和4年に完成しました。天皇を譲ったあと、延喜3年(904)ここに御所^{えんぎ}を建て、御室御所と呼ばれました。この仁和寺を建てるにあたり、寝屋川から門真や守口、大坂の一部を含む広範囲にわたり「御造所」にあてられたのが、河内国茨田郡の仁和寺荘となったのです。その後、領主はかわりましたが、現在もこの寝屋川に仁和寺の地名が残っているのです。なお、菅原道真は宇多天皇との関係が深く、佐太の辺りの地が与えられ、家臣の白大夫がこの地を守っていました。道真の死後約50年後に「佐太天神」が仁和寺村近くの佐太に建てられました。寝屋川市の京街道近くには、仁和寺の氏神社や葛原に菅原神社、池田中町にも菅原神社があります。

点野

約1kmほどで^{しめの}点野です。京街道は、もちろん淀川国役堤上を通過していました。天保6年(1835)から10ヶ年間守口宿助郷で勤高200石です。

その後も勤高は減っていますが守口宿の助郷村として勤めました。

村の東境には幅2間点野^{つしまえ}囲い堤防があり、南の対馬江堤防に通じたので、古くは「メ野」とあり、また、宇多天皇が川向いの鳥飼院^{たかがり}に来て鷹狩をしたので、この地を狩り場として誰も入れなかった禁制の地であったところから点野となったともあります。

江戸の昔、街道筋の点野は80軒余りの家が建ち並び、その中にはお鍋茶屋や仙吉茶屋などもあり栄えていました。鍋の茶屋は、元禄13年(1700)4月8日近松門左衛門の「淀鯉出世滝徳(たきのぼり)」という浄瑠璃が初めて文学座で上演されました。その内容は、樽の銘酒を守口や、佐太の煮売りを見る事も廊でならね誰が点野に、紅葉たけたけ鍋が茶屋、枚方樟葉是も又、云々…『寝屋川市史』多くの旅人も佐太と枚方宿の間にある茶店で、淀川や山々を見ながら休憩したと思われま。

たいま
太間

仁徳天皇11年、茨田の堤を築いたが、^{こや}木屋と^{こわくび}点野の間と、もう1カ所を築いても直ぐ崩れ、難工事でした。「^{むさし}武蔵の人^{まんだのむらじ}強頸と河内の茨田連^{ころものこ}衫子の二人を川神に供えて祀れば必ずふさがると時の天皇が夢をみて、強頸は悲しみながらも身を投げ人柱となり完成しました。

もう一人の衫子は川に瓢箪を投げいれ、川神を信じず犠牲にならず助かりました。

そこで^{こわくびのたえま}強頸断間といった事から、後に「たえま」が「たいま」となり太間の地名となりました。

太間には^{たえまのころものこ}絶間衫子連社があったが、天満宮が建立され、のちに一緒になり一社となっています。太間は堤防に沿って家が立ち並び、淀川には太間浜がありました。 ※茨田堤の碑があります。

明治4年(1871)の村明細帳には、高456石余りの反別56町2反余り、うち田方32町余り、畑方2町9反余り、家数55、うち持高41・無高13・寺1。人数254 牛1。

農間余業の商職人は8人で、^{かじ}鍛冶職・古道具屋・質屋・荷物乗物働材^{そま}木屋杣(山から木を切り出す)^{こびき}木挽・荷預り下屎舟乗働・醤油・荷船乗物働。また、宿屋・^{こうや}紺屋(染め物屋)・酒屋・豆腐・呉服・^{こうじや}麴屋・鍛冶屋などの商人もあり、太間浜は仁和寺浜と同様、いろいろな物資の出入りがあり繁栄していました。 ※村中には昔の面影がある街道があります。

年貢米などは、村ごとに郷(蔵)倉があり、中には淀川沿いに郷倉を持っている村もありました。蔵は、米などを一時的に保存するばかりでなく、不作の年に供えて蓄えておく蔵でもあります。この近郊の村は、年貢米を郷蔵から運び出し京や大坂への納入の時は、この太間浜から淀川を利用して運び、また村によっては堀溝から寝屋川を利用しました。米は大坂の蔵屋敷で検査を受け不合格になると村役人は大変でした。



『河内名所図会』衫子絶間址(茨田の堤の決口を築く)



絶間衫子連社と統合された太間天満宮

亡くなったおじいさんはいつもいっていました。

家の前が京街道だったんだ。それで殿さまがお通りになる日は、朝早くから道掃除をしてお通りの時間になると、みんな戸を閉めて家の前に並んで土下座をしたものだ。ちよつとも行列をおがむことができず足ばかり見ていたと、よく話が一度はじまると、次から次へとひろがって尽きることがありません。それに話しぶりがとても面白いので、何回聞いても飽きることがありません。

「紀州のお殿さまがお通りになった時のことだったよ。家の前で突然行列がとまったんだ。そして美しいかごの戸が開いてお姫さまが何かおっしゃったと思うと、おつきの武士がやってきて、あの椿の花一枝欲しいと、お姫さまがおっしゃっているので貰うぞ。とって美しい花を一枝折ると、お礼だといってお菓子をくださったよ。それはとてもおいしいお菓子だった。」おじいさんは、そのおいしかった味を思いだすかのように顔をほころばせるのでした。

甘味に乏しい幕末のこととて、そのお菓子はのどをつつばしたことでしょう。と諦めておられます。その椿は今も毎年花を咲かせて幹のまわり1メートル22cmにもなっているそうです。



太間あたりの京街道の面影を残す通り

太間村についても 『まんだ』第十二号 P54～55 引用

「太間村は昔の京街道を一部とどめています。そして珍らしく京街道(即ち文禄の堤)の内側(川の中)に造られた村です。

家のうしろは淀川の本流で、街道は家の前にあったのです。家の敷地は私有地になっていますので、多分それぞれ独力で街道の高さまで川の中に土地を築いて屋敷にしたのでしょう。」

文禄堤の上にある京街道の様子や大名行列の姿、そこに立ち並ぶ家の敷地などについて明確にわかりますので、引用させていただきました。

こや 木屋

木屋・太間の間から南流していた淀川の分流の分岐点で、上流より運ばれてきた木材を管理する木屋(きや)があって、これがなまって木屋(こや)の地名が生まれたといわれています。

文禄3年(1594)豊臣秀吉が淀川に文禄堤を築堤して、せき止められてしまい、これまで分流から取り入れていた木屋・太間・点野・仁和寺などでは新しく出来た堤防に樋門(水の取り口)を造り生活用水や灌漑用水に用いました。しかし、淀川から直接水が取れなくなった古川は、洪水は少なくなりましたが、いつしか現在のような川になってしまいました。

木屋村は、慶安2年(1649)永井尚政の検地では、高689石余、反別52町余、うち新田10町6反余、畑4町2反余、屋敷9反余、荒地3町3反余です。新田の多いのは、淀川の旧川床があったからでしょう。

元禄3年(1694)の助郷の勤高は689石で、枚方宿の大助郷28ヶ村の一つになりました。

ともろぎ 産土神は鞆呂岐神社

大阪府淡水魚試験場東南350mの所にあります。平安時代の嵯峨天皇時くろうどのかみの蔵人頭藤原冬嗣が河内平野を視察したとき、平地は広く水の便がよければもっと耕地が増えるであろうとたえま言うことで、木屋と絶間口に樋を



水利の守護神鞆呂岐神社

設け淀川の水を取り入れました。清和天皇の貞観3年(861)に鞆呂岐荘木屋村に一社を建てた、六柱をお祀りしたとあります。享保8年(1723)の記録では、祭神は、天照皇大神・豊受大神・住吉大神・神功皇后・天兒屋根大神・蛭子大神(恵比須)の六柱です。水利の守護神として信仰されています。※境内の20基の石灯籠は、用水樋の水源にある神として20ヶ村が寄進したもの。

※赤穂城主浅野長矩家中の四十七人の一人、家来村松喜兵秀直の4代の孫村

松喜兵源高次の奉納した鳥居があります。

枚方旅宿があいまい化し、付近百姓の風紀が乱れてきたので、所管の高槻役所から、厳しい注意があった、下記はその「達し」と請書である。

河州茨田郡枚方宿の旅籠屋どもに召し抱えている飯盛女は近年華美になり、隠売女風で茶屋遊び所同様のありさま、撰河付近の御領・私領の百姓の風儀が悪くなったので、右のことのないようお差し留めのこと当三月五日御奉行所へ村々総代の者から訴え出た。

そこで、枚方御支配所へ御達しの上、御役所で宿役人や重だつた旅籠屋と飯売女一同に御ただしになったが、飯盛女は昔からおり、なお享保三年(1718)四月道御中奉行から、飯盛女ははたご屋一軒につき、式人(2人)宛の外は堅くさし留めるよう、東海道宿方一同へ御触れ渡されたので、飯売女どもに仰せ渡されたとおり髪かざり、金銀べつ甲の類は用いないよう旅人の泊りのない手すきの時は、糸飾り・布織などし、琴・三味線など取り扱わず旅人や近東の者が酒を飲みにきて酔ってみだらがましいことをいうならば、平生宿役人やたばこ屋の主人どもから堅く断るよう申し付けておいたとおり、いっさい取り扱っておらない、すべて前から触れられたように華美であるというようなことはないと同申し立て、枚方宿で右のようなけしからぬ世渡りをしているものはないが、全体の事は村々百姓共慎み一村限り村役人申し合いを嚴重にし、多人数の事だから行き届かず心得違いの者もあり、枚方宿の者どもが申し立てたことと相異して、その実遊所同様に世渡りするものがあつたら名ざしして別に願ひ出るように、その時の仕儀で沙汰があるから同月廿五日御奉行所で右村々総代の者へお達しがあつた、当御預り所の村々総代の者から断り申した。この上は村役人共や親々はもちろんゆだんなく嚴重におきてをして、今後は心得違ひのないよう、くわしく申し聞かせること。

右の趣を御預り所へ願ひ立てなかつた村方も承知して、以後不心得のないよう、またご苦勞を掛けぬよう、村役人どもから末々まで申し付けておくように。

申閏四月

高槻御役所

前書の通り仰せ渡されましたので小前百姓の末々まで一同承知いたしました。それでお受けの印形を差し上げます。寛政十二年(1800)申五月寝屋川の平池村百姓水飲まで小前 蓮印 年寄 庄屋 の名があります。

慶応4年(1868)1月京都の鳥羽・伏見で起きた新政府軍と旧幕府軍との戦いです。王政復古の大号令のあと、小御所会議で、山内豊信らは公議政体派の反対を押し切って、徳川慶喜よしのぶに対し官位辞退と領地返上を要求しました。これに対し、幕兵と会津・桑名の藩士はこれを不満とし戦いになりました。しかし、旧幕府はやぶれ、倒幕派は旧幕府軍打倒を開始し、戊辰戦争となりました。

戊辰戦争の寝屋川の農民の対応が『寝屋川市史』に記載されていたので引用させていただきました。

1月5日も戦いはつづき、戦場は慶喜軍が押されて南にうつったその夕刻には八幡・橋本に後退した。

6日の戦いは早暁から開始され、渡河作戦に出た薩摩軍は木津川を渡って強襲してきた。橋本の急造陣地で桑名藩が南下の藩長軍を迎えて激突、多数の死傷者が出た。

一方対岸の山崎で慶喜軍の津藩が、砲4門をもって南下の薩長軍にそなえていたが、前日より朝廷からの説論でその去就ははっきりしなかったが、薩長軍の苦戦をみて、ついに慶喜軍に発砲、橋本・樟葉の方を襲った。

これで慶喜軍は総くづれとなり、淀川堤を大坂に敗走した。京都に上る時には意気ようようと東高野街道・河内街道・西国街道(淀川堤)と進んだが、5日間でみじめな姿で、負傷者をかかえて帰ろうとは、つゆ思わなかったであろう。

淀川沿岸の各村では、婦女子を縁故の山手へ送り、村役人が武装して警戒に当たった。

家はすべて戸締まりして、敗兵の寄るのをおそれてたが、なかには負傷者を連れて、食糧を乞うもの、一時の休息を頼むものもあったが、さわらぬ神にたたりなしで、たいてい拒絶されては、重い足どりで大坂へ逃げるよりしょうがない。

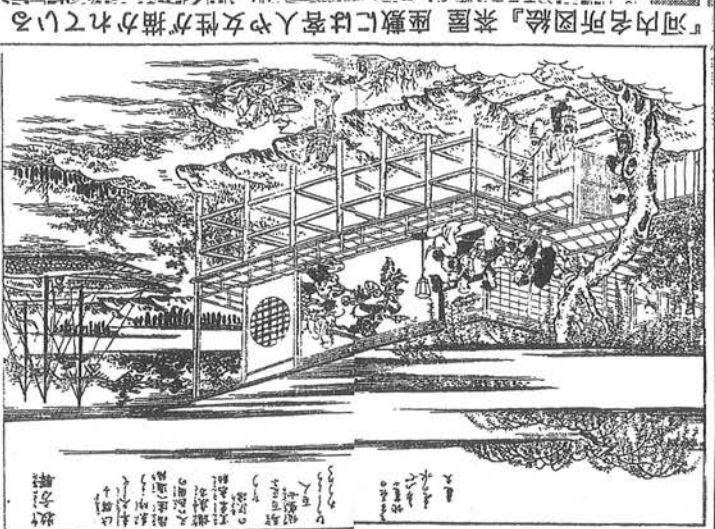
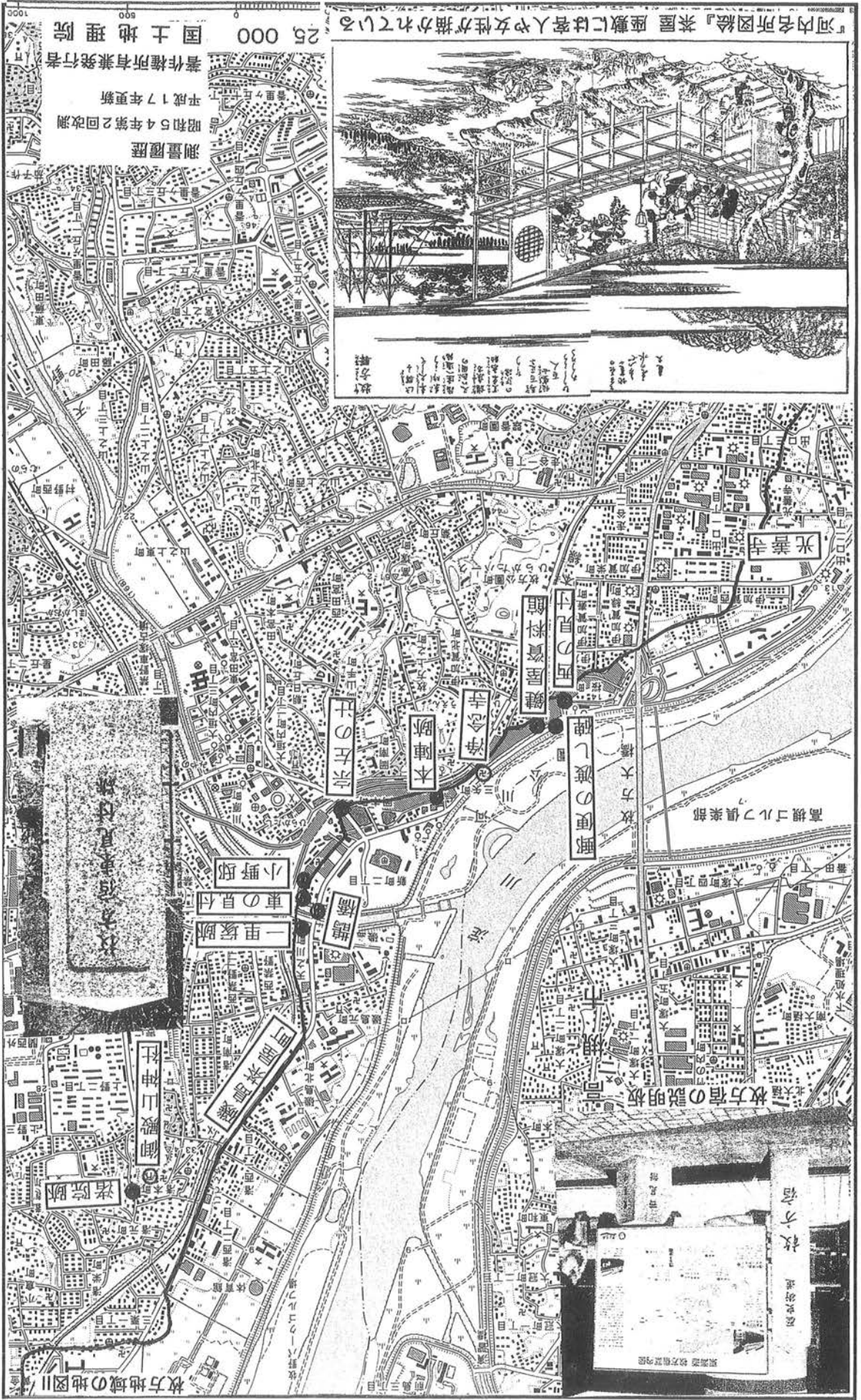
木屋では婦女子を、淀川の島に送り、当時島に渡る橋があったのをこわしてしまい、過書船の三島方では船はみな島かげに沈めて隠したという。

また、点野では島から堤の兵に発砲したが、気力を失ったか反撃もせず逃げて行くのであった。

慶喜軍は完全な敗北を喫して、徳川慶喜は江戸へのがれるため、6日夜大坂城を出た。天保山に着いたが、幕艦の開陽丸がわからず、その夜はアメリカ艦に泊めてもらい、翌朝(7日)開陽丸に乗り換え江戸に走った。

この戦いには村々から人夫を徴発されたが、三井村の人は土佐藩に従った。

また、このころに大坂より陸路、京都に上る途中、中山大納言中能は大閤西島方に立ち寄り休憩した。同家で早速ドジョウ汁を出したところ、よろこんで食い、そこから柱本(現高槻市)に渡った。



25,000 国土地理院
 著作権所有業発行
 平成17年更新
 昭和54年第2回改測
 測量履歴

河内各所図絵 茶屋 座敷には客人や女性が描かれている

光善寺
 浄心寺
 本陣跡
 一の左衛門
 小野邸
 一里塚跡
 馬廻茶屋跡
 三上三郎邸
 法院跡

高槻シルク倶楽部
 野の便の渡し
 舞臺の跡
 西方の館

宿 道 橋

地方地域の地図II

第6章 枚方市の地域

木屋から500～600mほどで、出口の松ヶ鼻に着きます。この辺りは少し昔の面影も残っています。

松ヶ鼻は対岸の摂津島上郡三嶋江村との間に渡しがあり、「出口の渡し」とか「三嶋江の渡し」と呼ばれ、人馬の休憩所の立場があつて賑わっていました。

しかし、この辺りは淀川沿いでは底湿地が拡がり、悪水の排除がここに集中していました。

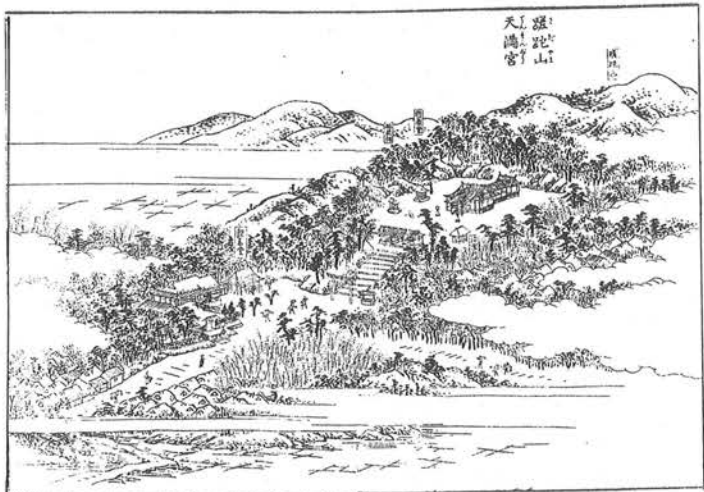
また、淀川^{かわどこ}の川床の上昇にともない、享保9年(1724)に『**淀川兩岸一覽**』三嶋江口の渡し(渡しの長さ二百十間約380m)は南ノ口樋が造られ周辺の三矢、泥町、伊加賀、走谷中振各村の悪水が八ヶ庄井路に放出されることになりました。

この辺りから街道筋の面影を残す出口の集落に入ります。



蹉蛇神社(天満宮) 枚方市南中振1-7-18

菅原道真^{すがわらのみちざね}は、藤原時平^{いん}の陰謀^{ぼう}により筑紫^{ちくし}の太宰府^{だざいふ}に配流^{はいりゅう}が決まり、娘^{かり}の菟屋姫^{やひめ}は父と同行を願い出たが認められず、どうしても一度会って別れをお惜^おしみたいと思い、一人であとを追ってきたが、すでに出発^ましたあとで間に合わず、足^{あし}ずり(蹉蛇^{さだ})して嘆^{なげ}いたところからこの名がついたようです。菟屋姫がこの丘に立って父道真を見たが、父の姿は見えなかった。その丘の上にてきたのが蹉蛇天満宮です。



『河内名所図会』蹉蛇山天満宮

れんによ

蓮如上人御腰掛石 枚方市出口

中振や出口の産土神である「蹉跎神社」の御旅所を少し進むと石柱の柵のある約20坪ほどの小さな公園のような所があります。その中に台石の上に丸い石が腰掛石です。その直ぐそばには、「蓮如上人御遺跡」の碑があります。

蓮如上人が村人たちにここで、分りやすく教えを講話した所です。

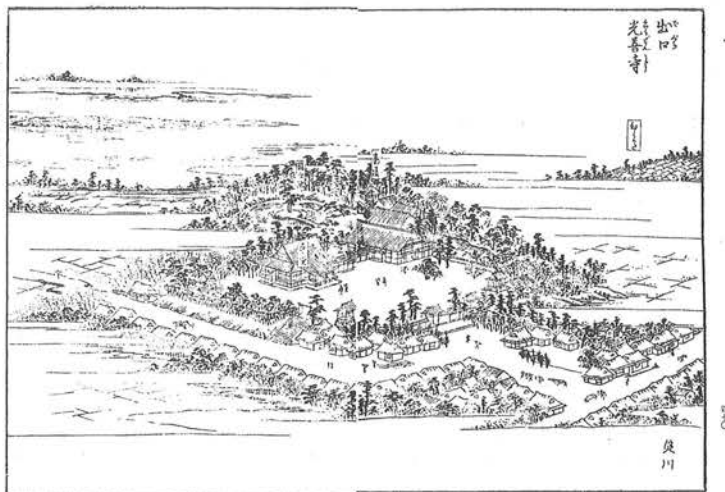


蓮如上人の腰掛け

光善寺 真宗大谷派 枚方市出口2丁目

文明6年(1474)加賀の国では一向宗を信仰する無碍光宗という土民の集団が武士たちと争う「一向一揆」が occurred.

蓮如上人は翌年の8月北陸の布教の中心地、越前国吉崎御坊を去って、海路で若狭の小浜に上陸し、丹波



『河内名所図会』出口光善寺

路から摂津の唐崎をへて、河内国茨田郡中振郷山本から出口の里へ、この辺りは湿地帯で葭など生え茂っていた所で、わずか9軒の集落でした。

蓮如上人は、61歳で、早速近郊の人々に法話を始めると遠方からも聞きに来るようになりました。

さいかち(自莢)伝説 熱心に法話を聞きにくる美しい女性がいました。ある日「わたしは、淀川州崎 梓原に棲む龍女で、上人さまのありがたいお話を聞き、私のような罪深いものですが悟ることができました。お陰さまで天に昇ることができます。どうか私が棲んでいた淵にお堂をお建て下さい」と云って淵にあった「サイカチ」の木から天に、昇っていきました。※自莢は幹廻り2.2m、高さ11mの樹齢600~700年。大阪府の天然記念物

寺(坊)をこの地の門徒の岩見入道光善が中心になって創建し、寺名もここからとり、光善寺としました。蓮如上人は、この寺を拠点にし、摂津河内・和泉地方に教化して回りました。



光善寺

北河内で、現門真には願得寺や守口でも御坊(現難宗寺)を懸(掛)所にして光善寺に3年間過ごし布教活動をしました。

その後、嫡男(長男)の順如に光善寺を譲り、本願寺を京都山科に建設するために移っていきました。光善寺には、親鸞絵像に文明七年九月五日の日付で、「河内国茨田郡中振郷出口村中之番新造弊坊之常住物也」と蓮如が書いた裏書きがあるところから、最初から蓮如はこの地に坊を建てることを考えていたのではないかと云われています。

その他、明応3年(1494)11月28日の蓮如絵像があります。

文亀元年(1501)6月10日には阿弥陀如来絵像と順如絵像が、本願寺九世実如より頂いた証の裏書きがあります。

当寺には、境内には、蓮如上人は、日頃より虫歯が痛んで苦しんでいたがここで抜けました。その時に詠んだうたが、

「夏はきのふけふ秋きりの一葉おらて身にしみてしる南無阿弥陀仏」

の自筆の歌碑があります。

石川丈山の庭園があり、龍女の姿をあらわした池で中之島には龍を祀る鱗(龍が天に昇る時に落とされた)塔がありますが、古木が繁って見えにくいです。

龍女が昇天したと伝える高さ12mのサイカチの木があります。

蓮如は1415年に生まれ、さびれていた浄土真宗を立て直すため、15歳で念仏を勉強し親鸞の教えをお文(手紙)による布教をし、念仏が広がっていきました。

43歳で本願寺八世となり信者が増え、比叡山の延暦寺の嫌がらせを受け、近江の堅田に逃げ、吉崎御坊へ、枚方に光善寺を建て、摂河泉に念仏を広め、山科に念願の本願寺を建立しました。浄土真宗を立て直した中興の僧蓮如は、85歳でこの世を去りました。

光善寺の前の道を北に進むと伊加賀小学校、もうこの辺りは、開発が進み街道の面影は見られません。

さらに進み枚方西高校右折して幹線用水路に沿って約1kmほど歩き国道170号線(枚方大橋の手前)下を抜けると「^{みなもかいろう}水面回廊」です。

ここは以前は淀川から水を取り入れる樋^ひがあった所です。現在は不要になり、三十石船の小型の模型を浮かべている水面の公園です。さらに少し進むと枚方宿の西の見付けです。そこを左折して30mほどの坂道をのぼると府道京都守口線で、右側に「郵便の渡しの碑」があります。

郵便の渡し碑

江戸時代は手紙と言え、飛脚です。しかし、明治に入り郵便制度も変わり、郵便人力車が走りました。明治4年(1871)には、伏見と大阪間に郵便船が就航。小舟で2人乗りの夜舟で6時間かかりました。



国道170号線に建っている「郵便屋渡し跡」碑

郵便馬車は、明治5年に京都馬車会社と大阪馬車会社が設立され、馬車は文祿堤を走ったが雨などで通行止めになることもあり、経済的に適さず、わずか数ヶ月で廃止。明治14年4月1日東京・大阪を郵便馬車が7日間で走りました。

鉄道便は、大阪・京都間の鉄道は、大阪～向日町間の開通は明治9年(1876)7月京都までは同年9月です。京都～大阪～神戸間の鉄道の開業式は明治10年2月のことです。鉄道は淀川右岸を通ったので左岸(北河内)はここ枚方に集められた郵便物はから対岸の高槻停車場まで、^{ていそう}遞送夫さんが淀川を船で渡り運びまし

守口付近では、飛脚がよく盗賊に襲われ、飛脚の話に「賊ノ出ル処ハ、大抵守口付近ノ堤防ニ限ッタヨウデ、ココヲ無事ニ通レバモウ決シテ妨害ハナカッタ」とあります。明治6年12月28日大藏卿大隈重信が、盗難防止のために、六連発の短銃を携帯させた。枚方郵便局の取り扱い短銃番号73藩74番でした。日本の警察官の短銃携帯は、大正12年(1923)です。

た。※郵便渡し跡碑に「郵便屋さん 走りんか もうかれこれ十二時や」と童歌が刻まれている。

枚方宿

京街道(東海道)に設置された56番目の宿駅です。岡・岡新町・三矢・^{みつや}泥町^{どろまち}の4ヶ村で構成されていますが、宿の間屋場、本陣、高札場と言った中心的な施設は三矢村に集中しており、4ヶ村のうち町並も家数や人数も、人足や馬役も他村よりかなり多く当時からの地域の中心的な村だったと思われます。4ヶ村の合計宿高は643石余りです。

成立時期は、諸説があり明確ではありませんが、隣りの守口宿が^{げんな}元和2年(1616)ころに成立と言われているので、枚方宿も同時期ではないかと考えられています。

宿場の西の見付けから東の見付けまで、797間(約1.5km)あります。

人馬役として、人足100人・馬100匹が義務づけられていました。

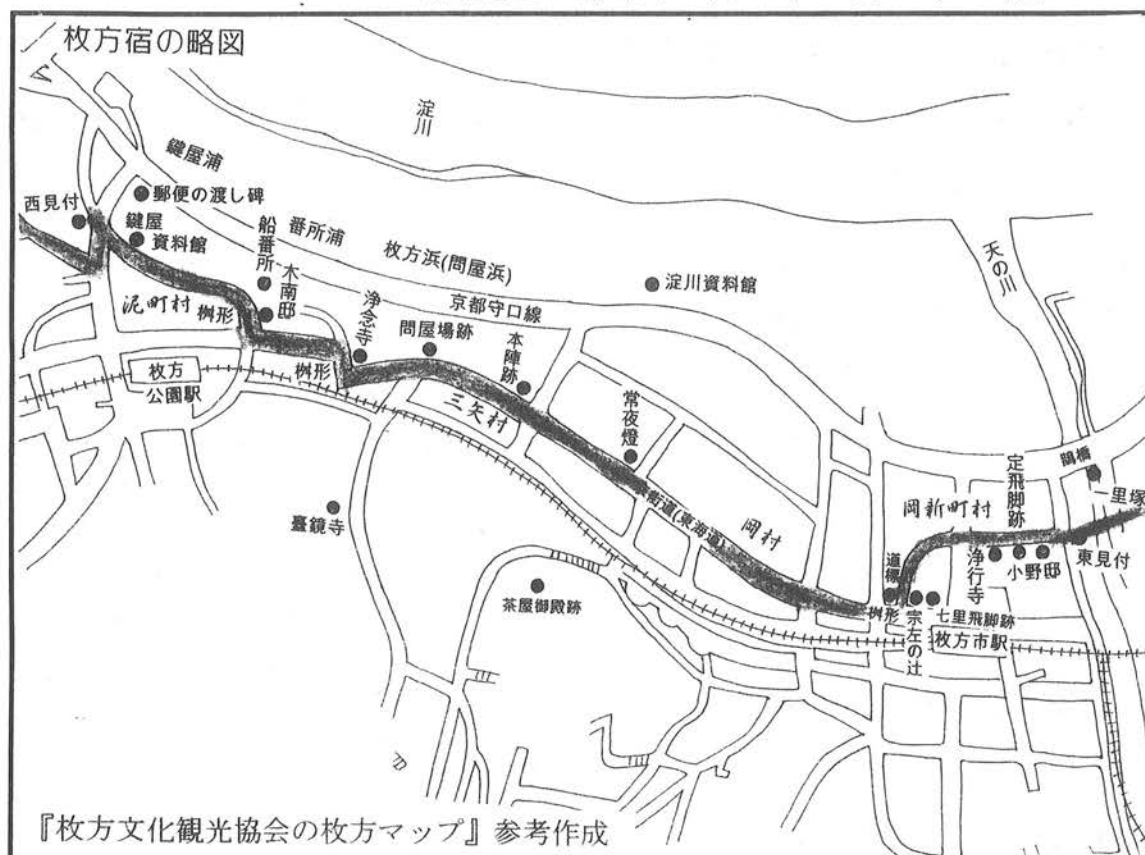
天明年間(1781~89)の家数341軒 人口1,591人 飯盛女47人
本陣1軒 旅籠32軒 商人・職人7軒。茶屋7軒が含まれています。

寛政12年(1800)頃、旅籠屋42軒、飯盛女が127人。

享和3年(1803)頃、旅籠屋55軒、※時代とともに旅籠屋が増加

天保14年(1843)頃、家数378軒、人数1,549人(男630・女919)

旅籠屋69軒(大31軒 中21軒 小17軒)



枚方宿の内容

問屋場

枚方宿は、4ヶ村で成り立っている宿場であり、問屋場役人も各村の庄屋など村の有力者が交代で勤めました。

泥町村	木南喜右衛門	※枚方村	田中吉右衛門
三矢村	池尻善兵衛	奥田八郎衛	中瀬佐兵衛 畠中仁兵衛
岡村	中島太右衛門	今西治郎兵衛	今西作兵衛
岡新町村	中島九右衛門	中島半兵衛	小野平右衛門

宿役人は、問屋2人、年寄2人、人馬方4人、馬差下役2人、人足下人2人が勤めていました。

枚方宿は、隣りの守口宿が人足宿であるので、人足は守口宿まで荷物を継げばいいが、馬の場合は、枚方宿から大坂まで運びました。

枚方宿の負担が重く、寛永10年(1633)から人馬100人・100匹の扶持米(米で与えられる俸禄)として毎年21石余り支給されました。

寛文5年(1665)からは伝馬100匹の地子免許として46石余りとなり、元禄6年(1693)からは継飛脚の地子免許として宿内の屋敷高33石余りが認められ、宿高から免除されています。

助郷

助郷は、万治3年(1660)にはじめて設けられました。

茨田郡の枚方・伊加賀・走谷・中振・出口の5ヶ村、勤高2,622万石。元禄7年には改定され、茨田郡9ヶ村、交野郡18ヶ村、讃良郡1村の合計28ヶ村。勤高14,923石の大助郷となりました。

紀州侯が京阪地方に権威を示すために、寛保元年(1741)に参勤交代を和歌山から大坂へ出て東海道を通ることになり、枚方宿は2日目の宿泊地になりました。また、朝鮮通信使や琉球使節団は淀川を上下しますが、土産物や荷物などは陸路を運び、多くの人足が必要になり、助郷役も大きな負担でした。 ※寛政12年(1800)には、飯盛女が127人と、寝屋川から付近の百姓の風紀が乱れると高槻御役所に訴えたのはこの頃です。

枚方宿内

西の見付

大阪方面から枚方宿への入口の左側に西の見付跡の碑があり、枚方宿の案内板があります。

かぎや

鍵屋 枚方市堤町10 - 27

堤鍵屋と云えば、三十石船の船歌に

ここはどこじゃと船頭衆に問えば

ここは枚方鍵屋浦

鍵屋浦には碇がいらぬ 三味線や太鼓で船とめる

このように唄われた船宿としてよく知られています。

鍵屋の営業について『ひらり枚方2006 Vol. 11』に、鍵屋が史料に登場するのが、安永2年(1773)に鍵屋が無許可で、くらわんか舟を営業していたので、訴えられた文書が「高槻柱本浜家文書」にあり、営業権の鑑札がないまま営業をしていました。

鍵屋当主太兵衛が、「今まで60年間も営業してきたのであるから茶舟の営業権を認めてほしい」と願い出ましたが、結局認められず、船屋としての営業に切り替え、京街道の客や淀川筋の船客あいての料理旅籠屋として栄えていきました。

戦後も料亭鍵屋として営業されてきました。

鳥羽・伏見の戦いのとき、京街道は兵馬でうずまり慶応4年(1868)正月6日「夜四時半時ヨリ八ッ時迄枚方焼候」とあり枚方宿は大きな損失を受けたと思われます。



鍵屋跡に出来た「鍵屋資料館」

鍵屋、18世紀の建物と推定、厨子二階で、虫籠窓や鍵の紋の入った卯建が上がり、竈屋が街道沿いにあり旅人たちも入りやすい船宿でした。

平成9年に市の文化財に指定。平成13年7月鍵屋資料館となりました。

にし あ つけ
西見附

江戸時代を通じて多くの旅人が枚方宿を過行しましたが、時には外国人の旅行者が、枚方宿のことを記録に残しています。ケンペル、申龍輪、ツンベルク、シーボルト、アーネスト・サトウなどです。大塚・京都間のほぼ半ばにある枚方宿では、休憩・食事をとることが多かったようです。

彼らのうち、枚方宿の様子を詳しく記しているのは、ケンペルとシーボルトです。兩人ともドイツ人で、オランダ東インド会社の船艦長の江戸参府に医師として随行しました。シーボルトは「枚方の環境は非常に美しく、淀川の流域は私に損傷のマインの谷を思い出させることが多い」と想起しています。

枚方宿西の見付けの説明板

淀川舟運・枚方浜(問屋浜)跡

鍵屋資料館より、途中、旅人が安心して宿泊できる浪速講の指定宿「京新」跡を見ながら 200mほど歩き、右折せずに木南邸堀に沿って進むと、過書船・伏見船番所船跡碑の所に着きます。勿論、道路や淀川改修などで元の位置とはことなりますが淀川を上下する船の監視や船の許可書を発行したり、税などを取り立てたりした所です。



淀川舟運・枚方浜跡説明文板

木南喜衛門家 屋号田葉粉屋

江戸時代初期から枚方宿の間屋役人を勤める庄屋でもあり、くらわんか船の茶船鑑札をもち営業していました。また、農業を営み、幕末には金融業も営んでいました。当家は楠木一族の子孫とも言われています。



明治期の建物と推定され、出格子、虫籠窓があり、宿場時代の面影を残す建物で、土蔵も4棟もあり広大な町屋です。

木南邸を過ぎた所を左折し

ます。このように直角に曲がっている道路を「^{ますがた}櫛形」とか「^{かねんて}曲尺手」と言って、^{てき}敵やくせ者の侵入を防ぐものです。

くらわんか舟(煮売茶舟)

淀川を行き来する三十石船に近づき乗客に、飲食物を売る10石前後の小舟で、「くらわんか牛蒡汁 あん餅 巻きずしどうじゃ 酒くらわんか 銭がないのでようくらわんか」と叫びながら商いをしたため、俗に「くらわんか舟」と言いました。

この船の営業特権を得たのは、元和元年(1615)、大坂夏の陣で徳川家康が岡山(四天王寺東方)に本陣を置いた時、柱本茶船に命じて、高槻城の米2万石を兵量米として運ばせ、その功に対する褒美であったという。『摂津市史』、『高槻市史』。

寛永年間(1624~44)柱本茶船20隻のうち1隻を船株とともに枚方に移したところ枚方くらわんか舟が地形的な優位性もあり繁栄しました。柱本が元祖です。

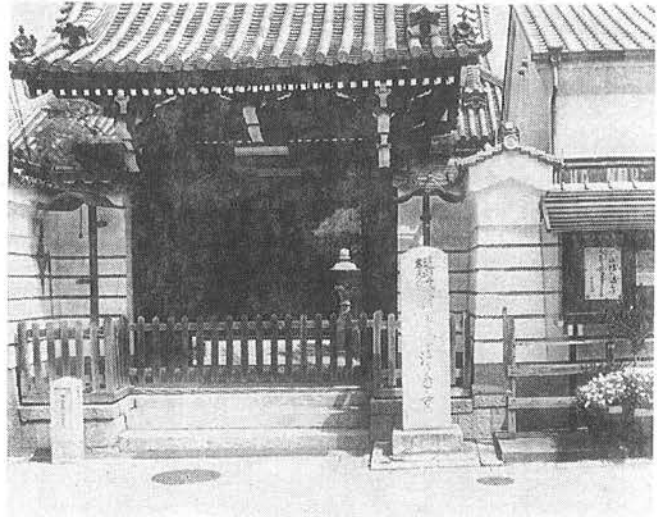
※水難救助に協力をするという条件で運上金(税)は免除されていました。

浄念寺 山号松風山浄念寺 浄土真宗本願寺派 枚方市三矢町

200mほど進むと正面に浄念寺があり、ここも柵形街道です。

浄念寺は、本願寺第八世蓮如上人が河内地方巡化に同行した岩見入道浄念が明応4年(1495)に創建と伝えられています。

淀川筋にあったものを、火災により、宝暦13年(1763)現在地に移りました。



浄土真宗浄念寺

当寺は御門跡御坊ごもんぜきごぼうと称され、「西本願寺御坊」とも言われていました。

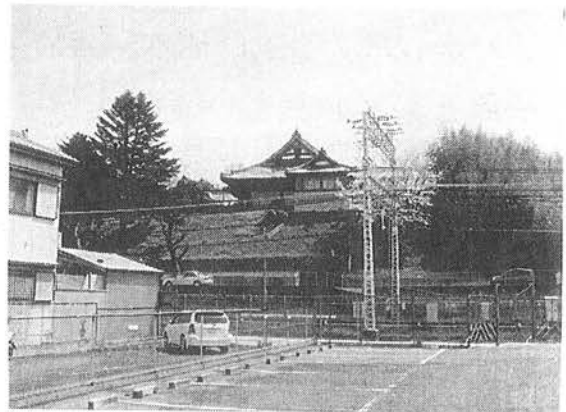
明治13年(1880)4月から21年7月まで、堺県茨田・交野・讚良ささら三郡連合の枚方郡役所が置かれていました。当寺を含む枚方宿近くには、10ヶ寺があり、「宿方差支さしつかえの節は、休泊請候儀もこれ有」とあり、本陣や脇本陣などが詰まっている折りは宿泊所となりました。

少し進むと宿場の中心であった問屋場のあった所です。また、浜にも近く郷倉などもありました。

台鏡寺 枚方市枚方元町

この辺りより右(南)側の小高い台地だいきょうじに浄土宗見仏山台鏡寺があります。

文禄元年(1592)賢蓮社願生がんにじょうの開基で境内には地藏堂があり、丈6尺の地藏菩薩が安置されており、足元と衣すその裾が少し傷いたんでいるのは時々修行に出



枚方宿から見た台鏡寺

掛けたからと伝えられ、「夜歩き地藏」と呼ばれ、縁結び地藏で飯盛女もよくお参りにきました。万年寺山には、明治時代に、この地に移った式内社意鏡美神社おかみがあり、今は、梅林でよく知られています。

御殿山に茶屋御殿があったと言う伝説があり、豊臣秀吉が枚方城主本多正康の娘乙御前を住ませた所と伝えられているが、遺構いこうは見られません。秀吉が伏見と大坂の間である所から休憩所とし建てたようです。

本陣跡

現在は、遺構はなく三矢公園になっており、「枚方宿本陣跡」の碑が建っています。

代々江尻善兵衛家(屋号江戸屋)で、享保3年(1718)ころより明治3年(1870)まで継がれました。天明5年(1785)役人に提出された書類には敷地477坪、建坪215坪間口約20間(約36m)、奥行約24間(約43m)ありました。

明治21年(1870)7月に、浄念寺にあった茨田・交野・讃良郡役所が旧本陣に移りました。

少し歩くと、妙見講の常夜灯があります。



本陣跡碑

宗左の辻の道標

本陣跡から500～600mほど歩き「サティビオルネ」と公園を過ぎ、磐船街道へ通じる道とを超した右(西)角に文政9年(1826)の「宗左の辻」の道標があります。ここは街道の分岐点で、京と大坂への道標と磐船街道に通じ、現交野市にある「磐船神社」から付けられたもので、河内と大和の境の現四条畷市の田原で清滝街道に合流して大坂や京への街道として利用されました。宗左の辻とは、製油業を営んでいた角野宗左の屋敷があったのでこの名が付けられました。



宗左の辻の道標

「おくりましょうか、おくられましょうか、せめて宗左の辻までも」

枚方と朝鮮通信使

朝鮮通信使は、江戸時代の1607～1811年の間に12回日本にやって来ました。1回から3回までは、秀吉の時に連れ帰った被虜人(ひりょじん)を朝鮮国へ連れ戻すためです。

5回以後は、將軍襲職の祝賀で朝鮮国王の国書を伝達することで、日本と朝鮮の善隣友好関係の使節です。プサン港から瀬戸内海を通り、大坂より西国大名が用意した「川御座船」に乗り周囲には、100～150隻余りの船団が淀川を上り、昼食は枚方で小休憩です。枚方には古くから朝鮮と関わる「王仁博士」「百濟寺」などもあり、通信使も親しみを感じていたと思います。枚方には「南明堂」という私塾があり、朝鮮の進んだ朝鮮文化を筆談で接したり、漢文など教わったり、遠くからも見物に来て賑わいました。

紀州七里飛脚

枚方宿には、宗左そうぎの辻よりのぶの所くにがにありました。「お七里役所」といって、徳川家康の第10子、頼宣が駿府より紀州和歌山へ国替えになったとき、幕府の出来事を少しでも早く知るために、七里ごとに置いた紀州藩独自の通信機関の役所です。

岡新町村

元文2年(1737)岡新町村の明細帳(中島文書)に。

家数は高持61軒、無駄水呑・借屋(家)29軒、寺1ヶ寺。人数385人。

商売屋37軒(旅籠屋・水茶屋13軒、古手屋8軒、味噌・塩・醤油・麴こうじ小売、こやし屋3軒、薬種屋3軒、請酒屋2軒、材木屋・畳屋・晒屋さらしや・鍋釜請売うけうり・染物屋たび・足袋屋各1軒)。他に酒造業や絞油業しぼりゆもあり、他の村とは違い宿場の村として賑わっていたことが伺えます。

浄土真宗本願寺派三宝山浄行寺じょうこうじの東側に、一般庶民や商人らが使用した定町飛脚がありました。文政期には「酢屋」が勤めたとあります。

小野邸

東の見付の手前に江戸中期より村年寄と宿場役人を兼ねた、小野平右衛門家があります。

現在の建物は幕末ころと言われている。間口が広く、表門口には揚見世あげと下げ戸さが現存しています。



宿場時代の建物 小野家

醤油業も兼ねておられた町屋です。

枚方と大塩平八太郎 枚方地方でも、天保7年(1836)天気の不純で秋になっても稲が実らず平年の30～40パーセントほどの不作でした。ある日、尊延寺村の豪農治兵衛に守口の白井孝右衛門が大塩平八郎に面談をさせる手紙を書いたようです。「弟才次郎(20歳)はすでに平八郎の行動に加担している」と伝え、治兵衛にも参加させようとした。「これに勝利すれば、以来年貢・諸役を免除し、借金は棄捐すると述べ農民の参加を促した。また尊延村から農民数十人を参加させようとした。

しかし、大塩平八郎の乱計画が密告され計画よりかなり早くなり、多くの者は直接の参加はできず、乱は大塩平八郎の敗北に終わり、首謀者たちはあちこちへ逃亡しましたが、才次郎は、塩詰の死骸を引き廻し、その後、磔はりつけけい刑にされました。尊延村では、刑の重軽は別として111人罰せられました。

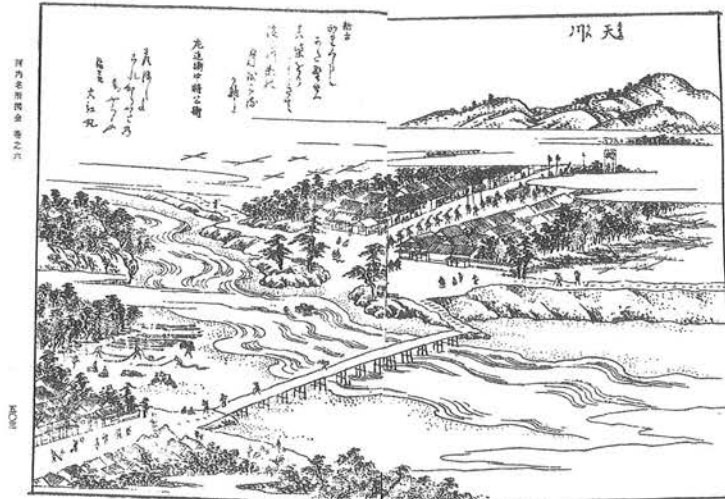
東見付から楠葉へ

東見付のそばに天の川があります。この川は昔は、清流で、花崗岩からなる川砂がきらきら光り、天の川のように見えたところから平安時代の頃より歌にも詠まれ、天の川流域には多くの七夕伝説があります。

江戸の昔は、橋がなく紀州侯の通行のときに臨時に橋が架けられました。

右の絵は『河内名所図絵』の天の川です。

大名行列が枚方宿を出て天の川を通過しているところで、問屋役人たちが見送りに出ています。



大名行列や見送りの問屋役人の服装や瓦屋や麦藁葺きの民家が見られます。

現在の ^{かささぎばし} 鵜橋の名は明治になって命名されたものです。橋を渡った所に「一里塚跡」があります。

磯島茶屋町

鵜橋を渡り直ぐ右折して、次の通りを左折した所が、磯島茶屋町です。

文禄堤築堤のあと京街道が整備され、街道の往来する旅人相手の茶店のある茶屋町となりました。

また、正徳年間(1711~16)高槻城下への行商に始まると言われます。当村の青物類は枚方宿へ売り声をだしながら朝売りに出していました。

^{ごてんやま} 御殿山神社

京阪電車「御殿山駅」の東側に小高い丘があります。これが ^{なぎさ} 渚岡で御殿山ともいっていました。ここに領主 ^{なおつね} 永井尚庸・本庄宗資らによって陣屋が設置されました。

産土神は渚院観音寺境内にあった ^{にしあくら} 西栗倉神社を明治3年(1870)に御殿山に移転して、御殿山神社と改称されました。

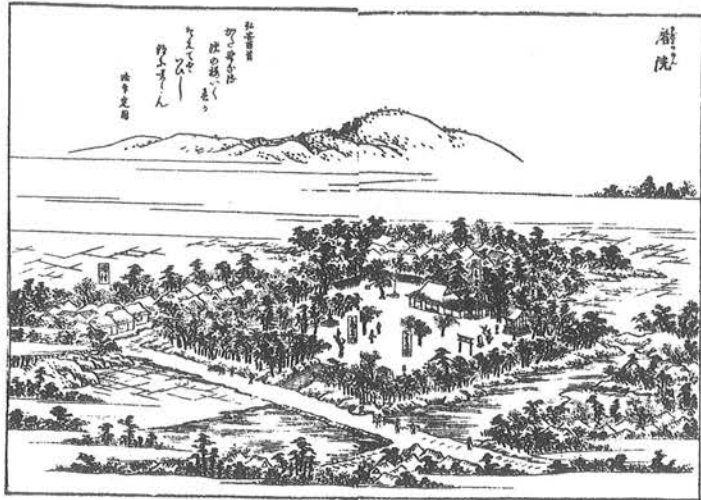
なごさいんあと
渚院跡 不遇の貴公子 枚方渚元町9番23号

これたか
惟喬親王(844~97)は、文徳天皇の第一皇子で母は静子で、第一皇子であったので、当然次期皇太子と
子と
思っていました。

しかし、^{かしょう}嘉祥3年(850)に藤原良房の娘皇后明子が第四皇子^{これひと}惟仁を生み、生後8ヵ月で皇太子になり、9歳で即位(清和天皇)し、外祖父の良房が^{せつしやう}摂政となりました。

立太子争いに敗れ、山崎の水無瀬やここ交野の渚に別荘を営み、同じように勢力争いに敗れた在^{ありはら}原業平とともに交遊を深め、この渚の地域や交野ヶ原、淀川、天の川などは湿地帯が多く、鳥や獣が多く貴族たちの絶好の狩場があり、惟喬親王も業平らもよく狩をしました。

在^{ありはら}原業平が渚院で桜を見て自分たちに置き換え詠んでいます。



『河内名所図絵』渚院

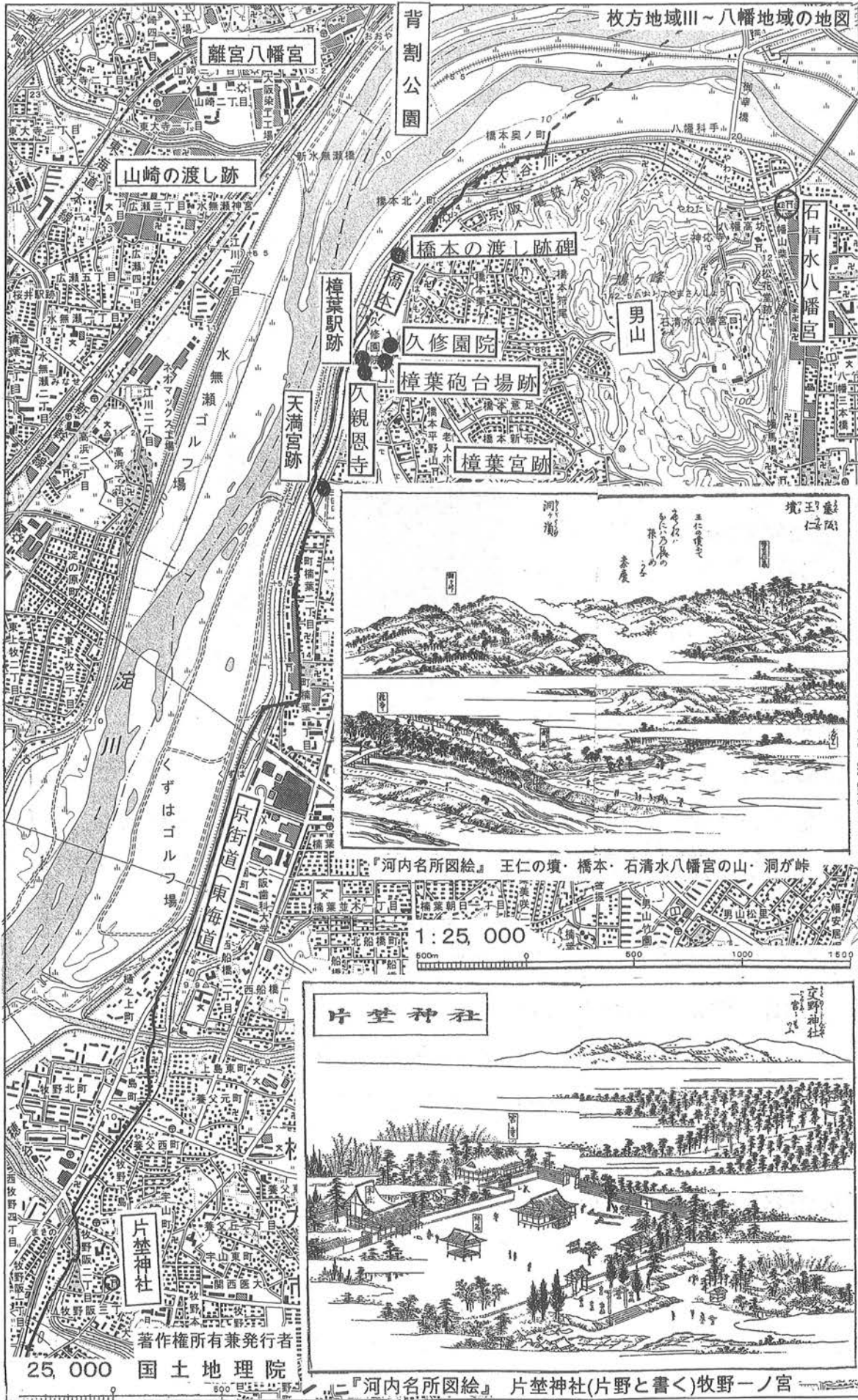


『河内名所図絵』惟喬親王の狩の場面 獲物を追出す農民たち

世の中に たえて桜のなかりせば

春の心は のどけからまし

渚院跡に真言宗観音寺が建てられたが、明治3年(1870)に廃寺となり現在は鐘^{しょうろう}楼が残っています。枚方の鋳物師田中家が寛政8年(1796)に鋳造されたもので、第二次世界大戦の強制的な金属供出からも^{のが}逃れ、枚方市では田中家の鋳造された唯一つの梵鐘^{ぼんしやう}です。この地には、惟喬親王が狩の途中に出会ったといわれる三本足の雉^{きじ}に由来する御狩野神社や、親王が飼っていた鷹^{たか}の塚といわれる鷹塚山や、狩に夢中になり日没をおしんで、日を置かせたまえと祈ったといわれる日置神社があります。



背割公園

離宮八幡宮

山崎の渡し跡

橋本の渡し跡碑

久修園院

樟葉砲台場跡

樟葉宮跡

樟葉駅跡

天満宮跡

男山

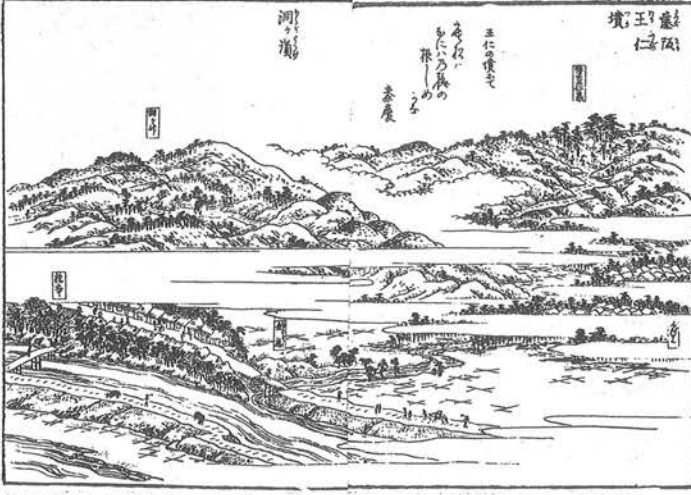
石清水八幡宮

京街道(東海道)

片笠神社

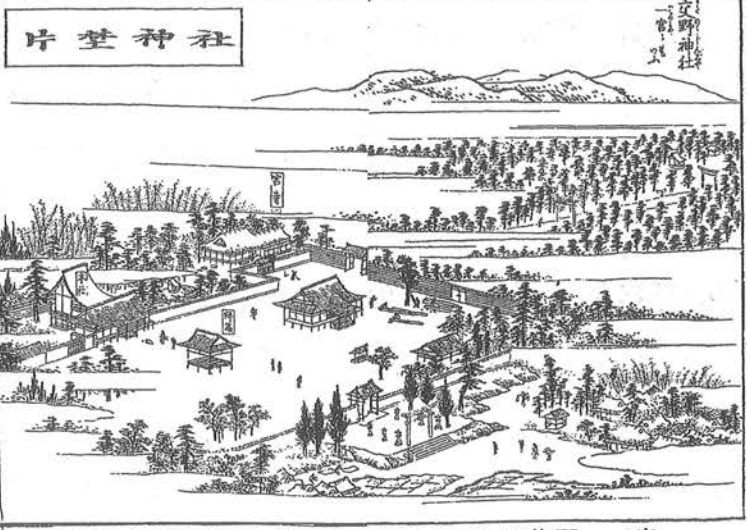
著作権所有兼発行者

25,000 国土地理院



『河内名所図絵』 王仁の墳・橋本・石清水八幡宮の山・洞ガ峠

1:25,000



片笠神社

『河内名所図絵』 片笠神社(片野と書く)牧野一ノ宮

かたの
片埜神社 枚方市牧阪2丁目21-15

御殿山から京阪電車沿(京都守口線)いの京街道に出て、600mほど進み三栗南の信号を左に入り、街道の面影を残す集落を通り抜けると三栗信号に出ます。再び京阪電車を渡り、電車の西側に沿って歩くと「牧野駅」東方に片埜神社があります。御殿山から約1.8kmほどのところです。

交埜神社は交野ヶ原の牧阪に垂仁天皇時代に野見宿禰のみのすくね たけはやが建速須佐之男命すさのおのみことを祀ったのが当社の始まりで式内社です。

その外、櫛稲田姫命くしいなだひめ・八島志奴美命しまじぬみの・菅原道真を祀る神社で、天正11年(1583)豊臣秀吉が修復して「片野一ノ宮」として、大坂城鬼門もん ちんごしやの鎮護社に定め鬼門除けの神として、現在も祈願者が多い所です。神社は度々兵火にあい現在の建物は、慶長7年(1602)に修築されたものです。また、神社後方の牧野公園に東北の英雄「阿弓流為」の墓があります。再び京街道に戻り、牧野駅の北側の踏切を渡り、600mほど進むと船橋川があります。昔は水量も多く流れも速く、橋を架けても流されてしまうので、川に船を並べ、その上に板をのせて渡ったところからこの名がついたと言われています。



片埜神社の重要文化財の本殿(大坂城鬼門鎮護)

全国各地にこの地名はたくさんあります。1,400mほど進むと楠葉です。大字や小学校名、京阪電車の駅名には樟葉の字が残っています。

樟葉には、継体天皇樟葉宮跡や交野神社、鏡伝池などがあります。

しくおんじ
久親恩寺 枚方市楠葉中芝1丁目

曹洞宗の寺で山号大孝山久親恩寺と言います。江戸時代の『樟葉道心かもんのすけ因話記録』に、延元元年(1336)樟葉に住んでいた篠崎掃部助まさのりが、楠木正儀に従っていましたが、わけなく人を殺す無意味な戦いにはついていけな

くなり、身をひいて出家し諸国を修行の旅に出ました。あとに残った妻と子どもは、樟葉の西寺にある薬師如来に無事を祈りながら暮らしていました。

やがて母が病に倒れ、娘は母が治りますようにと祈りましたが、母もとうとう亡くなり、その後、娘は母の冥福めいふくを祈り続けて一生を終えました。

この哀れなことを人々が語りつぎ、寺の名を久親恩寺といい、薬師如来を親乞おやごいの薬師と呼んで今も伝えられています。



久親恩寺

樟葉砲台場跡ほうだい 枚方市楠葉中柴1丁目

久親恩寺から住宅の中を2分ばかり歩くと砲台場跡に着きます。久親恩寺の裏側です。

幕末に幕府は京都・大阪の交通を厳しく警戒し、樟葉と対岸の山崎に関所を設け淀川に船番所を置いて取り締まった。ここは伏見鳥羽の戦いの最終決戦の場。外国船襲来から京都を守る事が名目で、倒幕軍に対して大砲を向けました。

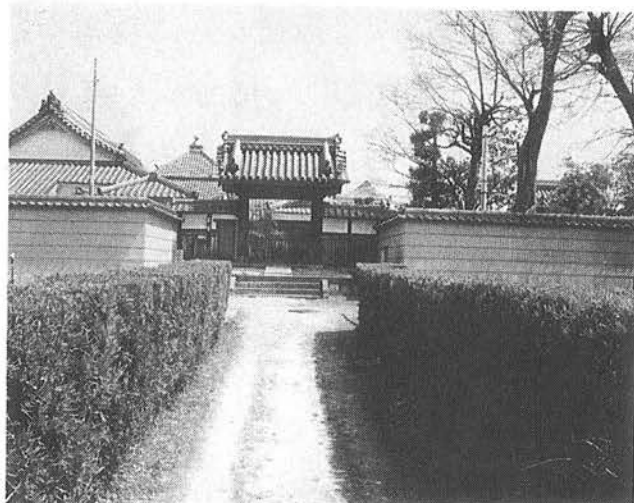


砲台場跡碑(1度も使用していない)

※この辺りに奈良時代頃よりの楠葉駅がありました。

久修園院くずおんいん 枚方市楠葉中之芝2丁目

行基れいきが靈龜2年(716)は、畿内に49院を建てた一つの寺で、真言律宗の寺です。道場として宗教活動の拠点で、天平11年(739)行基72歳の時、当寺で「安居会あんごえ」を開きました。この時184人が得度しました。宗覚そうかく律師が作成した天球儀と地球儀が保存されています。



奈良西大寺別格本山天王山木津寺修園院こつじ

第7章 橋本から淀へ

橋本 京都府八幡市橋本

久修園院から北には、天王山の山々を見ながら畠の中を約600mほどのんびりと歩くと、そこは京都府の橋本です。

橋本には三ツの顔があります。

①一ツは、京・大坂を結ぶ河川交通の中継地、津として商業的な役割です。まず八幡宮への参詣客や旅人を運ぶ西国街道と京街道の重要な渡しでもあり、石清水八幡宮に納める灯油を山崎より運ぶ船着場としてもにぎわいました。

橋本の渡しは、昭和30年代まで対岸の山崎(島本町)と結ばれていました。この渡しは、神亀2年(725)に架橋されたといわれる山崎橋がありました。川幅が広く約3kmの木橋であったが、洪水で流されてしまい結局渡し船になりました。



はしもと(柳谷)の渡し跡碑

②二ツ目は、石清水八幡宮のお膝元として八幡宮の影響が大きく、八幡宮社士が多く住んでいました。慶長5年(1600)の帳に橋本だけで、14名の社士の名が記されています。

社士たちは、朱印状に認められた所領を持ち、小領主(地頭)として小作人を支配していました。また、彼らの所領以外の八幡宮領に関しても、社士仲間の年頭が八幡宮社務当職の年貢収納役人とともに年貢を厳しく取り立てたので、農民からは反感を持たれていました。

③三ツ目として、「八幡山から橋本みれば 赤い女が出て招く」と淀川の船頭唄に歌われているほど有名な遊郭がありました。

はるか昔からあったと思われませんが、江戸初期の慶安2年(1649)正月20日に橋本で荷物を盗んだ者があり、淀で捕らえたら、橋本には遊郭が20軒もあったといっただので、京都所司代板倉周防守が、橋本町の年寄りに店に遊女を置く者があれば、亭主を罰するとしたが、街道筋の往来もにぎわい遊郭も繁栄したが、治安はかなり乱れていたようです。

橋本には、ふるい宿場町の雰囲気と妓楼がある町並が残っています。

橋本から京阪電車と、大谷川と旧国道1号線(京都守口線)の間を京都守口線に沿うように約1,800mほど進むと石清水八幡宮に着きますが、途中には樹齢千年と思われる楠があります。

石清水八幡宮 京都府八幡市八幡高坊30

この地に湧く清水を神とする自然崇拜からおこったものと考えられます。起源については諸説がありますが、貞観元年(859)奈良大安寺の僧行教ぎょうきょうが九州宇佐八幡宮がんに願をかけ天筆如来てんぴつによらい(現在は、守口市来迎寺の本尊になっています。)を授かり、石清水八幡宮の祭神としていましたが、その後、八幡神をこの地に祀り、祭神として、応神天皇・神功皇后じんぐうこうごうらを祀り皇族の信仰が厚かった神社です。

源氏はこの神社を氏神にし、源義家みなもともこの地で元服し、八幡太郎義家と名乗り、八幡宮を弓矢の神とし「南無八幡大菩薩」と八幡の神に祈願しました。

1881年エジソンが八幡の竹を炭化させ、炭化線電球を発明した。そのエジソンの記念碑があります。



応神寺・飛行機神社・高良神社・紅葉寺と呼ばれ、石清水八幡宮がくそうの額束がくそうにある善法律寺ぜんぽうりつじなどもあります。

八幡宮の神の使いは鳩(ハト)です。
八幡さんの多くは八の字は鳩です。

旅人たちが楽しみにしていたもの。

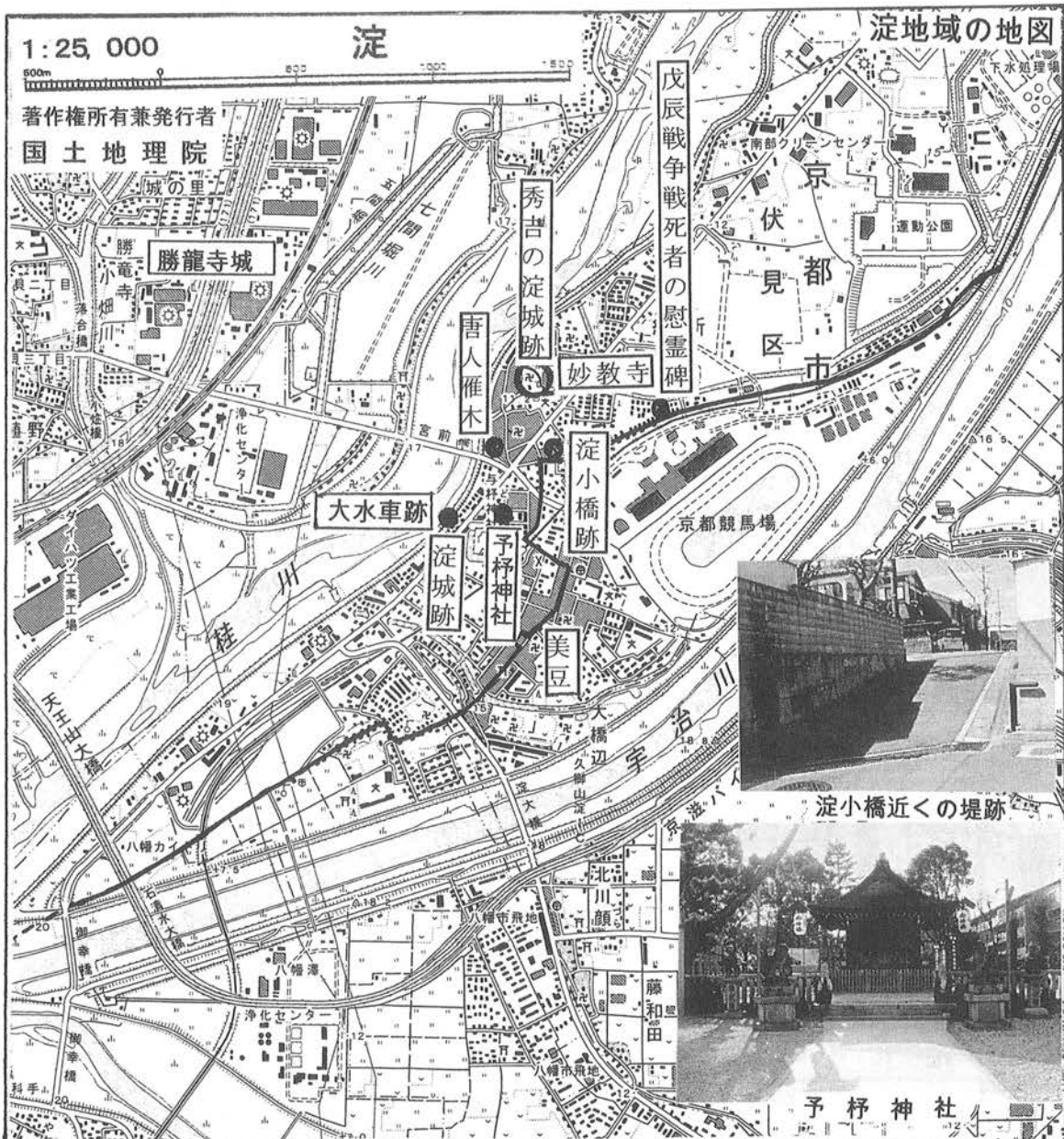
八幡巻、ごほうのうなぎ巻、将軍家への献上品。淀川を上下する船客にも売っていました。

源氏巻、白あんを源氏、平氏に見立てた赤いようかんで巻いた菓子。ちまき、この地域に自生していた葦あしの葉を使って作られました。

走井餅、逢坂山の名物の走井餅が当地に分家。

松花堂弁当、岩清水八幡宮の社僧で寛永の三筆として知られた松花堂しょうか昭乗しょうかがつくった弁当。八幡が発祥地。

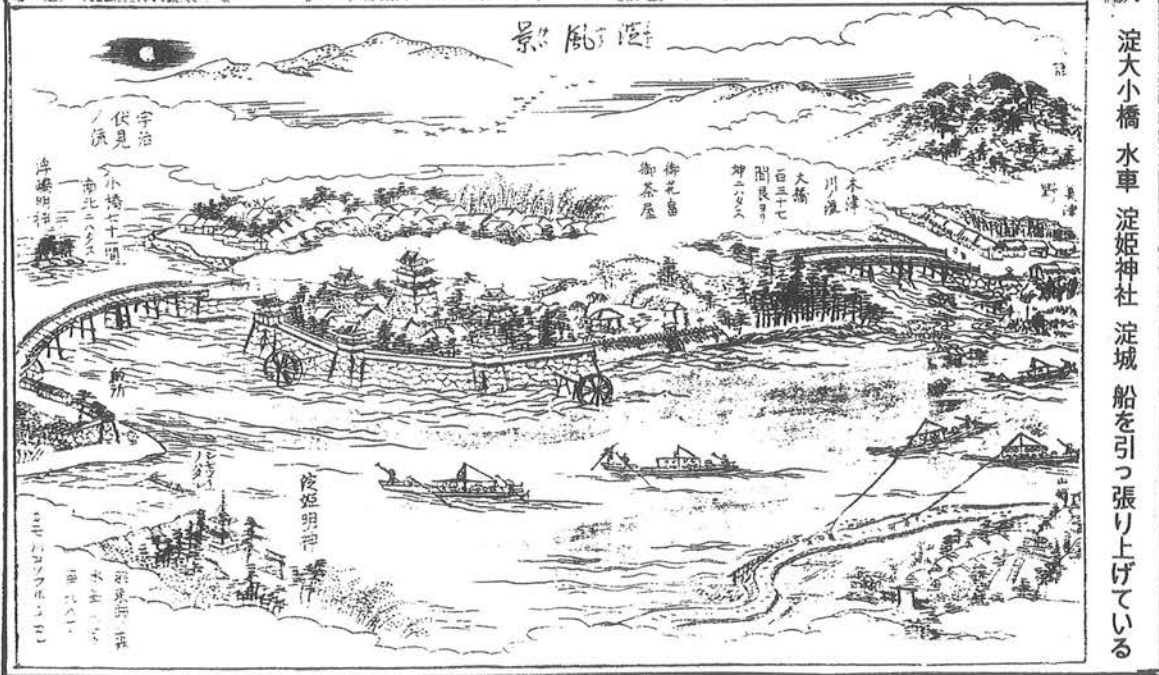
木津川は、以前はここより2kmほど北の淀城西側を流れており、淀から八幡まで道がなく、伏見から大坂へ行くときは淀より八幡まで船でやって来て、男山の東側にある洞ほらが峠くずはを通る東高野街道か、楠葉や枚方から生駒ふもとの麓ふもとを通り、今の四条畷か大東から大坂へ行きました。



淀小橋近くの堤跡



予杼神社



淀大小橋 水車 淀姫神社 淀城 船を引っ張り上げている

淀川河川公園背割地区

現在は、宇治川も木津川も掛け替えられ、木津川と宇治川に御幸橋が架かっていますが、その橋の下流に1.4kmの長細い堤防があります。

ここに桂川も流れ3つの川の合流地帯で、流れを緩和する目的の堤防で背割堤と呼ばれ250本の桜が植えられ市民の憩いの場となっています。

淀について

淀の地は、北東に桂川、東に宇治川(巨椋池)、東南より木津川が流れ込み、川の中に土砂が堆積して出来た州の島がたくさんありました。

増水時には、氾濫がおこる低湿地で、農業には適しない地で日常生活においても舟が生活手段であり、この地は、蓮・菱・葭などの生えた大小の沼がありました。淀は、琵琶湖を源流にもつ宇治川や木津川、桂川が淀川につながり交通の要地で与度津の中心納所は、各地の荘園より送られて来る租税を納めるために島州の上に郷蔵(倉)が建ち並び、物資を納めるところからこの名がついたようです。

納所の対岸には与度津とって古代より、水垂、大下津があり、この辺りが河川の交通要地の津として古くから栄えた所です。

淀地域の略図



この淀は京への玄関口でもあり、室町時代には日野富子が関を設け関銭を徴収したというほど重要な地域でした。

淀宿について

東海道55番目の宿駅です。数少ない城下町に設置された宿場です。淀宿は伏見宿より、1里14町(約5.4km)。枚方宿まで、3里12町(13.2km)ほどのところにあります。

人足100人、馬100疋を常備されていた宿駅で、人足も、馬継もおこない、問屋場もありました。淀宿の天保14年(1843)の調べでは。

家数836軒 人口2,847人 旅籠小16軒

東海道筋で、本陣も脇本陣も1軒もない唯一つ宿場です。

淀宿での宿泊者が少ない理由として。

紀州侯などは、和歌山を発ち枚方宿が2泊目です。もちろん淀は通過します。他の参勤交代などの大名たちは城下町に宿泊するののできるだけ避けました。それは何かトラブルが起こると大変だからです。

旅人たちも、徒歩や船などで淀宿まで来ればもう少しで、賑やかな伏見や京まで足を延ばして宿泊します。

京へ入る折りは、船で淀の草津の湊(下鳥羽の古い呼び名)は、京都にもっとも近い船着場で、大坂方面から米や鮮魚、物資などが陸揚げされた所で、今も魚市場跡の碑が建っています。

この道は、横大路(鳥羽街道)で、途中にも「おせき餅」を出す茶店もあり、朝鮮通信使も通った道で、多くの者は淀を素通りして京へ入りました。また、大坂へ下る客は、伏見より三十石船に乗り、伏見から歩いても1日で大坂に着き宿泊しました。

立地的条件から考えても淀宿での宿泊客が少なかったのが伺えます。

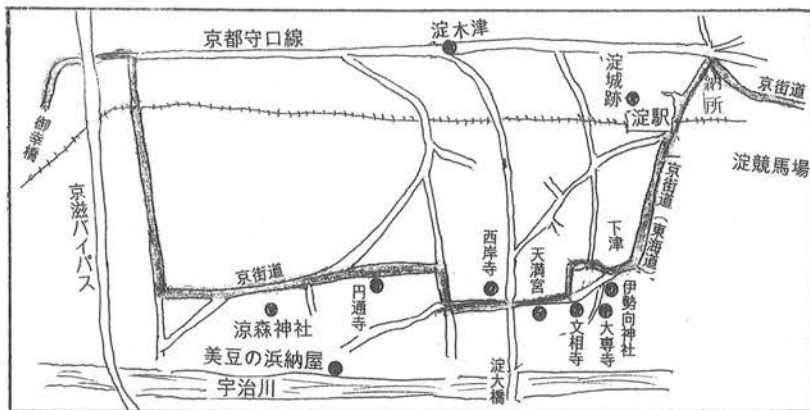
しかし、淀は、前記のとおり古代より、琵琶湖、宇治川、桂川、木津川の合流点で、奈良に都があったころより栄えました。長岡京や平安京に遷都されると物資の集散地として河川交通が益々栄えた所で、豊臣秀吉も徳川氏も城を築くほど重要地だったのです。淀宿の街道筋には6ヶ寺があり、城下町は、城の近くに寺町などを置き城を守りました。

また、旅行者の必要な時には、宿泊所の役割を果たしたのだと思います。

御幸橋を渡り直ぐの所を右折しますが、しかし、開発や京阪電車の車庫があり、分かりにくく500mほど先から右折して美豆町に入った方が分かりやすいです。

美豆は宇治川や木津川の土砂の堆積たいせきによって川州にできた村です。

古代より「美豆の御牧」として左馬寮みづさまりょう



美豆町の略図

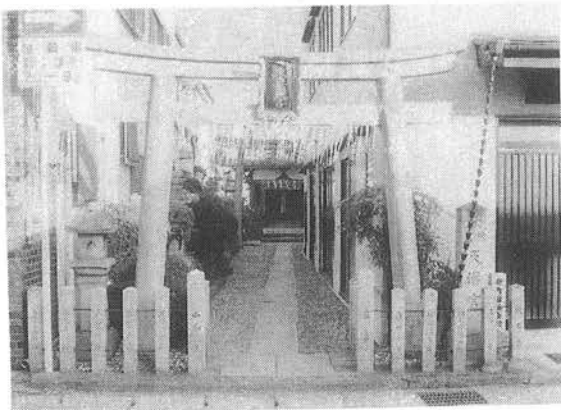
の牧場であった所です。木津川に沿ってできた底湿地の村で、淀津として水運の要地でした。この地には京街道が通り、淀宿の一部をになっており街道筋には宿場時代の面影を残す家屋や寺社がたくさんあります。

当地は淀大橋南詰め辺りは「浜納屋」という俵物納屋たわらものや蔵が建ち並んでいた所で、石段から浜に出て船に荷物を積み下ろしをした跡が残っています。

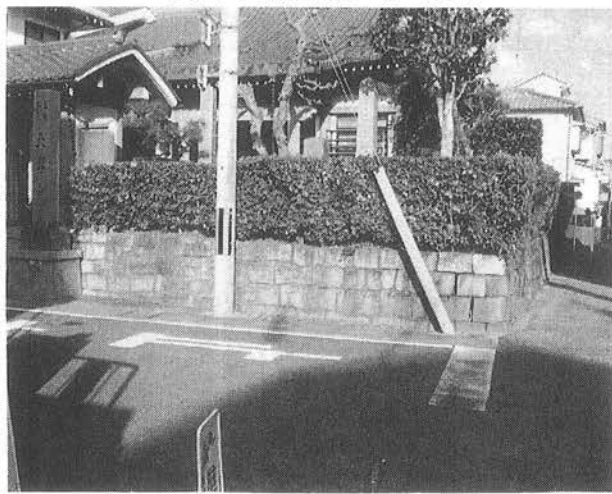
底湿地であったので、各屋敷や蔵、蔵跡と思われる立派な階段や石垣が今も見ることが出来ます。



美豆の街道筋にある民家



上の写真は、京街道筋にある天満宮です。少し進むと伊勢向神社があります。産土神は涼森神社です。



上の写真は屋敷を高くした所にある大尊寺、他にも次ぎのような寺があります。円通寺、西岸寺、文相寺、高福寺、東運寺、

よど
与杼神社 京都市伏見区淀町

京阪電車淀駅前であり淀城の前の神社です。城内にあったものではなく、神社の創建は応和年間(961~64)僧千観内供せんかんにいぐが肥前(佐賀県)より、与度日女神よどひめを勧請かんじょうしたのが始まりです。

その時、村上天皇(946~66年)より、「正一位淀姫大明神」の号を賜ったとありますが、しかし、貞観元年(859)の『三代実録』には、「山城正六位上予杼神に従五位下」を授かるとあり、延喜えんぎの制(延喜式=927)では小社とされ、これによる創建年代はさらにさかのぼると思われます。

祭神は、豊玉姫命たかみむすび・高皇産霊神はやあきつ・速秋津姫しきないしやを祀る式内社で、以前は淀川右岸にあったが、明治33年(1900)の淀川改修工事の時に、この地に移されました。

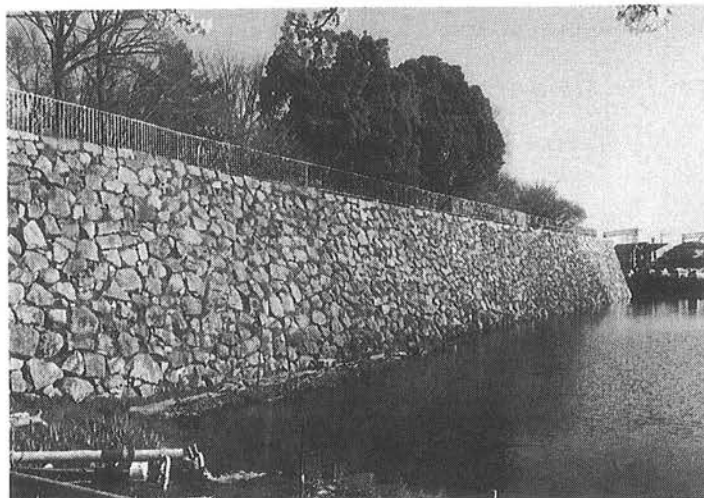
しかし、昭和50年夏の花火による火災で焼失してしまいました。境内には、本殿左右の石灯籠には、享保3年(1718)、宝暦己卯年きぼう(1759)の銘があり、宝暦己卯年のものは、大坂淀屋寄進の銘があります。

淀城 京都市伏見区淀町

京阪電車淀駅北方にある城で、徳川家の築いた城です。

淀城は、徳川二代将軍秀忠の命により、元和9年(1623)より造営をはじめました。家康も秀忠も朝廷により征夷大將軍せいいたいしょうぐんの宣下せんかを受けたのは伏見城です。西での公式の場とするために、関西の諸大名に命じて二條城を造営させました。

その後伏見城を廃城にし、その用材で二條城を造営修理し、二條城の五層の天主閣を淀城に移し三重の堀をめぐらした城が寛永2年(1625)に完成しました。淀城は京都の守護が目的です。



淀城跡石垣

淀城の城主

初代城主は、この城を築城する時に尽力をつくした、家康の異父(父違いふ)弟の子松平定綱さだつなが3万5,000石をもらって封ぜられましたが、しかし、翌年の寛永10年(1633)には定綱は、大垣に国替えとなりました。

淀城二代目の城主

寛永10年に、下総しもふさのくに国古河から譜代ふだいの永井信濃守尚政なおまさが入部。同じ時尚政の弟直清なおきよが長岡城主(勝龍寺城)に、慶安2年(1649)3万6,000石で高槻城主となり、淀川より京への入口を兄弟で守りを固めさせました。

徳川幕府は、上方の民政は永井兄弟、京都所司代、大坂両町奉行、堺奉行と2人の代官奉行の8人衆ゆだに委ねました。

尚政は、淀城は川に囲まれ、要塞ようさい(丈夫に造られた陣地)であったが、しかし、洪水の危険との背中合わせであったので、2年がかりで木津川の付け替えを行い、その結果、3万5,000石から10万石の城下町になりましたが、永井氏は家臣団の屋敷にもこと欠くほど困っていました。

元禄年間(1688～1703)町家1,370軒、人口は元禄13年3,740人から、正徳5年(1715)には、5,143人に。また、永井氏は、北河内地方にも陣屋(枚方渚→守口の佐太)置き領地を所有。

淀藩最後の城主

城主は度々代わりましたが、享保8年(1723)下総の佐倉から稲葉丹後守正知まさともが城主となり、幕末まで稲葉氏13代約150年間つづきました。

※第3将軍家光の乳母春日局と稲葉氏は結縁関係があり、春日局の出身地とも言われています。

大政奉還後、慶応4年(1867)の鳥羽伏見の戦いの時、藩主は12代の稲葉忠邦であったが、老中職にあり江戸に詰めていました。

城の留守は家老田辺治之助に命じていました。薩長軍に追われた、旧幕府軍は淀城に入城を求めたが、門も開けなかった上、兵も動かさなかったのです。

この対応に幕府軍は淀小橋や淀大橋を焼き、橋本に退いた幕府軍に対し味方の藤党軍までもが対岸の山崎から砲弾を加えられ、京街道を大坂へと撤退して行きました。

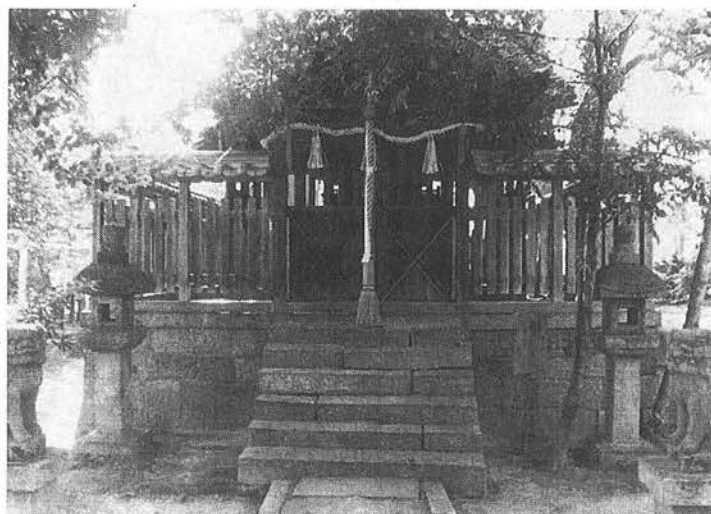
※淀城留守居役田辺兄弟は責任をとり切腹。城下では戦いはなかったが城は放火で城下の多くも焼失した。

城内跡にある稲葉神社

稲葉氏初代正成を祭神として、旧藩士が明治18年(1885)建立した神社。旧藩士より寄進された多くの文書が保存され、この中に『聞合之書付答書』があり、所替・国替の時に提出される事務引き継ぎ書類や、当時の政治や経済、人口・地理・風習などが問答形式に記載された、淀の状況を知る上で重要なものが、保存されているとされています。

淀城内の樹木にいくつかの弾丸の跡があります。城を出て、京都守口線を東北に約600mほど進むと5差路の複雑な交差点(納所)にでます。

ここが、宇治川と桂川の合流地点で、高札場や問屋場・唐人雁木・過書船番所や淀小橋などがあつた納所町です。



淀城跡内にある稲葉神社

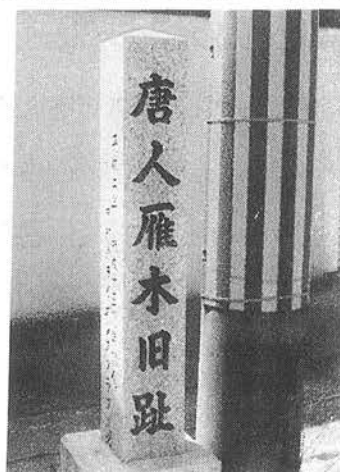
とうじんがんぎ 唐人雁木と朝鮮通信使

主に朝鮮通信使が上洛の折り、大坂より淀川を上り

ここが上陸した所です。上陸すると淀小橋を渡り、使館に入って休憩しました。その後、たくさん見物人がいる鳥羽街道を通り、京都の本国寺、時には、本能寺に宿泊しました。

接待に当たる各藩では神経を使いました。淀藩でも享保5年(1748)来日の時、淀のおおしもづの大下津より納所のとうじんがんぎの唐人雁木まで船引き人足1,500人も動員されました。また、川中の土砂^{さら}浚えをして、川中には葉付の竹を立てて水路の^{しんせん}深淺を示しました。

雁木付近には一晩中^{かがりび}篝火を炊き、川の両岸には高張提灯三千提を出して警備を固めました。



雁木跡碑

朝鮮通信使は、慶長12年(1607)から文化8年(1811)の間合計12回。※水夫や船員は大坂に残し対馬藩士800人、馬800頭、東海道だけでも百万両、人夫延べ23万人、馬4万頭。

豊臣秀吉の築いた淀城(現在は日蓮宗妙教寺) 京都市伏見区納所北条堀

秀吉は53歳、ちゃちゃ(淀君)が23歳で懐妊すると、大喜びで天正17年(1589)正月より産所として淀城を着工し、3月の初めには完成しました。

同年5月27日に鶴松が生まれ「捨」と呼びました。秀吉は、ちゃちゃのことを「淀の者」・「淀の女房」と呼び、一般の人は「淀殿」と呼んでいました。しかし、天正19年8月5日に鶴松は亡くなり、もう子どもは諦めていましたが、文禄2年(1593)8月3日にちゃちゃが「拾」のちの秀頼を産みました。

淀城は不要になり今度は秀頼のために、着工中の伏見城の完成をいそがせ、文禄3年には伏見の町割りも行いました。



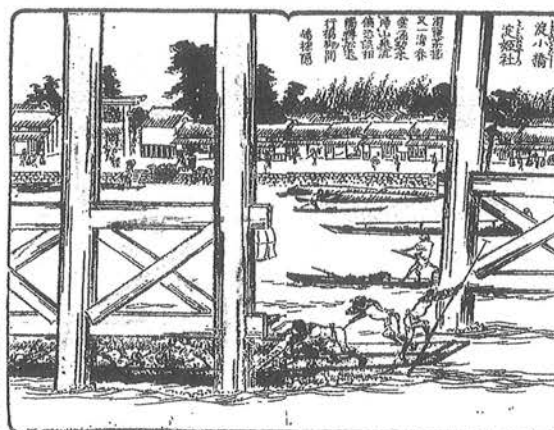
妙教寺境内の戊辰戦争の死者の慰霊碑

徳川の時代になり、寛永3年(1626)に松平定綱が初代の城主になり、秀吉の城跡が淀城の北方の守りとして日蓮宗の妙教寺という大寺を建立しました。その後、火災にあい、現在の建物は天保8年(1837)のものです。戊辰戦争といわれる戦いが、慶応4年正月5日の朝から、旧幕府と薩長軍との戦いが激しく、納所の人たちもだんだん戦闘が近づいてくると、大事な家具などを井戸の中に入れたり、聖地の寺でも命の保証はなく、大事なものを舟に積み避難しました。

妙楽寺の本堂には、戊辰戦争の時の砲弾のあとが柱に残っています。また、戦闘で亡くなった遺骸を葬った慰霊碑が境内に建てられています。

淀小橋(淀小橋の所は急流) 伏見下れば淀とはいやじゃ いやな小橋ととも下げて

妙教寺より、唐人雁木のある納所の交差点まで引き返し、府道124号線が京街道にあたります。100mほど進むと「淀小橋跡」の跡碑があります。



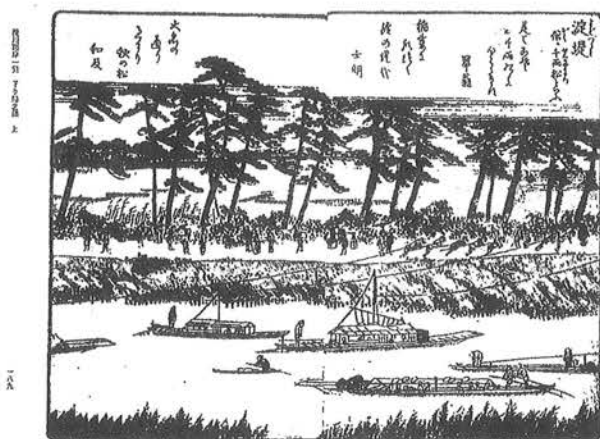
淀小橋 城郭の上であり長さ約27間(約137m)南北に架す。兩岸共に茶店、旅店、貨食家多く繁栄なり、領界より水上凡23丁(2,300m)。橋下には夜灯笼を照らし、通船の便とす。

太閤堤と千両松

豊臣秀吉は宇治川の水が巨椋池に入るのを防ぎ伏見城の外堀にして、巨椋池が浅かったので、伏見城を築くために堤防を造り、物資を運ぶ水路を確保しました。その堤防が淀まで築堤されて街道(京街道)となりました。江戸時代に入り、参勤交代が始まると大名たちは京を通行することが禁止され、西国街道からも納所に来て、宇治川右岸の太閤堤にたくさんの松が植えられた千両松といわれた京街道を通り、伏見宿から大津宿へ向かいました。

(『淀川兩岸一覽』下り船之部 上)

千両松…堤の間の松をいふ。或云、^{すうかぶ}数株の内にて、^{そのふり}其形よき名木あり。是を賞して名づく^{しやう}とぞ。接するに、一株の松をさして称するには有べからず。長き堤の間、其風景の勝れたるを賞して、俗に千両の名を蒙(こうむる)らせしもなるべし。尤も、千両松は賞せし号にて、^{あたひ}価のことには有へからず、此堤は、秀吉公の御時築かせ給うといふ。



大名の
過けり
通り
秋の松
和及

稲妻に
爪つく
淀の堤哉
士朗

俗に、淀堤
千両松といふ。
是てこそ
まどとぎす
翠翁

『淀川兩岸』淀堤の千両松 船を網で引く姿が見える

鳥羽伏見の戦いの戦死者の慰霊碑

淀小橋をさらに伏見に向かって数百メートルほど進むと競馬場の駐車場手前に「史跡戊辰役東軍西軍激戦地」と書いた所があります。ここが宇治川千両松の地で鳥羽伏見の戦いの激戦になった所で、小銃で応戦する騎兵隊に槍隊の旧幕府軍は退散するよりしかたなく楳木に逃れ、この地が東軍と西軍の激戦地となった所です。旧幕府軍は朝廷に刃向かう賊軍であると言われたが、知らぬ土地で散っていった武士たちを土地の人たちは、哀れに思い東軍戦死者の墓を建てました。



いつも花の絶えない慰霊碑

伏見鳥羽の戦い(戊辰戦争)慶応4年(明治元年)1868年)戊辰の年の戦い。

嘉永6年(1853)6月にペリー来航。安政5年(1858)6月に日米修好通商条約や安政の大獄、桜田門外の変などで大きく政変していきます。

元治元年(1864)9月18日の政変で京都を追われた長州藩の急進派が池田屋事件を機に、また京都に入り、薩摩・会津・桑名の藩兵と皇居内外の戦いで、禁門はまぐりごもん(蛤御門)が焼けた事件がありました。これを禁門の変といいます。幕府は直ぐこれは長州を朝敵として追討しました。第一回長州征伐。長州藩は、再び中央から追放されました。

長州藩は1863年に高杉晋作らが騎兵隊をつくり、特に第一回の長州征伐後、装備に訓練かきを重ね慶応2年(1866)第二回長州征伐や戊辰戦争で活躍します。

慶応3年徳川15代将軍慶喜よしのぶは大政を奉還し、王政復古ほうかん おうせいふっこ ごうれいの号令が下され、300年続いた徳川政権が終わりました。

その後、慶喜の政治の重役に置くように要求しましたが、それを認めようとする公議政体派の者もいたが、小御所会議で山内豊信が反対派を押し切って、官位辞退と領地献上を命じた。これに対して旧幕府・会津藩・桑名藩などが激怒げきどして二條城を出て大坂城に入りました。

そんな時、その年の12月25日に、幕府軍が江戸の薩摩藩邸を襲撃したということが慶喜に届きました。旗本や会津藩は薩長の態度に激怒していたので、慶喜は「討薩表」と「薩摩藩罪状書」を朝廷に差し出すために、慶応4年1月2日の夜大坂より1万5,000人の軍とともに京に向かいました。

一方、薩摩藩は、軍1,500人を東寺に、長州藩は、1,000人を東福寺に入り伏見口、鳥羽口で幕府軍を迎え撃つ用意しをしていました。しかし、数では負けるのは決定的で、敗戦の時は、山陰や広島に落ちのびることも考えていました。

薩長を中心とする官軍は、岩倉具視いわくらともみが「金穀出納所」を設け、京阪の富家に15万両を軍事費として調達し、それでも足らず、市内の魚屋や八百屋といった小さな商売人からも金を集めました。

戦いの始まりは、3日の夕刻、城南宮の西、鳥羽街道上の小枝橋付近でおこりました。ここは狭い小さな橋で、両軍がかち合い、「通る」「通さぬ」の押し問答1時間。強引に通ろうとした幕府軍の大目付滝川が、薩摩藩のアームストロング砲四門に撃たれ、幕府側は十分な準備をしていないまま、戦闘態勢に入りました。

幕府軍は、伏見奉行所に、一方薩長軍は、直ぐそばの御香宮に本拠地を置き、激しい戦闘がくり返されました。新撰組の隊長近藤勇は、^{すみぞめ}墨染で、狙い撃ちされ大坂城にいたので、代わって生方三蔵の1,500人は、薩長の御香宮の指揮所に斬り込んで行きましたが、小銃の前にはどうしようもなく退きました。

同じ頃、会津藩の本拠地伏見御坊背後から火の手があがり、幕府軍は、濠川、高瀬川の所に築かれた「俵台場」に撤退しました。

4日の夜明けに戦闘が再開しました。幕府軍は猛反撃したので、薩摩軍は苦戦しましたが、伏見口より援軍が来たので、幕府軍は多くの死傷者をだし、淀城の北東約1,700mの地にある「富ノ森」に後退しました。この時の戦死者の慰^い霊碑が法伝寺にあります。

5日の朝、幕府軍は富ノ森の「酒樽陣地」。薩長軍は「横大路の陣」を中心に、京街道は、一日中砲弾が飛び交い激しい戦闘地となりました。秀吉の築いた淀城跡に建てられた、妙楽寺の本堂には、今もこの時の砲弾の跡が残っています。

農民たちは大事なものは、穴を掘ったり、井戸に入れて守りました。また、京街道(東海道)の宇治川に沿ってあった千両松の地では、早朝より長州軍を先頭に薩摩軍も続き、狭い地で、幕府軍の槍隊と衝突し、幕府軍は、大被害を受けました。競馬場の駐車場近くの十八番^{うめのき}榎木の激戦地になった所に墓が建てられ、慰^い霊碑もあります。

幕藩軍は、後退し淀城に入ろうとして、開門を求めましたが、この城は、稲葉忠邦が城主であったが、老中職で江戸に詰めており、留守は家老の田辺治之助に命じていました。田辺治之助は、幕府軍の開門要求に応えず、城を開門しなかったのです。やむなく幕府軍は淀小橋や淀大橋を焼き落とし橋本に退きました。ついに淀藩、つづいて津藩32石の藤堂氏が官軍に寝返り、対岸の山崎から砲弾を打ち込んできました。

淀城は、この時放火され城下も大半が焼失し、田辺兄弟は責任をとり切腹しています。勝敗が明らかになった慶喜は海路で江戸に帰り、寛永寺には同士がたくさんいましたが、官軍は大軍で江戸を攻略し、ついに江戸城は無血開城し、奥羽戦争をへて、五稜郭を^{かんらく}陥落させ、戊辰戦争はおわり、明治維新となりました。明治に入り、街道も大きく変^{へんぼう}貌していきました。

伏見宿へ

納所より太閤堤(淀の堤)を伏見に向かうと、^{もりおうがい}森鷗外の『高瀬舟』でよく知られている「高瀬川」です。

^{すみくらりょうい}角倉了以・与一父子が全水域の土地を自費で買収して、総工費7万5,000両で、慶長19年(1614)に竣工しました。これにより、大坂からの物資が伏見を経由して京の市中へ運ばれた重要な水路です。

京都には、内浜・米浜・富浜や木材などを取り扱う木屋町などがあり、現存している地名もあります。

つづいて直ぐにある水路が濠川で、宇治川の流水ですが、明治になり琵琶湖からの水流と合流しています。ここに架かっている橋が、「肥後橋」で加藤清正の屋敷に通じていた道です。この橋のもとに「高札場」がありました。



『淀川兩岸一覽』伏見京橋

肥後橋の上流に「であい橋」がります。右岸に「角倉了以の水利功碑」が水流を眺めるように建てられています。

肥後橋より下流を見ると、^{みすこうもん}三栖閘門が見えます。昭和初期に宇治川と濠川の水位差を調節して舟運した所です。

現在は港公園として、資料館や10石舟の遊覧船の発着地でもあります。江戸の昔は、^{こびき}木挽町といって船頭だけで700人もいて繁栄していました。

肥後橋を渡り西浜町から東浜町を左折すると船高札場・船番所・過書船番所があった所です。東浜町を右折して南へ進むと「^{ちゆうしょじま}中書島」です。

中書島は、周囲が宇治川やその支流、濠川などに囲まれた^す州にできた所です。この辺りには洲本3万石の脇坂安治の屋敷や、加藤清正の屋敷、蜂須賀阿波守の屋敷もあり、今も肥後橋、阿波橋がその名残です。

中書島は、脇坂安治は^{なかつかさ}中務少輔であった。中国ではこの官名を中書といい、その脇坂安治の屋敷があった所から中書さん、中書島と呼ぶようになり、^{ゆうかく}遊郭は港町ともに発展し、旅人や船頭たちで賑わった所ですが、今は、土地も整地され昔の面影はほとんど見当たりません。

第8章 伏見の地域

伏見は、「伏水」といって、地下6mも掘れば酒に適した良質の湧き水があり、灘^{なだ}の男酒に対して、伏見は、水がまろやかでふくよかな酒で、女酒とされています。

この伏見には、「延喜式」^{えんぎしき}の御香宮^{ごこうのみや}があり、貞観^{じょうがん}4年(862)に創建された神社で、祭神は、神功皇后^{じんぐう}、仲哀^{ちゅうあい}天皇らを祀っています。

この地には清泉が湧き出ていたので、清和天皇より「御香宮」の名を賜ったとあります。今は伏見の産土^{うぶすなじんじゅ}神社です。

また、西方には平安遷都^{せんと}にあたり王城の南の守護神として城南宮が創建され、その辺りには白河天皇が上皇の時に、鳥羽離宮を建て、鳥羽上皇もここで院政をとり、離宮を拡張し伏見は発展していきました。東山山麓には、伏見稻荷、藤森神社、海宝寺など歴史のある寺社があります。

特に伏見の発展をとげたのは、やはり、豊臣秀吉が文禄期に「伏見城」を建立し、城の周辺に二百数十家の大名屋敷を置いたことでしょう。現在もその名残の地名が所々に残っています。

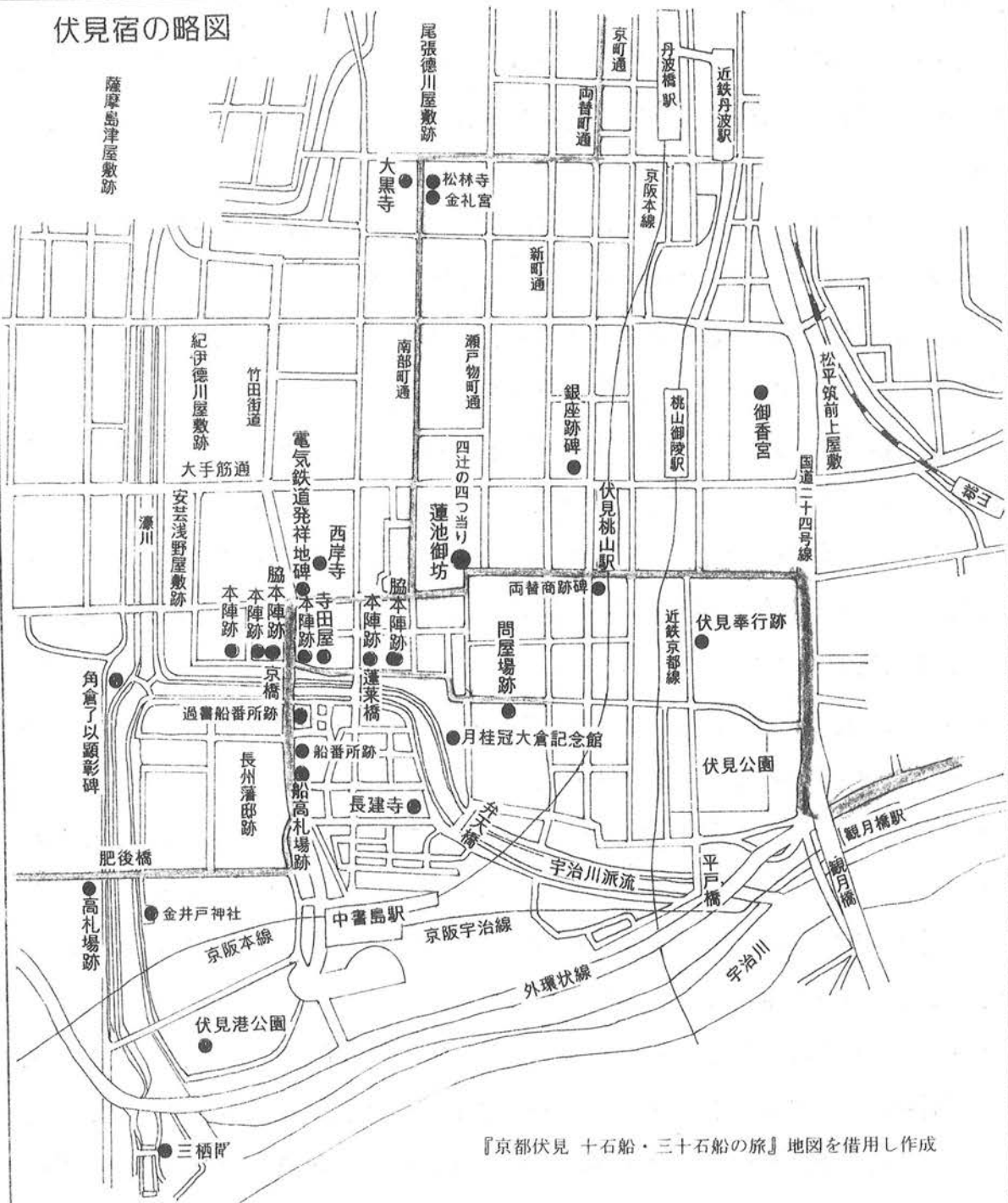
また宇治川に対しては、宇治～伏見～淀間に太閤堤と呼ばれる大堤防を造り、三十石船の発着地となり、京都の町とは高瀬川で結んでいました。江戸時代には、東海道の「伏見宿」が設置され、やがて天領地になり、伏見奉行所が置かれました。

天保15年(1844)には、人口2万4,227人の大きな町になっています。また、明治28年(1895)1月31日に、京都遷都^{せんと}1,000年記念行事の客を運ぶために、七条停車場から伏見の駿河屋のある油掛^{あぶらかけ}町まで市電のさきがけとなる、民間の京都電気鉄道株式会社が電車を走らせ、伏見は京都の玄関として水陸交通の基点として栄えてきました。

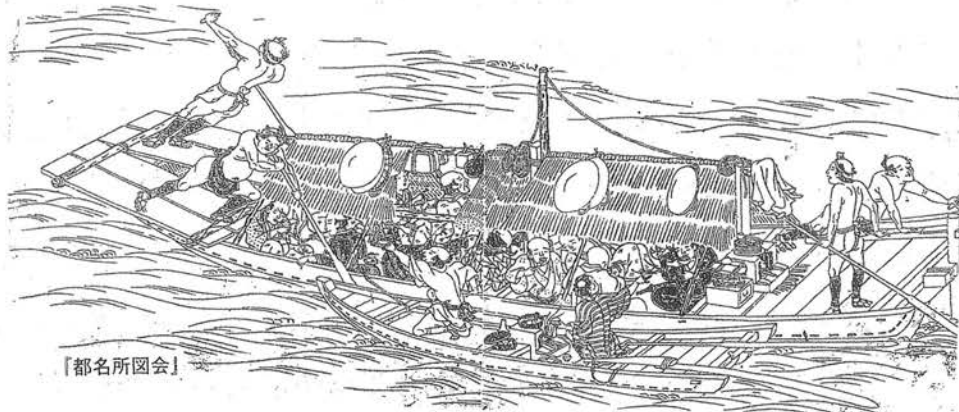
伏見は酒蔵の町並みがありますが、良質の水をいかした酒造りは明暦3年(1697)にはすでに83軒の酒造家があったとされています。

特に明治以降「伏見の酒」がより世に知られるようになりました。油掛通りや宇治川沿いの酒蔵のある伏見南浜^{かいわい}界隈は、景観整備地区に指定されています。その後、伏見は、伏見市になり、昭和6年4月に、京都市と合併し現在は京都市伏見区です。

伏見宿の略図



『京都伏見 十石船・三十石船の旅』地図を借用し作成



『都名所図会』

伏見宿

伏見宿は、江戸・京都・大阪・伏見などは付出しつけだと言って、公用の旅行者に対しては、無賃または御定賃おきだめ銭で人馬を提供し、それを越えると相対雇いとなっていました。

伏見宿では、慶長から寛永年間(1624～1643)ころまでは、江戸などと同じように諸大名や旗本屋敷に馬を持ち込み出入りをして、荷物を相対付出しで、付出し賃銭を受け取っていました。

しかし、同じ寛永のころ小堀遠江とおとうみのかみ守が、伏見郡代(伏見奉行)になって、伏見宿も東海道の宿場と同じように命じられました。

元禄年間(1688～1703)には助郷がつけられ、馬持も困窮こんきゅうし67人がしだいに減少し、宝永4年(1707)には15人になってしまいました。

伏見の馬持ちは、百姓が仕事の合間あいまというのではなく、馬借ばしゃくと言ってそれが専業であるので、無賃や御定め賃しえき銭では使役するのは無理ということで宝永4年11月25日より元もとのように、江戸・京都・大阪と同じように付出し賃銭が許されました。

伏見宿は、東西1km、南北4.6kmと細長く、北は墨染すみぞめ、南は宇治川まで。近鉄京都線の伏見駅直ぐ西に宿場の端はしを示す「棒鼻ぼうばな」の地名が残っています。

伏見宿は天保15年・弘化元年(1844)の調べでは、東海道57次中、人口は飛び抜けて多く、本陣は、箱根宿、浜松宿が6軒、つづいて小田原宿、伏見宿が4軒、脇本陣も2軒あり、東海道でも大変大きな宿駅です。参勤交代で西国街道を通る大名たちも伏見宿にやって来ました。また、三十石船等の発着地で、琵琶湖、木津川、桂川を利用し大坂からの食糧品や物資等の集散地の港で、京の南の玄関として大変賑わった所です。

伏見城下の 四辻の四つ当り
東本願寺伏見別院(蓮池御坊)の門前は、東西南北どの方向から来ても突き当たる所です。
これは、豊臣秀吉時代に伏見の城下攻防のためにつくられた町割りです。
蓮池御坊とは、寺領の蓮池を埋め立てて創建したものです。

伏見の名物 駿河屋の羊羹
天正17年(1589)、現在の駿河屋が寒天を用いて蒸羊羹を考案し、後に日持ちする煉り羊羹に改良しました。
秀吉も茶会に用いその味に絶賛したといわれています。
旅人たちも楽しみにしていた羊羹は今でも伏見を代表する銘菓です。羊羹は伏見が発祥地と言われています。

伏見城

豊臣秀吉が天下を平定し、権威^{けんい}を一手に握っていた黄金時代の城で、秀吉の夢であった明に勝利して、明の使節を迎えようとして建てたもので、軍略的なものは必要なく、天正15年(1587)に京都に造った聚楽第^{じゅらくだい}のような館でした。

文禄2年(1593)に着工し、慶長4年(1596)に完成したとありますが、伏見城については詳しくはわかりません。慶長元年7月12日の夜、大地震で城も大被害をうけました。直ぐ^す修復にかかりましたが、秀吉は、慶長3年8月に死亡し、翌年、慶長4年3月には徳川家康が伏見城に入り政務^{せいむ}を取り、慶長8年にこの城で、征夷大將軍^{せいゐたいしょうぐん}の宣下式^{せんかしき}をおこないました。

その後取り壊され本丸御殿は二條城。隅^{すみ}櫓^{やぐら}は大坂城。淀城、江戸城、福山城、西本願寺^{にしほんがんじ}、智積院^{ちしゃくいん}、御香宮などに移築され今も二條城や西本願寺、御香宮などでは安土桃山時代の華やかな建築物を見る事ができます。

ちょうけんじ
長建寺 京都市伏見区東柳町511

伏見に来ると濠川に架かる弁天橋のほとりに、竜宮造りのかわいらしい山門に足がとまります。ここが真言宗醍醐寺派の長建寺で、「中書島の弁天さん」と言って親しまれています。

当寺は元禄12年(1699)伏見奉行になった建部内匠頭^{たけべたくみのかみ}は、伏見の発展策として中之島へ蓬莱橋や今富橋を架け、葦^{あし}の生え茂った島を整地して、深草大亀谷^{おおかめたに}にあった即成院の塔頭^{たっちゅう}多聞院を移し、この寺を中書島開発の功労者建部氏の長命息災を祈って長建寺と名付けました。

長建寺の本堂は、八臂弁財^{はっぴごく}(極彩色^{さいしき}の弁財天女^{いもん}の木像)で、衣紋^{きりがね}は截金技法を用いた平安後期の作とされています。

音曲の神様として花柳界の信仰を集めています。境内は、醍醐より移された桜があります。



長建寺の竜宮造りの山門

長建寺より東浜町に戻り船高札場跡の前を通り「京橋」を渡ると左端詰に高札場がありました。

この南浜町が「伏見宿」の中心地です。船宿の寺田屋の左右には本陣や脇本陣があり、問屋場は少し離れた東側にありました。しかし、現在は寺田屋以外の面影はありません。

寺田屋 京都市伏見区南浜町

今では、伏見を代表する名所になりましたが、伏見には寺田屋と同じような船宿は、山形屋、越前屋、かくい屋、近江屋、水月屋、醍醐屋などがありました。

船宿は船主と協定し、宿の前まで船を着け、船客を^{あっせん}幹旋してもらい、船賃から2割ほどの手数料をもらっていました。また、船待ちの客には食事やお菓子、お茶などを出す茶屋も兼ねていました。

寺田屋には、今も前の岸辺に寺田屋浜と言って三十石船の発着地の階段が残っています。また、寺田屋にも船があり、普通は船頭6人ですが、寺田屋の船は、船頭が8人乗りで船足が速く好評でしたが、その分料金も割増しです。さて、寺田屋は明治維新までに歴史に2回登場します。

その一つは、薩摩藩の定宿で、国元(鹿児島)や大坂藩邸と京の藩邸への往来があり、女主人のお登勢がよく面倒をみてやっていたので、藩士たちも慕^{した}っていました。文久2年(1862)薩摩藩主島津茂久の父久光は、^{こうぶがったい}公武合体運動を強力な推進者の藩兵を千人を率いて上洛しました。

急進派の武士たちは、この機会に倒幕運動を少しでも早くやろうとして、大坂藩邸を30人ほどが抜け出し、三十石船で寺田屋に集結しました。



大黒寺の説明板 当寺に九烈士の墓があります

これを知った奈良原喜八郎が久光の命を受けて寺田屋に来て説得したが、決裂して争いになり、7人が即死、重傷を負った2人は切腹となりました。同じ伏見にある薩摩藩の祈願所の「大黒寺」に葬られました。

二回目は、坂本龍馬が慶応2年(1866)正月22日夜、長州藩士^{みよししんぞう}三吉真藏に薩長連合の成功を伝えていた。寺田屋は幕府の密偵^{みつてい}の監視下にあり、その夜伏見奉行配下の者と新撰組隊士20人ほどに襲撃された。

寺田屋の養女おりゅうの機転と高杉晋作から貰ったピストルで危機一髪屋根伝いに逃れ、薩摩藩邸からしむけられた船で救出されました。

龍馬は薩長同盟を成功させた後、維新を待たず翌年11月京都河原町の近江屋で中岡慎太郎と会っている時、踏み込まれ33歳という短い生涯を閉じました。



見学者が絶えない寺田屋

寺田屋6代目の女将 お登勢

近江の船宿の娘で、船宿寺田屋に嫁ぎましたが夫の伊助は35歳で亡くなり、その後、お龍を養女^{しにせ}に老舗の船宿を切り盛りさせていました。正義感が強く、世話好きで多くの者が慕い、食客が絶えなかったとあります。薩摩藩の定宿^{じょうやど}でもあり、お登勢は坂本龍馬には気遣っていたようです。明治10年(1877)に亡くなり、寺田屋事件^{じゆんなん}で殉難した九士の墓のある大黒寺前の松林寺に葬られています。寺田屋境内には「お登勢明神」として祀られ、若い女性に人気があり、縁結びの神として慕われています。

坂本龍馬の妻となったお龍とは

京都柳馬場で衣食足りて礼節を知るしていた、樽崎將作の娘です。父は京都の尊皇攘夷派^{そんのうじょういは}の大物で安政の大獄^{たいごく}の難にあい病死しました。お龍は、気の強い女性で、寺田屋の養女になり寺田屋を守りました。慶応2年(1866)1月23日の襲撃^{しゅうげき}で、お龍の機転で龍馬は難を逃れました。後二人は結婚をします。

龍馬が、慶応3年11月の夜、醤油近江屋で不意に襲われ33歳で命を落としました。お龍は27歳でした。龍馬の姉の乙女に引き取られたが、気が合わず…後に横須賀で行商人と結婚しましたが、終生「龍馬の妻」で通し、明治39年66歳で死亡しました。

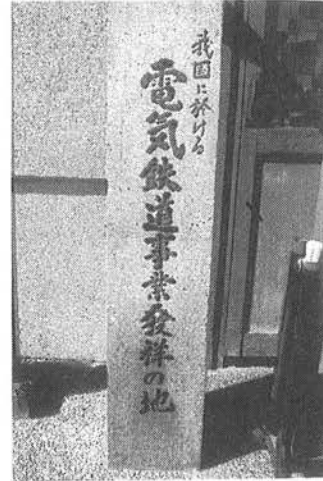
伏見宿を出発する大名や旅人たちは

参勤交代の大名行列の発着地は京町で、今の太倉酒造本店が馬借前で、時代には相違がありますが、馬借67頭、六地藏にも33頭の貸馬が準備されていた。一般的には、伏見奉行所と両替商の間の京町を通り墨染めへ向かう場合と、旅行者によっては、六地藏から山科の追分けに出ました。

一方、本陣から出て京橋町(竹田街道)を少し進むと、駿河屋があり、そこを右折します。

駿河屋 京都市伏見区油掛町

羊羹の総本家から、第10代の子、岡本善吉が分家して始めた店で300年ほど前のことです。



電気鉄道発祥地碑

電気鉄道発祥地の碑

駿河屋の角に建つ碑が、京都遷都^{せんと}1100年を記念して明治28年に内国勸業博覧会が開催されており、その見物客をめぐめて七条停車場(ステーション)から伏見の油掛町まで6^きを、浜岡光哲が30万円を投じて電車を開通させた、日本最初の電車で昭和36年まで堀川通りを走っていました。

【西岸寺】京都市伏見区阿油懸町

右折して数10m進むと左手に、西岸寺があります。寺の名は、油懸^{あぶらかげさん}山地蔵院。昔、山崎の油商人が、油を入れて桶^{おけ}を担^{にな}って門前を通りかかったところ、転んでしまい残った油^{かたわ}を傍らの地藏さんに掛けて帰ったところ、トントン拍子で大長者になり。それ以来、油を掛けて願いをするようになりました。



油懸地藏堂

松尾芭蕉が貞享2年(1685)に、当寺の任口上人^{にんく}を訪ねて詠んだ句が、

我衣^{わがきぬ}に ふしみの桃の 零^{しずく}せよ の句碑があります。

当寺を出て東に少し進みキザクラ・カップカントリーを過ぎ、直ぐ左折して北に向かいます。南部町通りの突き当たり手前に大黒寺があります。

大黒寺 京都市伏見区鷹匠町

薩摩藩の祈願所であるところから、別名薩摩寺ともいいます。寺田屋騒動で亡くなった、遺骸がいを筒井屋伊兵衛がこの寺へ運びました。

はじめは上位討ちということで、墓は建てられなかったが、しかし現在は西郷隆盛の碑銘の墓が建てられています。



薩摩藩九烈士の慰霊碑

また、当寺の向かい側には、謡曲金札ようきょくきんさつで知られる金札宮と若き薩摩の九烈士を見守るかのように松林寺にお登勢のお墓があります。

伏見青少年センター(尾張屋敷跡)の所を右折して、東に向かい直ぐ左折し、次の通りを右折して両替通りを左折する、もう1本東の通りは京町通りで、ここを北へ向かいます。

欣浄寺と深草少将 京都市伏見区

曹洞宗清涼山欣浄寺で 伏見の大仏と呼ばれる丈六毘盧遮那仏びるしゃなぶつを安置する寺です。

平安時代の深草少将の邸宅の跡と伝えられており、醍醐(山科)の随心院の小野小町に「百夜つづけて通ってきたならば、思いをとげさせよう」と言われ、通いつづけたが、百夜目に急死したとかで、思いが遂げられなかったか悲しい話が伝わっています。



小野伝説欣浄寺の説明板

墨染寺 京都市伏見区墨染町

日蓮宗深草山墨染寺は、平安時代の歌人上野峰雄かみねのおで、昭宣公藤原基経の死をいたみ、

「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染にさけ」と詠い、これは墨染色は喪に服す



花の寺墨染寺の山門

時の色である。また豊臣秀吉とその姉瑞龍尼らによって建立され、今は、本堂と庫裏のみを残しています。東に向かって進み、JR藤森駅の手前を左折し、直ぐに右折し、山科の勧修寺から名神高速道路とJRの新幹線を超して追分に出て逢坂峠を越して大津宿へ

一般庶民が旅するには

万治元年(1658)の刊行の浅井了意の『東海道名所記』の書き出しに、「いとおしき子には旅をさせよということがあり、万事おもい知るものは、旅に勝ることなし。鄙^{ひな}の長路^{ながじ}を行きすぎるには、物えきこと、嬉しきこと、腹の立つこと、面白きこと、あわれなること、恐ろしきこと、危なきこと、可笑^{おか}しいこと、とりどりさまざまなり、いやしきものあり、そのみならず、道すがらには、海、山、川、坂、平地、石原、砂原、細道、あぜ道、追分などとしてこれあり、」とあります。

旅に出るにはまず、往来切手(現在の旅券=身分証明書)が必要です。

切支丹^{きりしたん}でないこと、旅の目的、旅先で万一死んでも、こちらに知らせなくてもいいから葬ってくれなど。

旅に出る時は、家族と水^{みず}杯^{さかずき}を交わして、親族や親戚が次の宿駅まで送り、さらに、また、その中の代表がもう一つ先の宿駅まで送ります。村や講などの代表で寺社などに参る時も同様です。旅に出るにはこれだけ大変だった訳です。

道中の持ち物 道中や人によって多少ちがいます。

衣類・脇差・三尺手拭・頭巾・脚絆^{ずきん}・股引^{きやほん}・足袋^{ももひき}・下おび・扇^{やたて}・矢立(携帯の記用具)・湯手拭い・はな紙・小手拭い・道中記・心覚え手帳・銭袋・大財布・小財布^{きんちやく}・巾着^{きんちやく}・耳かき・きり^{すずりばこ}・小硯箱^{そろばん}・小算盤^{はかり}・秤・大小風呂敷・薬・薬袋・針糸・髪結い道具・たばこ道具・提灯・ろうそく・付け木・合羽・菅笠^{すげがさ}・手行李・弁当箱・綱三筋(洗濯藻のぬれた物を干すため)・吸(水)筒等。

持ち物の中で一番苦勞したのは、お金です。『久右衛門の旅日記』出田恒治氏(守口市)によると、天保10年(1839)に、久右衛門が江戸に下った時の費用によると。

2月5日から18日の14日間。総費用 16貫148文に小遣い1貫805文。

※銭1貫は1,000文。1文13円として今の金に計算すると、233,389円。

お金は、一文銭は襟の中やふんどしのひもに縫い付け、盗難にあわないように工夫し、重いお金を持ち歩くので大変だったと思います。

※資料によって相違はありますが、1泊2食300~200文前後、草履は16文ほどで3日、天気や歩く場所により1日しかもたない時も、昼食は70文前後、かけそばは16文ほど、渡し船賃は3~5文程度でした。

道中用心心得の事

- ①途中より道連れを同道の体にて泊まる給うべからずこと。
- ②良薬などとも人に与うべからず。人より貰^{もら}い薬も用ゆべからず。
- ③人の乗りたる馬に荷物付けるべからず。
- ④近道けっして通るべからず。 ⑤女道連れにいたすべからず。
- ⑥大酒、遊女ぐるい、けんか、口論、国自慢の咄し、勝負事無用。
- ⑦宿役人、宿帳、名前いつわりを申さず。国所をよく記して申すこと。
- ⑧平人として御宇寺院の符、帳面など、所持致し申す間敷きこと。
- ⑨旅籠屋について第一に火の用心、戸締まり、湯に入る時、金銀は人に預け申すまでもなき事、また座敷の方角心得て申す可^べきこと。脇差荷物は旅籠屋の主人に相預^{よろし}け申す可^べき事。 京都三条通り「松屋吉兵衛」が出した『浪華議定書』より

※旅人が心配したことは、旅の留守 内へも胡麻(護摩)^{はえ}の蠅(灰)つき
旅行中の心得と注意すべきこと

- 遠い道を歩く時、手を振って歩くと、血が下がつて肩が張る。手の親指を内に入れて握る。
- 1斗の米を1升にして持ち歩くには、南天の葉を水に浸して、汁を絞りそれに米を漬ける。
- 船に酔わない。塩をへその中に入れ上から紙を貼る。酔ったら鼻にこよりを入れクサメをすると良い。
- 酒嫌いになる薬。鶉^うの鳥^{ふん}の糞を黒焼きにし水を飲み、一滴の酒を飲む。
- 声がつぶれたら。大根の汁に生姜の汁を交ぜて飲むと治る。
- 河豚^{ふぐ}の毒に当たると。するめを焼いて食^{げどく}べると解毒する。
- 暑氣に当たったとき。木賊^{とくさ}を煎じて飲むべし。
- 手足が冷えないようにするには。コショウの実を二つは割りにして、ほうろく^こでよくいって、焦がし、紙に包みへそこに当てておく。
- 馬に乗るとき。手の裏に指で「南」の字を三回かくと落馬しない。
馬の汗を、目に入れないように注意する毒である。朝のうちに乗る。
- 便秘のまま馬に乗らない。○悪い草履は足を痛めるので早めに替える
- 昼食は1～2杯ずつ食べ、空腹になったら何度も少しずつ食べる。大食は道中に支障となる。 ○空き腹で風呂に入るな。

京阪地方の発展に大きな影響を与えた京阪電車 開通 100年

江戸時代に入り、五街道を中心に街道が整備され、宿駅制度が設置され、街道筋には商業とともに手工業が発展し、通信も飛脚制度が整いました。移動手段としては、勿論徒歩が中心ですが、駕籠や地形によっては、一度に多くの人を運ぶ船が利用されました。

京阪地方でも、淀川の三十石船が主要で、大坂・伏見間を12時間ほどかかり、伏見・大坂間は、上りの半分ほどでした。

その後、文明開化より、淀川にも蒸気船が8時間で、70人(100人説も)を乗せ運航されました。

明治5年には京都での博覧会のために、造船された新造西洋造屋形舟では、1時間も早く7時間で伏見に着きました。

その後、鉄道も日本ではイギリスの資金や技術で、新橋・横浜間 29 kmを53分で、1日9往復しました。

京阪地方での鉄道は、明治9年(1876)7月に大阪～向日町間が開通し、同年9月には京都まで開通しています。

鉄道の開通で、淀川右岸の鉄道沿線地域は人も物資も動き、商工業の発展に大きな影響を与え発展していきました。

その反面、淀川左岸は、京街道や淀川の水運で江戸時代までは先端地域でしたが、淀川右岸の鉄道の開通で、左岸地域は置去りになっていました。そんな時、明治36年(1903)畿内電気鉄道株式会社が設立され、明治39年京阪電気鉄道株式会社と社名変更されました。

鉄道を敷くために、伏見から大阪地域は底湿地でルートを選定には大変で、道路併用区間が3分の1で、後は鉄道の専用路線としたのです。

守口では、最初は、庭窪の中心部の佐太から枚方へ通じる計画でしたが、電車の通るルートに当たる大地主が猛反対しました。

庭窪の地主が大反対した理由は、先祖代々の耕地が減ることは勿論、守口市史『市広報』第409号によると、「その時分から百姓仕事はえらいと人に敬遠されがちでしたから、きっと電車が通ったら沿線のみみんなは大阪方面へ出ていってしまう。そうなると地主は田をたがやすべも知らないで、たちまち困ってしまうじゃないかと開通に地主が猛反対したんです。だから庭窪を通らず門真へ抜けてしまった。考えが単純だったですね」とあります。

はじめは高麗橋を起点と考えていましたが、天満橋に変更し、明治41

年(1908)10月四区工に分け軌道工事が始まり、明治43年4月には天満橋から五条間が開通しました。時間は100分かかりました。この年に枚方を全国に名をうった、第1回菊人形が香里遊園地で開催されました。

京阪電鉄の開通で淀川右岸に取り残されていた左岸地方も活況^{かつきょう}を浴びるようになり、沿線住民は大歓迎しました。

開通が予定より遅れ4月15日となり、開通から3日間は全線5割引きでした。※京阪電車のお陰で、明治44年10月には電灯もつくようになりました。

京阪電車が、開通した頃の守口町でのエピソードを紹介します。

『大阪朝日新聞』明治43年4月15日 「守口は氏神の報告祭を行い、提灯行列国旗等を以て全町を飾り、且付近の佐太来迎寺に於ては去る12日より宗祖大師の遠忌就行中にして、同所天満宮の桜もポチポチ咲き初めれば定めて賑ふ事なるへし」

『市広報』第409号 元守口市教育長の日野俊導氏は、「5歳か6歳であった私は電車が通るといので、弁当持ちで見に行ったのを覚えています。」

また、元郵便局長の西田寛二氏は、「開通のとき、守口からはとても京都行きに乗れなかった。大阪からすでに満員でしたから」と云っておられます。

電車の開通が珍しく、駅の付近には見物人がいっぱい屋台が出たり、子どもたちには折り返しの一寸だけ乗せてくれるので、大よろこび、また、電車賃は守口・天満橋まで、5銭、定期を買えば90銭、当時砲兵工廠などへ通っている若者は、下駄が8銭で、1ヶ月に3足履きつづいても24銭とあって電車での通勤する者は少なかったとあります。

※電車賃は、1区5銭、天満橋／五条間を35銭としていましたが、京都・大阪間が40銭であったので、京阪電車も同額にしたようです。

明治43年の秋、摂津・河内で陸軍特別大演習の工兵隊の架橋をご覧になるため、10月3日に難宗寺が御仮宿所になり、その時、堂脇橋(大阪電気通信大学高校)の所に臨時の停留所を設け、ここから難宗寺まで、人力車で行かれました。現在は、京阪電車高架下に記念碑があります。

昭和18年 阪神急行電鉄株式会社(後の阪急電鉄株式会社)と合併。

昭和20年 交野電気鉄道株式会社を譲受。現在の交野線。

昭和24年 京阪神急行電鉄株式会社分離。京阪電気鉄道株式会社発足。

昭和25年 特急列車運転。

昭和38年 京阪本線を淀屋橋まで延伸。

昭和60年 京阪百貨店開業。

平成20年 中之島線(中之島～天満橋)開通。

大坂と大阪

文中に「大坂」と「大阪」の使い方にあいまいなところがありますが、大阪の「阪」の字に「坂」が当てられていました。江戸時代は一般に「坂」が多く使われていましたが、しかし、江戸時代の文書や記録類などにも時には「阪」が使われていましたが、明治になって「坂」は土に返るとか、転がり落ちるなど、縁起が悪いから「盛ん・ゆたか・多く」の意味をもつ阜(阪=こごと)にして「阪」としました。

参考・引用の文献

著者	著書名	発行所
大阪府史編集専門委員会	大阪府史	大阪府
新修大阪市史編纂委員会	大阪市史(第3・4巻)	大阪市
守口市史編纂委員	守口市史	守口市
門真市史教育委員会編	門真市史	門真市
寝屋川市誌	寝屋川市史	寝屋川市役所
児嶋幸多氏	宿 駅	至文堂
菊田太郎氏	東海道守口駅	柳原書店
松田太郎氏	北河内五市の歴史を探る	
河野宝槌氏	郷土守口というところ	
中島三佳氏	東海道五十七次 京街道	平凡社'
	日本歴史地名大系第28巻	小学館
	日本文化の原型	皇都書林/浪華書林
青木美智男	河内名所図会	
出雲路文治郎氏他	淀川兩岸一覽図絵	山川出版社
暁 晴翁氏	京都府の歴史	毎日新聞社
赤松俊秀氏他	街道散策	山川出版社
山岸良衛氏	大阪府の歴史散歩上	松籟社
大阪府の歴史散歩編集委員会	淀川ー自然と歴史ー	向陽書房
鉄川 精氏	淀川往来	
上方史蹟散策の会編	北河内の尾宮	学習研究社
北河内瑞穂会	天下の台所・大坂	教研出版KK
脇田 修	日本史辞典	守口市教育研究会
	中学歴史資料郷土	社会科中学校部会ひらり
	守口の歴史	枚方文化観光協会
	ひらり枚方	枚方市教育委員会
	市立枚方宿鍵屋資料館	
	展示案内	
	歩いて見よう草津宿	草津市教育委員会
	朝日旅の百科6 洛南	朝日新聞社
	名城名鑑上	人物往来社
	歴史の散歩道	大阪市土木技術協会
	歴史の散歩道(大阪市史蹟連絡遊歩道)	大阪市土木技術協会
	枚方の遺跡と文化財	枚方市教育委員会
	東海道・中山道および日光街道	久右衛門の旅日記

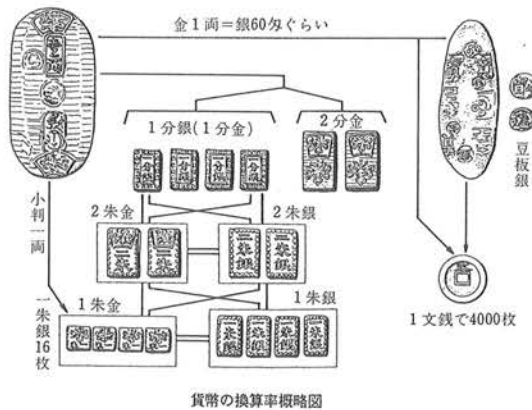
大類 伸
藤本 篤

出田恒治氏
十石舟/三十石船の旅
伏見探訪地図
伏見各種の
パンフレット

貨幣の換算率(1609年)

金1両=4分 1分=4朱
銀1貫=1000匁
銭1貫=1000文
金1両=銀50匁=銭4貫文
(のち1両=銀60匁)

図説歴史散歩事典
(山川出版)



2010年7月

著者 岸田 護
昭和12年 京都府生まれ
守口門真歴史街道推進協議会
歴史顧問
守口市文化財研究会 参与
守口市成人基礎学習講座
(あけぼの教室) 指導員

東海道五十七次 宿場町イラストマップ



東海道 守口宿

東海道は普通、品川宿から大津宿まで五十三次といわれ、街道は江戸・日本橋から京都・三条大橋までとされていますが、これは巷間でそう呼ばれていただけで幕府が公称した東海道は品川宿から大津宿を経て守口宿まで五十七次とされ、幕府の公文書や、現在守口に残る宿駅に関する文書には「東海道守口宿」と記されています。

そして東海道の宿駅起立は、後に種々の理由から追加指定せられたものを除き、一般には慶長六年(1601年)とされています。守口宿についてはその年月を明かして得ないが、「諸役免許文」の日付は、元和七年十二月十九日(1621年)とあって、東海道諸宿では古いものの方に属することが窺えます。

東海道 宿村大概

村地三右衛門御代官所
河内国茨田郡
守口宿
江戸三拾五里四町
大坂五里

由緒書村地三右衛門御代官所
宿村長次拾七軒
一、宿内町並南北拾五町五拾五間
天保十四年
一、宿内大別七百六拾四人 内 男三百七拾一人 女三百九拾四人
一、宿内惣家数七百七拾七軒

本陣 凡建肆四拾肆
門構・玄關附
諸末陣無之
旅籠屋式拾七軒
内 大五軒
中 九軒
小 拾三軒

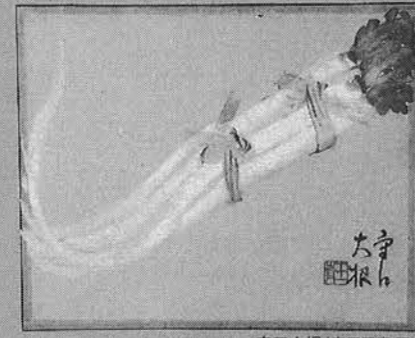
一、地字免許五千坪

以下略

(原本 遊佐傳物館蔵)



往時の問屋場風景(直原玉青画)



守口大根(直原玉青画)

- | | |
|-------|----------|
| 日本橋 | 東京都中央区 |
| 品川宿 | 東京都品川区 |
| 川崎宿 | 神奈川県川崎市 |
| 神奈川宿 | 神奈川県横浜市 |
| 保土ヶ谷宿 | 神奈川県横浜市 |
| 戸塚宿 | 神奈川県横浜市 |
| 藤沢宿 | 神奈川県藤沢市 |
| 平塚宿 | 神奈川県平塚市 |
| 大磯宿 | 神奈川県中郡 |
| 小田原宿 | 神奈川県小田原市 |
| 箱根宿 | 神奈川県足柄下郡 |
| 三嶋宿 | 静岡県三島市 |
| 沼津宿 | 静岡県沼津市 |
| 原宿 | 静岡県沼津市 |
| 吉原宿 | 静岡県富士市 |
| 蒲原宿 | 静岡県藤原郡 |
| 由比宿 | 静岡県藤原郡 |
| 興津宿 | 静岡県清水市 |
| 江尻宿 | 静岡県清水市 |
| 府中宿 | 静岡県静岡市 |
| 丸子宿 | 静岡県静岡市 |
| 岡部宿 | 静岡県志太郡 |
| 藤枝宿 | 静岡県藤枝市 |
| 嶋田宿 | 静岡県島田市 |
| 金谷宿 | 静岡県榛原郡 |
| 日坂宿 | 静岡県掛川市 |
| 掛川宿 | 静岡県掛川市 |
| 袋井宿 | 静岡県袋井市 |
| 見附宿 | 静岡県磐田市 |
| 浜松宿 | 静岡県浜松市 |
| 舞坂宿 | 静岡県舞坂町 |
| 新居宿 | 静岡県浜名郡 |
| 白須賀宿 | 静岡県湖西市 |
| 二川宿 | 静岡県豊橋市 |
| 吉田宿 | 静岡県豊橋市 |
| 御油宿 | 静岡県豊川市 |
| 赤坂宿 | 静岡県宝飯郡 |
| 藤川宿 | 静岡県岡崎市 |
| 岡崎宿 | 静岡県岡崎市 |
| 知鯉鮒宿 | 静岡県知立市 |
| 鳴海宿 | 静岡県名古屋市 |
| 熱田宿 | 静岡県名古屋市 |
| 桑名宿 | 三重県桑名市 |
| 四日市宿 | 三重県四日市市 |
| 石薬師宿 | 三重県鈴鹿市 |
| 庄野宿 | 三重県鈴鹿市 |
| 龜山宿 | 三重県亀山市 |
| 関宿 | 三重県鈴鹿郡 |
| 坂下宿 | 三重県鈴鹿郡 |
| 土山宿 | 滋賀県甲賀郡 |
| 水口宿 | 滋賀県甲賀郡 |
| 石部宿 | 滋賀県甲賀郡 |
| 草津宿 | 滋賀県草津市 |
| 大津宿 | 滋賀県大津市 |
| 伏見宿 | 京都府京都市 |
| 淀宿 | 京都府京都市 |
| 枚方宿 | 大阪府枚方市 |
| 守口宿 | 大阪府守口市 |
| 京橋 | 大阪府大阪市 |

表紙画作者 プロフィール



村岡好弼氏

- 門真絵ふでの会 講師
- 夢工房アート倶楽部 会員
- 守口門真歴史街道推進協議会
歴史・文化スケッチ画協力

- 1940年生まれ ● 山口県出身 ● 63歳で大手企業退社後、絵画を始める
- 2004年講談社フェーマススクール(KFS) 美術入門コース卒業
- その後、'05年より夢工房アート倶楽部入会、アート展出品、参加
- '07年12月・「ギャラリー・ルーエ」絵画展出品
- '08年8月・「京阪百貨店」夢グループ展出品

現在、門真市堂山町に在住。門真えふでの会の講師として活躍中。

'06年6月より毎年「心齋橋宇治園」ギャラリー 個展)

'09年・フランス、ベルギー '10・ヴェニス、クロアチアスケッチツアー

'09年、'10年「夢工房アート展」出品

'09年12月「ギャラリー・ルーエ」絵画展出品

- 趣味・特技 テナーサックス演奏 — '05年7月に企業在職中のバンドサークル仲間と再会を機に“グリーン・ノーツ”を結成。以来、おやじバンドとしてボランティアライブを中心に演奏活動。

第2回 門真歴史検定に引き続き第3回京街道四宿歴史検定テキスト表紙を飾るイラスト画作成、協力。

'10. 第3回 京街道検定テキスト

2010年8月1日 第1版 発行

編集・監修 郷土史家 岸田 護

発行 守口門真歴史街道推進協議会・第3回京街道四宿歴史検定委員会
〒570-0038 守口市河原町10番5号 守口ロイヤルパインズホテル内
TEL 06-6909-8531 ・ FAX 06-6909-0034

印刷 (有)キタ印刷所

定価 1,500円 (税込)

「伏見・寺田屋 淀・淀城址 枚方・鍵屋 守口・文祿堤」



画：直原玉青



（淀川一景 山崎錦徳）

**東海道五十七次
京街道**

東海道五十七次
守口宿小唄
直原玉青
作詩作曲

一、五十三次あ 江戸から京よ
伏見寺田屋 淀は城
枚方鍵屋を後にして
守口ちゃ よいとこ終の宿

二、五十七宿 次々訪ね
文祿堤の守口宿で
一風呂浴びて一献酌めば
旅の疲れも何のその

三、快速列車 今なら走る
昔の人はたくましい
昔の人に負けてはならぬ
元氣一杯頑張ろう
元氣一杯頑張ろう

著者・京街道四宿歴史検定 監修

岸田 護

(守口門真歴史街道推進協議会 歴史顧問)

守口門真歴史街道推進協議会・'10.京街道検定委員会